兵庫県文化財調査報告　第 491 冊

丹波市

山田大山古墳群

-（砂）大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 29(2017) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

丹波市

山田大山古墳群

－（砂）大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 29(2017)年 3 月

兵庫県教育委員会

調査地点遠景　南西から

調査地点（大山谷川）近景　南から

調査区遠景　南から

調査区全景　北西から

2 号墳石室出土土器

6 号墳出土土器

5 号墳石室土器出土状況

5 号墳石室出土土器

例　言

1　本書は、丹波市春日町山田に所在する山田大山古墳群の発掘調査報告書である。

2　本調査は、（砂）大山谷川通常砂防事業に伴うもので、丹波県民局丹波土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移

山田大山古墳群の調査は周辺の分布調査の開始から本発掘調査の終了まで、平成 23 年度より平成 26 年度に亘っており、その詳細は第１章にあげた。本報告書に直接関わる試掘調査・本発掘調査は以下の通りである。

なお、5 号墳については石室を解体せず、現地にて保存している。

（発掘作業）

確認調査　平成 25 年 8 月 27 日～ 8 月 28 日（実働２日間）
実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成 26 年 6 月 9 日～ 26 年 9 月 16 日（実働 61 日）
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：有限会社　山中掬水緑化

確認調査　本発掘調査期間内

（出土品整理作業）　平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の編集・執筆は、第４章第４節を除き公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　西口圭介・兵庫県立考古博物館　鐵　英記が行った。

5　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

6　その他の記載項目

・　調査成果の測量は、電子基準点西紀・福知山・青垣。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第５系に属する。
・　本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
・　空中写真測量は、（株）GIS 関西に委託した。

・　遺物写真撮影は、株式会社クレアチオに委託した。
・　本書の図版 1「調査区とその周辺」は、丹波県民局提供の 1/500 工事用図面を縮小して使用した。
・　現地の遺構実測は、調査員と調査補助員が行った。
・　遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県まちづくり技術センター嘱託員が行った。
・　5 号墳の炭化物ついて、放射性炭素年代（AMS 測定）を（株）加速器分析研究所に依頼した。
・　発掘調査にあたって岡山理科大学　亀田修一先生よりご指導を賜った。

また、山田地区自治会及び現地に近接する特別養護老人ホーム『おかの花』には詰所用地・車両通行・駐車場使用などにおいて多大なご厚意・ご配慮を賜った。本発掘調査中には「丹波市水害」が発生し、本調査区周辺についても被害は甚大であったこともあり、これらのご厚意・ご配慮について特に記して感謝の意を表すものである。

目　次

本　文　目　次

第１章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… (1)
第２節　各調査・整理作業の経過と概要 …… (1)
第２章　位置と環境
第１節　地理的環境 …… (3)
第２節　歴史的環境 …… (3)
第３節　山田大山古墳群の立地と周辺の遺跡 …… (7)
第３章　確認調査の概要
第１節　調査の方法 …… (9)
第２節　調査の結果 …… (9)
第４章　本発掘調査の成果
第１節　調査区の概要 …… (11)
第２節　遺　構 …… (12)
２号墳 …… (12)
６号墳 …… (13)
５号墳 …… (14)
石棺墓　SX10 …… (16)
不明石組遺構 SX11 …… (16)
中世墓状遺構 SX08 …… (17)
中世墓状遺構 SX09 …… (17)
中世墓状の集石遺構 SX02 …… (17)
ピット群・焼土坑群・丹波焼甕・銭貨 …… (18)
火葬址遺構 SX07 …… (18)
第３節　遺　物 …… (20)
２号墳の出土遺物 …… (20)
６号墳の出土遺物 …… (20)
５号墳の出土遺物 …… (21)
その他の出土遺物 …… (21)
第４節　山田大山古墳群における放射性炭素年代（AMS 測定） …… (24)
第５章　まとめ …… (27)

表　目　次

表１　周辺の遺跡 …… (6)
表２　遺物観察表１ …… (22)
表３　遺物観察表２ …… (23)

表４　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）……(25)
表５　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値）……(25)

本　文　挿　図

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡
第２図　［図版］暦年較正年代グラフ（参考）

図　版　目　次

図版１　調査区とその周辺
図版２　３号墳確認調査
図版３　第２次確認調査トレンチ土層断面
図版４　調査区全体図
図版５　２号墳・６号墳全体図
図版６　２号墳全体図
図版７　２号墳・６号墳　墳丘・周溝土層断面図１
図版８　２号墳・６号墳　墳丘・周溝土層断面図２
図版９　２号墳・６号墳　墳丘・周溝土層断面図３
図版 10　２号墳・６号墳　墳丘・周溝土層断面図　土層名１
図版 11　２号墳・６号墳　墳丘・周溝土層断面図　土層名２
図版 12　２号墳　墳丘及び石室の状況
図版 13　２号墳石室１
図版 14　２号墳石室２
図版 15　２号墳遺物出土状況図
図版 16　６号墳　墳丘及び石室の状況
図版 17　６号墳石室
図版 18　６号墳石室遺物出土状況図
図版 19　５号墳全体図
図版 20　５号墳及び上層の遺構
図版 21　５号墳　墳丘・周溝土層断面図１
図版 22　５号墳　墳丘・周溝土層断面図２
図版 23　５号墳　墳丘・周溝土層断面図　土層名１
図版 24　５号墳　墳丘・周溝土層断面図　土層名２
図版 25　５号墳石室　平面図・立面図
図版 26　５号墳石室遺物出土状況図
図版 27　石棺墓 SX10
図版 28　不明石組遺構 SX11
図版 29　中世墓状石組遺構 SX08・SX09
図版 30　ピット群・中世墓状集石遺構 SX02・焼土坑群
図版 31　火葬址遺構　SX07　上層
図版 32　火葬址遺構　SX07　下層
図版 33　２号墳出土遺物１
図版 34　２号墳出土遺物２
図版 35　６号墳出土遺物
図版 36　５号墳出土遺物
図版 37　３号墳・その他の出土遺物

写　真　図　版　目　次

巻頭図版１　調査地点遠景　南西から・調査地点（大山谷川）近景　南から
巻頭図版２　調査区遠景　南から・調査区全景　北西から
巻頭図版３　２号墳石室出土土器・６号墳出土土器
巻頭図版４　５号墳石室土器出土状況・５号墳石室出土土器
写真図版１　空中写真１
写真図版２　空中写真２
写真図版３　調査前の状況
写真図版４　周辺の古墳
写真図版５　確認調査
写真図版６　１号墳区の調査
写真図版７　２号墳区の調査
写真図版８　２号墳　1
写真図版９　２号墳　2
写真図版10　２号墳　3

写真図版 11　２号墳　4
写真図版 12　２号墳　5
写真図版 13　２号墳　6
写真図版 14　２号墳　7
写真図版 15　２号墳　8
写真図版 16　２号墳　9
写真図版 17　２号墳　10
写真図版 18　６号墳　1
写真図版 19　６号墳　2
写真図版 20　６号墳　3
写真図版 21　５号墳　1
写真図版 22　５号墳　2
写真図版 23　５号墳　3
写真図版 24　５号墳　4
写真図版 25　５号墳　5
写真図版 26　５号墳　6
写真図版 27　５号墳　7
写真図版 28　５号墳　8
写真図版 29　５号墳　9
写真図版 30　５号墳　10
写真図版 31　石棺墓
写真図版 32　不明石組遺構 SX11・中世墓状石組 SX08　1
写真図版 33　中世墓状石組 SX08　2
写真図版 34　中世墓状石組 SX09
写真図版 35　中世墓状石組 SX02・ピット
写真図版 36　焼土坑
写真図版 37　火葬址遺構 1
写真図版 38　火葬址遺構 2
写真図版 39　作業風景他
写真図版 40　各古墳出土遺物
写真図版 41　２号墳出土遺物 1
写真図版 42　２号墳出土遺物 2
写真図版 43　６号墳出土遺物
写真図版 44　５号墳出土遺物
写真図版 45　３号墳・その他の出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

兵庫県丹波県民局丹波土木事務所が、丹波市春日町山田に所在の大山谷川で通常砂防事業を計画した。

この計画を受け平成 23 年に実施した分布調査（遺跡調査番号：2011082）において、事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である山田大山古墳（遺跡番号:790029）と古墳の可能性がある２箇所の集石遺構（集石遺構 1・2）が存在することが判明した。

平成 25 年度に入り、工事範囲の測量が完了したことを受け、再度詳細な分布調査を実施した（遺跡調査番号：2013100）ところ、砂防堰堤本体に山田大山古墳の一部と集石遺構１がかかり、工事用道路に集石遺構 2 がかかることが判明した。

上記の分布調査結果を受け、丹波県民局長の依頼（平成 25 年 8 月 6 日付け丹波（丹土）第 1373 号）により、２箇所の集石遺構について、兵庫県教育委員会が、確認調査を実施したところ（遺跡調査番号：2013107)、集石遺構 1・2 は共に６世紀後半～７世紀前半に築かれた横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが判明した。

これにより事業地内には以前から存在が知られていた山田大山古墳と共に３基の古墳が存在することが明らかになった。確認調査の成果をふまえ、以後、山田大山古墳を山田大山古墳群１号墳、集石遺構１を同２号墳、集石遺構２を同３号墳と周知・呼称することとした。

確認調査結果と工事計画を照合したところ、1 号墳の周溝部および２号墳が砂防堰堤の設置により影響を受ける箇所に位置することが判明した。また、3 号墳については損壊を免れることが判明した。

以上の結果から、兵庫県教育委員会では兵庫県丹波県民局丹波土木事務所からの依頼（平成 26 年 4 月 15 日付け丹波（丹土）第 1893 号）に基づき、堰堤工事により影響を受ける箇所の本発掘調査を実施することとなった（遺跡調査番号：2014008)。

また、調査の過程で本発掘調査範囲内に新たに２基の古墳（５号墳･６号墳）が存在することが判明し、それについても調査を実施した。

また、調査区北側において遺構の存在する可能性が生じたため、トレンチ 2 本を設定し、確認調査を実施した。

なお、５号墳は、構築される堰堤の内側に位置することから、丹波土木事務所との保存協議の結果、現状保存を図ることとなり、石室内に砂を入れて埋め戻した。

第２節　各調査・整理作業の経過と概要

〔分布調査　遺跡調査番号　2011082〕

所在地　　丹波市春日町山田

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部　調査第 2 課　別府洋二　長濱誠司

調査期間　　平成 23 年 4 月 25 日

調査面積　800 ㎡

〔分布調査　遺跡調査番号　2013100〕

所在地　丹波市春日町山田

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部埋蔵文化財課　主査　多賀茂治

調査期間　平成 25 年 7 月 29 日

調査面積　1000 ㎡

〔確認調査　遺跡調査番号　2013107〕

所在地　丹波市春日町山田

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部埋蔵文化財課　主査　多賀茂治

調査期間　平成 25 年 8 月 27 日～ 28 日（実働 2 日間）

調査面積　20 ㎡

〔本発掘認調査・確認調査　遺跡調査番号　2014008〕

所在地　丹波市春日町山田

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当者　公益財団法人　兵庫県まちづくり技術センター

埋蔵文化財調査部　調査第 2 課副課長　西口圭介・同　鐵　英記

調査補助員　西本寿子・竹本正昭・滝町昌寛

現場事務員　中祖晴海

室内作業員　西山はるみ

調査期間　平成 26 年 6 月 9 日～ 26 年 9 月 16 日（実働 61 日）

調査面積　本発掘調査　667 ㎡・確認調査　28 ㎡

工事請負　有限会社　山中掬水緑化

〔整理作業　平成27年度・平成28年度〕

平成 26 年度に現地にて土器洗浄を実施し、その他報告書刊行までの作業は平成 27 年度・平成 28 年度に実施した。

・担当職員（平成 27 年度）

調査担当者　西口圭介

整理保存課　菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀

・担当職員（平成 28 年度）

調査担当者　西口圭介

整理保存課　菱田淳子・池田征弘・岡本一秀

・担当嘱託員・日々雇用職員（平成 27 年度・平成 28 年度）

今村直子	吉村あけみ	友久伸子	嶺岡美見	島村順子
上西淳子	小野潤子	藤池かづさ	石田典子	佐々木誓子
池田悦子	寺西梨紗	宮田麻子	上田沙耶香	佐々木愛
前田陽子	古谷章子	八木和子	河合たみ	

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

山田大山古墳群は兵庫県丹波市春日町山田に所在する。

当古墳群が位置する丹波市は近代以前においては旧丹波国氷上郡に属し、平成 16 年 11 月に旧氷上郡６町（柏原町・氷上町・青垣町・春日町・山南町・市島町）が合併して誕生した。平成 28 年 10 月末時点で丹波市の人口は約 6.6 万人、面積は約 493㎢である。兵庫県の中央東部に位置し、市内西部を南北に日本標準時子午線（東経 135 度線）が通っており、北東で京都府、南東で篠山市、南西で多可町、南で西脇市、北西で朝来市と境を接している。

地形は中国山地の東端に位置し、最高峰を粟鹿山（962.３ｍ）とし、四周を 300 ｍ～ 800 ｍの山塊に囲まれている。その山々を縫って、日本海側に注ぐ由良川の上流にあたる竹田川・黒井川と瀬戸内海に注ぐ加古川の上流にあたる佐治川・篠山川・牧山川・柏原川の流域それぞれに狭小な盆地が形成されている。氷上町石生水分（海抜 95 ｍ）に由良川と加古川の中央分水界があり、日本で一番低い地点での分水界となっている。

山田大山古墳群のある春日町山田は市内東南部に位置する。三方を山に囲まれ、南に開いた谷部にあたり、黒井川が東西に流れている。

第２節　歴史的環境

前述のように当古墳群が位置する丹波市には、由良川と加古川の国内で最も低位に分水界があることから、様々な意味で南北交流の経路であったと考えられる。

旧石器時代・縄文時代

丹波市内の遺跡は旧石器時代に遡る。七日市遺跡（春日町）ではＡＴ火山灰層下位から広い範囲で旧石器時代の遺物が出土している。局部磨製石斧が数多く含まれており、分水界が大型動物の季節移動の経路である可能性も含め、大型動物狩猟のためのキャンプサイトではないかと推定されている。

この他に市内では梶原遺跡（市島町）で石器製作跡が検出されているほか、篠山市板井寺ヶ谷遺跡ではＡＴ火山灰層の上下で石器製作跡が検出され、下層ではサヌカイト製石器ブロックとチャート製石器ブロックが併存しており、二つのグループが同一地点を使用していたことが想定される。

縄文時代では国領遺跡（春日町）で草創期の石器製作跡が検出されているほか、下野村遺跡（春日町）、多利小向遺跡（春日町）、梶原遺跡で土器が出土している。

弥生時代

弥生時代に入ると人々の生活痕跡がいっそう明確となる。前期に遡る遺跡では的場遺跡（市島町）、横田遺跡（氷上町）があり、七日市遺跡でも集落の形成が始まる。中期になると七日市遺跡が地域の中心集落として拡大をはじめる。高速道路建設に伴う大規模調査により、集落域・生産域・墓域が確認されるとともに、大量の遺物が出土している。また、野々間遺跡からは七日市遺跡で祭祀に用いられたと思われる銅鐸２点が埋納された状態で見つかっている。しかし、七日市遺跡は後期に入ると衰退し、そのかわりに

国領遺跡に中心が移っていくようである。また、前述の的場遺跡や横田遺跡でも断続的に集落が営まれており、後期の土器では京都丹波や山陰地方との交流を物語るものが出土している。墳墓では七日市遺跡北側の丘陵上に東山墳墓群（春日町）があり、的場遺跡に隣接する上ノ段遺跡（市島町）でも終末期の周溝墓・木棺墓が見つかっている。

古墳時代

丹波市内の前期古墳のうち、中心的な首長墓と目されるのはわずかで、径 42 mの円墳で三角縁神獣鏡の出土した親王塚古墳（春日町）や全長 48 mの前方後円墳である丸山 1 号墳（山南町）が挙げられるに過ぎない。ただ、丸山 1 号墳は後円部の主体部から大量の鉄製品の他、鏡、車輪石などが出土しており畿内の影響を強く受けた古墳である。また、小首長墓と考えられる古墳に、おさんの森古墳群（柏原町）、萱刈坂古墳群（柏原町）、久良部 1 号墳（市島町）などが挙げられるが、春日町域ではこの時期の古墳は確認されていない。

中～後期に入ると二間塚古墳（春日町）、桂谷寺古墳（春日町）、稲塚大塚古墳（春日町）といった全長 40 m前後の前方後円墳が首長墳として築かれる。稲塚大塚古墳からは明治から大正時代に刀剣・馬具・玉類などが出土したと伝えられている。また、丘陵部を中心に多数の小規模墳が築造されるものの、野坂大谷古墳群（山南町）、親王塚北野古墳群（春日町）、七ツ塚古墳群（柏原町）などを除けば、数基単位の小規模な古墳群が大半を占める。これらの古墳群には多利向山古墳群（春日町）、火山古墳群（春日町）などのように木棺直葬墳と横穴式石室墳が混在するものが認められる。

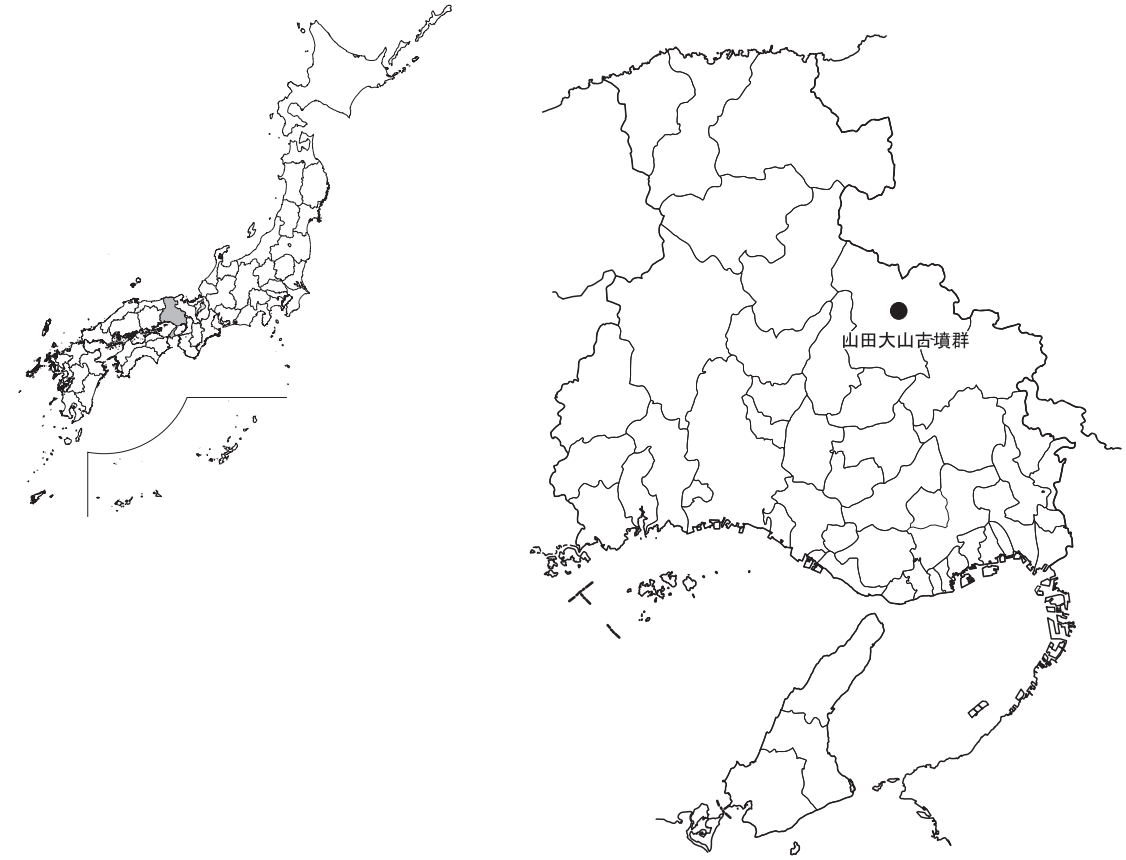
山田大山古墳群と同様、横穴式石室が導入された時期に築かれた古墳も市内に点在して認められる。井原至山古墳（山南町）、梶 1 号墳（山南町）や前述の多利向山古墳群中のＣ２号墳は方形に近い平面形の石室を持つ。井原至山古墳、多利向山Ｃ２号墳はＭＴ 15 型式並行期のものと位置づけられるが、後者の方がより原型に近いものと評価されている。これに続くものは坂古墳群（春日町）の１・２号墳である。いずれも全長 20 m前後の前方後円墳で、この地域の首長墓と考えられる。坂２号墳から１号墳へ変遷し、奥壁に三角隅持ち送り技法を用いた横穴式石室をもつことで知られている。また､棚原桜塚古墳（春日町）からは金銅装太刀が出土しており、丹波市内では唯一の例である。

古墳に比べて、当該期の集落遺跡のことはよくわかっていない。市内では柏原町域で三原遺跡、三原西遺跡、県長遺跡、大新屋遺跡など古墳群とセットになるような集落があり、市島町域では三ツ塚遺跡、上ノ段遺跡、梶原遺跡などがあるが、春日町域では七日市遺跡で前期の住居跡が見つかっているものの、調査例がほとんどない。おそらく、この地域では古墳時代から現在の居住域と同じ場所に移ったため、遺跡が認識されないものと考えられる。

生産遺跡としては鴨庄古窯跡群（市島町）、少し播磨側に入るが黒田庄古窯跡群（西脇市黒田庄町）で須恵器の生産が行われている。

古代

前述のように丹波市は旧国では丹波国に属し、氷上郡に相当する。氷上郡は養老令の規定では「大郡」にあたり、「倭名類聚抄」によると由良川水系の東縣と加古川水系の西縣に分割されていた。現在の春日町域は東縣の春日郷にあたる。郡衙は郡名郷である氷上郷に置かれていたと考えられるが、東縣にも郡衙に相当する施設が置かれていたと想定されている。郡衙そのものは見つかっていないが、郡衙推定地に隣接する市辺遺跡（氷上町）では倉庫と考えられる掘立柱建物群が調査され、皇朝十二銭、銅印、木簡が出土している。東縣の郡衙相当施設には、かつて里長の館跡と考えられていた山垣遺跡（春日町）を七日市



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡も含めてあてる考え方がある。

古代寺院遺跡は三ツ塚廃寺（市島町）が現在のところ唯一の例である。金堂と左右の塔が一直線上に並ぶ「新治廃寺式」の伽藍配置を持ち、隣接地では寺院に葺かれた瓦を焼いた天神瓦窯も確認されている。遺跡の性格ははっきりしないが、柏原陣屋遺跡の下層から礎石建物が見つかっており、官衙あるいは寺院の跡と考えられる。

生産遺跡としては鴨庄古窯跡群、稲塚窯跡（春日町）のほか、春日町域に野上野窯跡、野上野瓦窯跡、中山窯跡、平松八幡神社窯跡群などがあり、黒田庄古窯群でも引き続き生産が行われている。

参考文献

氷上郡教育委員会『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書 (1) ～ (5)』 1994 ～ 1998 年

各遺跡の調査報告書は割愛した。

表 1　周辺の遺跡

1.	山田大山古墳群	790029
2.	市辺遺跡	770369
3.	横田北古墳群	770454 ～ 770458
4.	坂古墳群	790021・790147 ～ 790153
5.	親王塚古墳	770298
6.	親王塚北野古墳群	770299 ～ 770356
7.	稲塚大塚古墳	790046
8.	稲塚窯跡	
9.	朝日八幡山 1 号墳	790034・790155
10.	平松古墳群	790164・790165・790058・790161 ～ 790163
11.	火山古墳群	790060・790179 ～ 790181
12.	七日市遺跡	790069
13.	山垣遺跡	790098
14.	棚原桜塚古墳	790100
15.	多利向山古墳群	790204・790205

第３節　山田大山古墳群の立地と周辺の遺跡　（図版１）

ここでは、山田大山古墳群が位置する大山谷川周辺の地形と遺跡について述べてゆく。

砂防堰堤工事を行う大山谷川は標高約 383.4 mの山頂から南へと流れだす幅３m程度の沢筋である。

大山谷川が開削し、あるいは扇状地を形成する大山谷は、標高 154 m付近から徐々に開き始め、特別養護老人ホームが立つ標高 110 m付近に至って漸く幅 100 mとなる、狭い矩形の谷である。

調査地点周辺の地形の改変は少なく、調査前は杉の植林であった。下流については標高 133 m前後から水田もしくは畑地として開墾されたと考えられる段状の造成平坦地が両岸で見受けられる。これらの平坦地もまた植林に埋もれている。

山田大山古墳群は今回の調査によって６基の古墳の存在と２基の古墳状隆起（Ａ・Ｂ）の存在が明らかとなった。このうち１号墳・２号墳・４号墳・５号墳・６号墳・古墳状隆起Ａは大山谷川の左岸、東尾根の西山裾に位置しており、3 号墳と古墳状隆起Ｂは大山谷川の右岸、西尾根の東山裾に位置している。

左岸に位置する５基のうち、5 号墳は最奥にあり、標高 147 m前後、2 号墳・6 号墳は標高 144 m前後に位置しており、東側尾根裾に沿って位置している。これら 3 基は、等高線に平行し、南面に開口している。また、下層断ち割り調査の結果、旧沢筋に立地していることが判明している。

１号墳は大山谷が大きく開く、扇状地の始まり、標高 137 m前後に位置している。2 号墳に近い径 10 m前後の墳丘をもつ円墳である。やはり、等高線に平行し、南面に開口している。

古墳状隆起Ａは明らかに横穴式石室墳の残骸であるが、墳丘は消失している。標高 135 m前後に位置しており、等高線に直交して南西方向に開口している。

4 号墳は左岸に位置する古墳のうち最も低所の標高 122 m前後に位置する。規模は 2 号墳に近く、巨大な石材が露出する横穴式石室墳である。立地は、2 号墳などとは違い、大山谷川本流ではなく、北東から合流する支流の谷筋右岸（北斜面裾）に立地し、等高線に直交して南方向に開口している。

右岸側の古墳は、3 号墳と古墳状隆起Ｂである。

3 号墳については、確認調査結果に詳しい。1 号墳の対岸、大山谷が大きく開き扇状地が始まる、標高 137 m付近に立地し、等高線に直交して南方向に開口している。南に隣接して若宮神社の記載が工事用図面にはあるが、現況では詳らかではなかった。

古墳状隆起Ｂは明らかに横穴式石室墳の残骸であるが、東半の墳丘は土地の造成によって消失している。左岸に位置する古墳のうち最も低所の標高 123 m前後に位置する。等高線に直交して東方向に開口していた可能性が高い。残存する石材の上に宝篋印塔の残欠が存在しており、周囲に中世墓が存在した可能性を想起させる。古墳状隆起Ｂは平成 26 年度後半期に丹波市教育委員会によって東半部の調査が実施されたが、その詳細は今回の報告書には生かせなかった。

以上、山田大山古墳群の分布について述べた。古墳群以外に、周辺からは古代から中世後期にかけての遺物の散布が見受けられる。これらは、植林の伐採に伴い運び出しに重機が入れられたことから表土が荒らされ、露出し、採取されたものである。Ｃ・Ｄ・Ｅ地点と仮称しておく。

Ｃ地点は標高 122 m前後の平坦地である。この地点では須恵器坏Ｂが採取された。時期は 5 号墳周溝出土 48 と同時期と考えられる。

Ｄ地点は標高 119 m前後の平坦地である。この地点では主に瓦器椀片や須恵器捏鉢片・丹波焼片など中世前期を中心とする遺物が採取できた。

Ｅ地点は標高 114 m前後の平坦地である。この地点では瓦器椀片や須恵器捏鉢片・丹波焼片などと共に瀬戸美濃製天目椀片など中世後期の遺物が採取できた。

Ｆ地点は、左岸側、4 号墳が開口する谷筋の左岸に位置する。標高 119 m前後の沢筋である。径 3 m前後の小隆起が見受けられ、石仏が倒れている。この地点に中世後期の中世墓地が存在する可能性が高い。以上、周辺の遺物散布状況について述べた。

これらの遺物（石仏以外）はすべて、当時、古墳状隆起Ｂの調査を実施していた丹波市教育委員会に現地で提出したため、詳細については今回の報告書には生かせなかったが、概ね、2 号墳区で出土した古代や中世の遺物が下流の扇状地においても採取できたことと、下流に行くにしたがって採取した遺物の時期が古代・中世前期・中世後期と新しくなること、特に扇状地の奥に古代の遺物の散布が見られることは重要である。

5 号墳において出土した古代の須恵器坏 B、中世前期の青磁碗や蔵骨器の可能性が高い丹波焼甕、あるいは火葬場の可能性のあるＳＸ 07、中世墓と考えられるＳＸ 08・ＳＸ 09 といった古墳廃絶後の遺構の造営主体が、同じ谷の下流直近に存在した可能性が極めて高いことが、遺物の採取状況から伺われるのである。

第３章　確認調査の概要

第１節 調査の方法

平成 23 年の分布調査（遺跡調査番号：2011082）によって、事業地内からは周知の山田大山古墳（遺跡番号：790029）以外に古墳の可能性がある２箇所の集石遺構が確認され、平成 25 年度に集石遺構についての確認調査を実施した。

また平成 26 年度の本発掘調査に際しては、調査区北端から新たな古墳、５号墳が検出され、加えて５号墳周辺から龍泉窯の青磁片、丹波焼等が出土したため、調査区の北側に中世墓などの遺構が存在する可能性が浮上したことから、本発掘調査区の北隣の平坦部に２本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。両年度ともに掘削は全て人力でおこない、遺構の構造や遺物の有無の確認に努めた。また、掘削完了後図面、写真によって記録を行い、埋め戻して調査を完了した。

第２節　調査の結果

平成 25 年度の確認調査　（図版１・２・37　写真図版５・45）

山田大山古墳（1 号墳）は沢筋の東に接する。古墳は直径 15 m、高さ３mほどの規模をもち、北側には周溝が巡る。盛土は上部が流失しており石室の天井石が露出している。古墳の主要部分は工事範囲から外れているが、西側裾部と周溝の一部が砂防堰堤の範囲に入る可能性が考えられる。事業地内で明確な古墳は、この山田大山古墳１基のみであり、分布調査で古墳の可能性が指摘された２箇所の集石遺構は、石材の露出は認められるが、墳丘が明確ではなかった。以下、山田大山古墳の北側にあるものを集石遺構１、西側にあるものを集石遺構２として確認調査を行い、その成果を踏まえて、山田大山古墳を山田大山古墳群１号墳、集石遺構１を同２号墳、集石遺構２を同３号墳と呼称することとした。

２号墳（集石遺構１）：西側の斜面と沢の間にある 10 m四方ほどの緩やかな平坦面に 1.0 m× 0.5 mほどの石材が２個並列しており横穴式石室の天井石のように見えるが、墳丘は明確ではない状態であった。集石の構造を確認するために、幅２m、長さ５mの１トレンチを設定し調査した。その結果、地表に露出していた大型の石材の下で、１mほどの間をあけて南北方向に並ぶ石列を確認した。これは横穴式石室の側壁であり、露出していた大型の石材は天井石であると考えられた。石室は南側に開口しており、玄室の内法で幅 1.2 mであり、長さは５m以上である。この石室を中心に墳丘を想定し周辺の地形を観察したところ、平坦地の南東に幅２mほどの溝状の窪みがあり、その延長が斜面と平坦地の傾斜変換点となって北東側に続いていることが確認できた。これは周溝の痕跡であろう。墳丘の西側については沢による浸食や土砂の堆積の影響により明確ではないが、石室中心部から８mほど南側に石室の前庭部と思われる平坦地があるので、ほぼこのあたりまでが墳丘の範囲と考えられる。

集石遺構１は横穴式石室を埋葬施設とする直径 15 m～ 18 mの円墳と考えられる。墳丘は２mほどの高さがあったと推定されるが、石室が墳丘の低い位置に構築されており、１号墳のような腰高な墳丘ではなく、低平な墳丘であったと思われる。石室は天井石の一部が失われ内部に土砂が流入しているが、残存状態は良好である。遺物はなかったが、他の古墳と同様６世紀後半～７世紀前半の古墳と考えられた。

３号墳（集石遺構２）：付近は地滑りや土取りのために大きく地形が改変されており、大きな窪地の際に石材がわずかに露出している程度であった。集石の構造を確認するために幅２ｍ、長さ３ｍの２トレンチを設定して調査をおこなった。その結果、地表に露出していた石材は横穴式石室の奥壁と左側壁の一部であることが明らかになった。露出していた側壁の石材の更に南側にも石材が続き、土取りによる窪地の壁にも側壁の石材の一部が認められるので、石室は南側に開口していると考えられる。右側壁の石材はトレンチ内では確認できなかったので、正確な幅は不明であるが、内法で１ｍ程度と思われる。奥壁の石材の際からは須恵器が２点出土した。墳丘は全く痕跡をとどめておらず、地形観察だけでは古墳の範囲が把握できないため、２トレンチの北側に幅１ｍ、長さ４ｍの３トレンチを設定した。このトレンチでは地山である岩盤を掘り込んだ周溝が確認され、古墳の北端をおさえることができた。

集石遺構２は横穴式石室を埋葬施設とする直径 15 ｍ程度の円墳であると考えられる。墳丘の西側は土取りや地滑りのために破壊されており、石室は奥壁と左側壁の一部が残存しているのみである。出土遺物や石室の構造から７世紀前半の古墳であると考えられた。

２基の集石遺構がともに６世紀後半～７世紀前半に築かれた横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが確認された。これにより事業地内には以前から存在が知られていた山田大山古墳を含め３基の古墳が存在することが明らかになった。この内、３号墳は設計変更によって損壊が免れたため、工事に影響する２号墳の全体（２号墳区）と、周溝あるいは墳裾がかかる可能性のある１号墳（１号墳区）の隣接部分に調査区を設定し、調査を実施することとなった。

平成 26 年度の確認調査　（図版１・３　写真図版５）

本発掘調査に際し、調査区北端から新たに５号墳が検出された。加えて周辺からは龍泉窯青磁碗片、丹波焼壺等が出土し、５号墳上面からは中世墓状の石組遺構が検出された。以上の点から、５号墳の北隣にある平坦部にも更に古墳や中世墓などの遺構が存在する可能性が考えられた。このため４トレンチ（旧名　試掘１　幅 1.5 ｍ×長さ８ｍ）、５トレンチ（旧名　試掘２　幅２ｍ×長さ８ｍ）の計２本を設定した。

４トレンチ：5 号墳の北側、標高 153.4 ｍ～ 150.1 ｍの南向き斜面に設定した。表土下には径５㎝内外の角礫を含む４層があり、南端には４層を切って落ち込む砂礫層３層がみられる。３層は、旧谷部を埋める砂礫と考えられる。また、4 層の下には粘性をもつ５層がほぼ全面に出現しており、南向きの傾斜面となっている。

５トレンチ：４トレンチの北側、標高 155.8 ｍ～ 153.6 ｍの南向き緩斜面に設定した。表土下に径５㎝内外の角礫を含む６層があり、４トレンチの４層に、南半には６層を切って落ち込む砂礫層５･5’層があり、４トレンチの３層に対応する。旧谷部（古い沢筋）を埋める洪水砂礫と考えられる。

両トレンチとも 10 ㎝ほど堆積した表土の下は礫混じりシルト層の自然堆積であり、遺構・遺物とも検出されなかった。両トレンチでは、南半に谷部を埋め尽くす砂礫層が見えており、５トレンチから４トレンチの南端を通る谷筋があったと推測され、確認調査地点には遺構が存在しなかったと判断できる。

これら旧谷部（古い沢筋）を埋めた砂礫層は、５号墳や２号墳・６号墳の下層断ち割りトレンチからも見つかっており、概ね現在の谷筋の東側を南流していたと考えられる。

５号墳・６号墳の墳丘構築時に墓壙掘方よりも大きく山側を掘削している状況が伺える。おそらく、構築面を安定させるために大きく砂礫を除去したと考えられ、起因する旧谷部の肩が両トレンチの南半において出現したものと考えられる。

第４章　本発掘調査の成果

本発掘調査は確認調査の結果を受け、事業予定地内に調査区２箇所（1 号墳区・2 号墳区）を設定した。

1 号墳区は 1 号墳の北側、沢筋（大山谷川）の左岸に設定した。

2 号墳区は砂防堰堤が構築される 2 号墳を中心に、尾根西斜面から沢筋の東肩までを調査区とした。

調査は表土を機械により掘削し、それ以下については遺構、遺物に注意しながら人力により掘削した。

遺構検出後、個別遺構の写真撮影･図面作成、調査区全体はヘリコプターを使用した空中写真測量を行った。また、５号墳については、ドローンを援用し墳丘および石室内部の詳細測量を実施した。

７月 31 日には学識経験者（岡山理科大学：亀田修一教授）による現地指導を受けた。

また、2 次確認調査区においては、表土から人力で掘削し、遺構・遺物の発見に努め、掘削終了後、写真撮影と土層断面図の作成を行った。

第１節　調査区の概要

１号墳区の調査（図版 4　写真図版 6）

１号墳区は 1 号墳の北側、沢筋（大谷川）の左岸に設定した北辺 3 m・南北長約 10 mを測る、約 17 ㎡の逆三角形に近い調査区である。調査後の標高は 140 m～ 137 mに及ぶ。

1 号墳の周溝あるいは墳裾が、施工によって影響を受ける可能性があったため調査を実施した。

表土下約 40 ㎝において 1 号墳の墳丘裾につながる傾斜面を検出した。

調査区中ほどに傾斜変換点があり、削平を受けた周溝肩部の可能性があるが、明確な遺構としては検出されなかった。

また、遺物も出土しなかった。

２号墳区の調査（図版 4　写真図版 7）

２号墳区は沢筋（大谷川）の左岸、堰堤本体工事対象区に設定した調査区である。南北 36 m・東西最大幅 16 mを測る約 650 ㎡の釣鐘形の調査区である。調査後の標高は 149 m～ 139 mに及ぶ。

当地区では計３基の古墳と石棺墓、集石遺構などを検出した。最も標高の高い北端に５号墳、中央に２号墳・６号墳、南端にＳＸ 07 が検出されている。

各古墳にかかわる土層は後述する。大まかには最下層に径 20 ㎝前後の巨礫を内包した東尾根裾から西側へと傾斜する地山面があり、その上面に中央から西側へ、古墳構築前の旧沢筋、古墳構築後の沢筋、更に現在の大山谷川と堆積が変遷している。

第２節　遺　構

２号墳

外部施設　（図版５～12.　写真図版９～13）

立地と検出状況　２号墳区のほぼ中央に位置する円墳である。標高 146 m～ 142 mの間に位置している。

尾根の南西斜面を大きくカットし、先行する６号墳の墳丘を掘り崩し、構築している。天井石３石が原位置を保たない状態で検出された。

周溝の北側については、近世には、墳丘を掘り崩して埋めたてられ、平坦面を造り出していたと考えられる。この平坦面上には寛永通宝を伴う焼土坑群が営まれている。

規　模　南北長 17.5 m、東西幅 16.5 mのほぼ円形に斜面をカットあるいは周溝を掘削し墳丘基底部を削り出している。図上で計測する限り、掘削の中心線は石室左側壁の線と合致している。

周　溝　周溝は削平のため場所によって幅・深さともにばらつきがあるが、斜面側で、周溝肩から墳丘裾までが約 4.5 m、深さは 1.5 mを測る。周溝は墳丘の周りを円く巡っているが、特に下方側は深く、馬蹄形に掘削されており、墳裾を際立たせている。その幅は約３m・深さは墳丘側から 0.7 mを測る。

墳　丘　南北長 12.0 m、東西幅 11.0 mのほぼ円形を呈している。残存する高さは、北端の墳裾部で残存する墳丘の高さは周溝底から約 90 ㎝である。先にのべた近世の掘り崩しによるためと考えられる。

構築について　２号墳墳丘は、６号墳墳丘を損壊し、６号墳周溝を埋めて構築している。墳丘の断ち割り土層断面を検討したところ、墓壙を掘削し、石室壁面の最上部付近まで更に盛り上げ、内護列石を備えた１次墳丘を構築した可能性が高い。天井石架構後、更に盛り土を施し２次墳丘を構築し、列石を裾に巡らせていたと考えられる。２次墳丘の盛り土には､径 10 ㎝内外の角礫が多量に含まれている点が特徴である。６号墳の周溝・墳裾部を埋めて２号墳の墳丘を構築したことが、大礫の分布から推定できる。

内部主体　（図版 13 ～ 15　写真図版 14 ～ 17）

検出状況　主体部は羨道の一部が後世の削平を受けているものの、無袖の横穴式石室である。大型の石材を用いた天井石３石が残存していたが、いずれも原位置はとどめていなかった。石室は構築時に６号墳石室の東側壁の基底石を残して損壊し、西側壁の基底石を６号墳基底石上に据えている。６号墳よりも新しく、石室中軸はN 13°W、６号墳石室と鋭角にクロスして造られている。

墓　壙　６号墳の石室と重複して石室を構築しているため明瞭ではない。石室の南半については墓壙を伴わなかった可能性が高い。北半については奥壁と左側壁側は６号墳墳丘を、右側壁側は６号墳石室内を掘り込み、概ね幅 2.2 m・長さ３m・深さ 0.7 mのコの字形に墓壙を掘削している。奥壁と墓壙壁の間は約 80 ㎝空いているが、側壁と墓壙壁の間は約 20 ㎝と狭い。

石　室　石室の規模は現存長 4.7 m（東側壁)、幅 1.0 m、現存高約 1.1 mを測る。奥壁から羨道側へ１m程度の範囲には平たい石材を床面に敷いている。

奥壁は基底部に石室幅よりやや小さい鏡石を置き、東隅には縦方向に小型石材を挿入する。２段目から上は小型の石材を横方向に積み上げるが、鏡石の上辺の凹凸があるため、目地はそろっていない。東側壁は基底石として長さのそろった石材を横置きしている。ただ、残存している壁面の入り口から２石目は縦に石を置いているので、玄室と羨道の境界になる可能性もある。２段目以上は奥壁と同様石材の大きさにばらつきがある。西側壁は東側ほど基底部の石材の大きさはそろっていないが、石材を横置きし、目地を通すことを意識している。残存状況はよくないが、２段目以上は他の壁と同様に石材を積み上げている。

肉眼観察によるが、石材は斜面上方や沢筋に露頭しているものを用いていると考えられる。

床面には奥壁前を中心に敷石が固まって認められ、追葬時のものと考えられる。

出土遺物　（図版 33・34　写真図版 40 ～ 42）

石室内、主に羨道（羨門周辺）部分からは追葬時のものと考えられる須恵器坏蓋（１～３）と須恵器壺（４）、玄室に少し入ったところで須恵器壺（５）、玄室敷石下より剣もしくは鉄鏃茎部片（Ｍ1）が出土している。

また、石室の破壊された部分などで同時期かやや古い坏身や短頸壺（11）の破片が出土している。

また、墳丘中や周溝内から６世紀半ばころの坏や高坏の破片が出土している。

時　期

羨道（羨門周辺）の土器は７世紀後半に属する。

備　考

墳丘中や周溝内から６世紀前半から半ばの坏や高坏の破片が出土している。６号墳に伴う遺物である可能性が考えられる。

６号墳

外部施設　（図版 5・7 ～ 11・16　写真図版 9・10・14・17 ～ 20）

立地と検出状況　２号墳石室の構築により、石室東側が大きく壊された横穴式石室墳である。墳丘・周溝ともに２号墳墳丘内に埋没している。古墳は尾根の南西斜面と旧谷筋上に構築されている。

規　模　２号墳に損壊され、規模は詳らかではない。概ね周溝・墳丘を含め南北９ｍ前後のほぼ円形に斜面をカットあるいは周溝を掘削し墳丘基底部を削りだしている。

周　溝　周溝の内、東から南側を巡る部分が、断ち割りトレンチＣ－Ｃ’と２号墳左側壁下の状況から復元できる。Ｃ－Ｃ’部分では、幅１.５ｍ前後・深さは 35 ㎝以上で掘削されており、２号墳石室羨門部下層から検出された６号墳列石前面が幅１ｍ前後で浅く窪んでいることから、斜面山側から羨門付近までは周溝が巡っていたと考えられる。斜面沢側については不明である。

墳　丘　墳形は円形、南北・東西長ともに約７ｍを測る。斜面谷側を中心に外護列石・墳丘内列石（内護列石）が巡る。残存する墳丘の高さはトレンチＣ－Ｃ’で周溝底から約 60 ㎝、Ｂ－Ｂ’で看取できる墳丘裾部からも約 60 ㎝である。

構築について　墳丘の谷側（南西側）から南側羨門付近にかけては径 20 ㎝～ 60 ㎝の巨礫が多数見受けられる。これらは墳丘埋土中にランダムに含まれていたのではなく、墳丘構築に伴って積まれた外護列石あるいは墳丘内列石（内護列石）であったと考えられる。墳丘盛土には径 20 ㎝内外の角礫を多量に含んだシルト混じりの細砂～中砂を使用している。

図上で計測する限り、構築された墳丘の中心線は石室左側壁の線と合致している。

墳丘の基底部はトレンチＣ－Ｃ’の状況から推測する限り、斜面に盛り土を一旦行い、水平面を造り出した後、大きく山側を地山までカットし、墳丘の構築を行っている。同様の作業は５号墳においても見られる。この作業の性格は不明であるが、単なる墓壙の掘削ではなく、下層にある旧沢筋の堆積層の脆弱さを解消するためではないかとも考えられる。斜面谷側に設定した墳丘断ち割りトレンチでは旧地表と考えられる第７層上面が被熱しており、炭化物が認められた。その標高は 143.４ｍ～ 143.５ｍである。これは築造時に行われた野焼きの痕跡と考えられる。

また、６号墳の墳丘を除去したところ、石室右（西）側壁の外側のほぼ基底石底面と同じレベルから破

砕された土師器の甕（37・38）が出土している。これは築造時の祭祀に伴うものではないかと思われ、破砕された土器の標高もまた、143.5ｍである。

備　考　2号墳羨門部下層の石列が6号墳の南側の列石と考えられる。

内部主体　（図版13・16～18　写真図版9～11・13・17～20）

検出状況　石室は２号墳石室と鋭角にクロスしており、先行する。左側壁が2号墳の石室床面下もしくは２号墳右側壁直下にあり、2号墳構築時に損壊され、左側壁は基底石を残して無くなっている。

墓　壙　奥壁側及び左側壁側の背面を地山面まで掘り込み墓壙を造り出している。右側壁側は詳らかではないが、Ｂ－Ｂ’の断面では盛土を35㎝ほど掘り込む墓壙が確認されている。斜面谷側を盛土し、基底石を据える深さにコの字型に墓壙を掘削したと推測される。

石　室　石室は羨道および基底石を除く東側壁が２号墳築造時に破壊されているものの、無袖の横穴式石室である。石室の主軸はＮ５°Ｅ、２号墳の石室に対して、東に18°振っている。

石室の規模は残存長約4.8ｍ、幅0.8ｍ、現存高1.0ｍを測る。床面には奥壁から羨道方向へ約１ｍの範囲に追葬時のものと思われる角礫を敷いた礫床が残る。

奥壁は基底部にも比較的小さな石材を用い、鏡石は置かない。用いられた石材も大きさや厚さに規格性は認められない。上部に行くにしたがって、内側にせり出すように石を積んでおり、東西両側壁との接点については一部の石材を側壁にかませる技法を用いている。東側壁は基底石としておおむね厚みのない板状の石材を用いているが、羨道と考えられる部分と側壁の一部には厚みのある石材を用いている。西側壁も概ね東側壁と同程度の石材を用いている。ただ、意図は不明ながら、羨道との境界付近に巨石を１石用いている。

６号墳も２号墳と同様、斜面上方や沢筋に露頭している石材を用いていると考えられる。

出土遺物　（図版35　写真図版40・43）

玄室の礫床上から須恵器坏蓋４点（27～30）、須恵器の坏身４点（31～34）、須恵器壺（35）、土師器小型甕（36）が出土した。坏蓋と坏身はセットで副葬されていたと考えられる。そのうちの３組は蓋と身を重ねた状態で伏せて置かれていた。

また、墳丘を除去した際、西側壁の外側のほぼ基底石底面と同じレベルから破砕された土師器甕（37・38）が出土している。築造時の祭祀に伴うものではないかと思われる。

時　期　玄室の礫床上の土器は６世紀後葉に属する。

備　考　２号墳の項でもふれたが、２号墳と重複する墳丘や周溝から６世紀前半から半ばの須恵器が出土している。

5号墳

外部施設　（図版4・19～24　写真図版21～23）

立地と検出状況　調査区北東部に位置する。古墳は尾根の南西斜面と旧谷筋上に構築されている。

当初は古墳ではなく、集石遺構などが複数基営まれた中世墓地の存在を考えていた（ＳＸ01）。

５号墳は２号墳の北側に位置しており、２号墳の周溝の掘削によって、南東側から南側の石室前庭部にあたる部分が消失している。また、南西側については大山谷川の浸食によって周溝・墳丘の一部が削られている。

これら２号墳や沢筋の影響に加え、５号墳の墳丘上には中世墓と考えられる石組ＳＸ02・ＳＸ08・Ｓ

Ｘ09やピット群が営まれており、加えて出土遺物から鎌倉時代に干渉を受けた可能性が考えられる。また、２号墳と同じく近世の造作によって墳丘は掘り崩され、更に近代以降の植林に伴う造成が加わり、現況では微かな隆起となって残存していたととらえられる。

規　模　墳丘は２号墳や集石遺構が営まれたことにより、かなり変形を受けているが、周溝も含め直径約13.5ｍ程度の不整な円墳であったと考えられる。

周　溝　周溝は削平のため場所によって幅・深さともにばらつきがあるが、斜面山側を弓形に近い（半）円形に掘削し、造り出している。規模は、斜面山側で、周溝肩から墳丘裾までが約2.6ｍ、墳丘の肩までは3ｍを測る。深さは山側肩部から約1ｍを測る。また、検出できる最も下流では周溝肩から墳丘裾までが約2.8ｍ、墳丘の肩までは3.5ｍを測る。

墳　丘　墳形は改変のため明確ではない。特に、南西半は大きく消失している。周溝が円弧を指向するのに対し、残存する墳丘の東西辺は円みをもち、対して北辺は直線的である。北辺の直線は中世に入って生じた可能性が高いが判然としない。不整な円形もしくは、隅丸方形であった可能性も若干残る。円墳の場合、ほぼ南北軸で9.0ｍを測る。これは、10㎝前後の角礫が多く入る、比較的残りの良い墳丘部分で計測した場合である。また、石室の東西・南北辺を基準に測りだすと、南北約8ｍ以上、東西約8.5ｍ程度の規模となる。また、方形の場合、東西辺8.5ｍ、南北辺7.6ｍ以上の規模となる。残存する高さは、北端の墳裾部で残存する墳丘の高さは周溝底から約40㎝、東側では約50㎝である。

構築について　斜面谷側を中心に集石・石積みが巡る。

墳丘の谷側（南西側）から南側、羨門を中心とした石室前面には径20㎝～60㎝の巨礫が多数見受けられる。これらは墳丘埋土中にランダムに含まれていたのではなく、墳丘構築に伴って積まれた外護列石あるいは墳丘内列石（内護列石）であったと考えられる。石積みは石室の構築にともなって順次積み上げられたものである。

また、南北軸よりも西側の墳丘盛土には径10㎝～20㎝内外の角礫を多量に含んだシルト質極細砂を使用している。これは5号墳の全体図の状況を見ても明らかである。

墳丘の基底部は各断ち割りトレンチの状況からみると、斜面に盛り土を一旦行い、水平面を造り出した後、大きく斜面山側を地山までカットし、墳丘の構築を行っている。同様の作業は6号墳においても見られる。この作業の性格は不明であるが、単なる墓壙の掘削ではなく、下層からは旧沢筋の堆積と考えられる砂礫層が出現しており、堆積層の脆弱さを解消するためではないかとも考えられる。掘り込みの肩は、Ｄ－Ｄ’とＥ－Ｄ’・Ｆ－Ｆ’で確認されており、Ｃ－Ｃ’では肩部が検出されていない。このことから、斜面谷側を大きくカットし、墳丘を構築したものと考えられる。この範囲は、多量の礫が目立つ墳丘盛土の範囲とほぼ合致している。

内部主体　（図版25・26　写真図版24～30）

検出状況　埋葬主体である石室についても前壁から羨道にかけての石材が南側に向かって崩落している。石室前面を中心に墳丘に墳丘内列石を持つ可能性が高いが、崩落した石室石材との峻別は困難である。

墓　壙　6号墳と同じく奥壁側及び左側壁側の背面を地山面まで大きく掘り込み墓壙を造り出している。

石　室　石室は平面形が「Ｔ」字を呈する両袖の横穴式石室である。奥壁幅が内法で2.35ｍ、前壁が同じく2.70ｍ、東壁が1.25ｍ、西壁が1.15ｍを測り、最も残りの良い部分で高さは約1.2ｍである。羨道はかなり崩れているので明確ではないが、幅0.7ｍとかなり狭く、長さについては不明である。前壁の中央ではなく東によった位置に作られている。方位は玄室西壁でＮ20°Ｅ、羨道部西壁でも玄室西壁で

Ｎ 20°　Ｅにとる。

前壁から西壁、奥壁西端にかけては、基底部にあまり厚みのない石材を縦位に用い、小さな石材を横位にしてその上に積み上げている。奥壁の大部分は石材を横位に並べ、西壁は基底部から上まで石材を平置き（横置き）して積み上げており、一つの石室の中で用石法が異なっている。

また、理由は定かではないが、前壁を内側に積み足しており、当初の石室は東壁で約 40 ㎝、西壁で推定 60 ㎝程度羨道方向へ広がっていたと考えられる。

出土遺物　（図版 36　写真図版 40・44）

東壁の前から須恵器の坏身・坏蓋２組（39 ～ 42）、有蓋高坏（43・44）、甕（45）が出土した。

坏・甕は床面から出土したが、有蓋高坏は床面より高い位置にある東壁の窪みにはまった状態で検出された。坏蓋内の埋土と床面の埋土を水洗した結果、滑石製臼玉が破損したものも含め、20 点検出された。そのほかには、床面から刀子（Ｍ２）が出土している。

また、北側周溝内からは須恵器甕底部（58）が出土している。

時　期

須恵器は坏の形態から複数型式が含まれていると考えられるが、石室自体の形態とも勘案して、構築時期は６世紀前葉としておく。

石棺墓　ＳＸ 10　（図版 27・37　写真図版 31・45）

検出状況　２号墳周溝南端より検出した。

検出状況から推して２号墳周溝より古く構築され、６号墳よりは新しい可能性が高い。

墓壙内に２箇所の石組があり、北半をＳＸ 10a、南半をＳＸ 10b とした。同一墓壙内にあり、ＳＸ 10b は石組がずり落ちた態をなしていることから同一石棺であったととらえている。

墓　壙　楕円形で、南北 2.8 ｍ・東西 1.6 ｍ以上を測る。

石　棺　ＳＸ 10a は北小口と東壁の一部が残存しており、北小口は板石を立て、東壁は板石ではなく、割石を２段に積んでいる。西壁は２号墳周溝掘削に伴い損壊したと考えられる。Ｎ 0°　Ｅ前後の走向をもち、残存する全長は内法約 0.7 ｍ・残存幅 0.3 ｍ・東壁の残存高は 0.5 ｍを測る。また床面には径 10 ㎝前後の礫を敷いている。

ＳＸ 10b は東壁の一部らしき２石と南小口と東壁の一部が残存しており、西壁は２号墳周溝掘削に伴い損壊したと考えられる。用材が原位置から動いているため参考となるが、凡そＮ９°　Ｅの走向をとり、残存する東壁の全長は内法約 0.65 ｍ・残存幅 0.4 ｍ前後・東壁の残存高は 0.4 ｍを測り、用材は立てて使用している可能性が高い。

遺　物　石棺の埋土（上層）からは７世紀初頭前後の須恵器坏底部（46）が出土している。

備　考　墓壙の南半に用材と考えられる石材ＳＸ 10b が存在することから、石棺は内法全長２ｍ前後の規模であったとしたが、ＳＸ 10a の側壁と敷石が揃って遺存した状態であるのに対し、ＳＸ 10b には敷石がなく、軸もずれ、用材の使用方法も異なることから、両者は別の小石棺あるいは小石室であった可能性がある。

不明石組遺構ＳＸ 11　（図版 28　写真図版 32）

検出状況　５号墳と２号墳周溝の間より検出した。標高 145 ｍ～ 144.5 ｍ付近に位置する。石組の一部は

2号墳周溝埋土の上面に乗っており、２号墳より新しい石組である。検出された地点は調査区の中央西端に近く、沢筋に向かって50㎝ほどの段落ちが認められる地点である。検出された石組もまたこの段落ちと向きを同じくしている。

概要と規模　石組は径30㎝～50㎝の石材が2段2列に並び、N 50°Wの走向をもつ。全長２m・幅約１mを測る。２段の石材は積み上げた状態ではなく、傾斜に沿って貼り付けた状態で検出されている。基底部からの高さは約70㎝を測る。

遺物と時期　石組間から土師器片が出土しているが、細片であり、時期は不明である。

備　考　石組は、旧地形の斜面とも、２号墳の周溝の形状ともその向きが合致しておらず、調査前の植林に伴う造成の段と向きをほぼ同じくしており、段落ちに伴う護岸の石組である可能性が考えられる。

奈良時代の遺物　（図版37　写真図版45）

５号墳東周溝内より須恵器坏Ｂ（48）が出土した。８世紀後半と考えられる。本調査区よりも下流の谷入口付近の扇状地では同時代の須恵器が採集されており、奈良時代～平安時代にかけての集落が存在した可能性が高い。同時期に５号墳周辺で、祭祀などの活動が行われた可能性が考えられる。

中世墓状石組遺構ＳＸ08　（図版20・29　写真図版32・33）

検出状況　５号墳西墳丘上にある。

形状・規模　南北約1.2ｍ・東西約0.9ｍの長方形の石組みである。長辺の方位をN 30°W前後にとる。一辺40㎝ほどの自然石を並べ、西外側に面をもつ。石組み内には南北約1.1ｍ・東西約0.8ｍ・深さ約25㎝の不整方形の土坑がある。

遺　物　遺物は出土していない。

備　考　これらの石組みは火葬墓の可能性が考えられる。

中世墓状石組遺構ＳＸ09　（図版20・29　写真図版34）

検出状況　５号墳西側周溝上より検出された。周溝埋没後に造られている。

形状・規模　一辺0.7ｍ～0.8ｍの方形石組みが2基南北方向に連結しているものと考えられる。長軸の方位をN 40°W前後にとる。石組みは一辺15㎝ほどの自然石を並べているが、西辺は総じて崩落し不分明である。石組みの下から土坑等の施設は見つかっていない。

遺　物　遺物は出土していない。

備　考　これらの石組みは火葬墓の可能性が考えられる。

中世墓状の集石遺構ＳＸ02　（図版20・30　写真図版35）

検出状況　５号墳東墳丘上より検出した。一部周溝上にかかり、周溝が埋没したのちに造られている。

形状・規模　径約80㎝の円形の土坑に径10㎝前後の角礫が密集している。土坑は浅い皿状の土坑底に直径15㎝ほどの穴が開いており、全体として漏斗状の形状である。

埋　土　角礫は主に上半にあり、礫間には褐色の細砂質極細砂が入っている。

ピット群・焼土坑群・丹波焼甕・銭貨　（図版 20・30・37　写真図版 35・36・45）

５号墳墳丘上からピット群、西側沢筋からは丹波焼甕が出土している。中世墓と考えられるＳＸ 08・ＳＸ 09 を含め、周辺に火葬墓（址）があった可能性が高い。

また、2 号墳の墳丘上及び周溝にあたる部分の上層から焼土坑、石組み遺構、寛永通宝３点、鋳鉄製の猿が出土している。石組み遺構は今回報告しなかったが、2 号墳周溝上に位置し、現地表上に顔をみせる石組みである。また、周辺より上述の寛永通宝３点のうち２点や鋳鉄製の猿像が出土しており、庚申信仰などの近世遺構が存在した可能性が考えられる。

・ピットＰ 01 ～Ｐ 03　５号墳の墳丘上において 3 基のピットを検出した。何れも径 50 ㎝前後、深さ５㎝～ 15 ㎝を測るもので、径 10 ㎝前後の石が落ち込んでいる。周辺からは龍泉窯劃花文青磁碗片が出土しており、鎌倉時代に墳丘上が使用されたと考えられる。

・焼土坑ＳＸ 03 ～ＳＸ 06　５号墳南東、２号墳周溝上に位置する。ＳＸ 03 ～ＳＸ 05 はまとまって検出されている。

ＳＸ 03 は上部に集石を持ち、炭が一部に充満しているＳＸ 03-A と炭混じりの黒褐色細砂が入るＳＸ 03-B の 2 基に分かれる。ＳＸ 03 上及び周辺からは寛永通宝が２点出土している。

ＳＸ 04 は径 60 ㎝の不整円形の土坑である。上部に礫が集まり炭を含む黒褐色細砂を埋土とする。

ＳＸ 05 はＳＸ 04 と同じく炭を含む黒褐色細砂を埋土とする楕円形の土坑が 2 基連結する瓢箪形の土坑である全長 1.6 ｍ・幅 40 ㎝前後を測る。

ＳＸ 06 は被熱し、赤変した不整な楕円形の土坑である。全長 70 ㎝・幅 50 ㎝前後を測る。

・丹波焼甕（47）　５号墳西側の沢筋より丹波焼甕口縁部が出土している。時期は 13 世紀代と考えられる。甕の存在から５号墳丘上もしくは沢筋上部に中世墓もしくは経塚が存在した可能性が考えられる。北東の至近にはＳＸ 08・ＳＸ 09 が存在する。

・銭貨　表土直下から銭貨３点が出土した。うちＭ３・Ｍ４は５号墳南側、Ｍ５はＳＸ 03 周辺から出土している。何れも寛永通宝である。

火葬址遺構ＳＸ 07　（図版 4・31・32　写真図版 37・38）

２号墳の南側、調査区南端の沢筋に巨石（自然石）による岩陰がある。岩陰は一辺１ｍ～ 1.5 ｍの巨石４つが東西に並び沢に向かって庇を造り出している。その庇の下から石敷きと石壁を積みあげた火葬址と考えられる遺構を検出した。

遺構は岩陰の前面を東西３ｍ×南北 2.5 ｍに亘って掘り下げ、中央に石壁を立てることによって、2 室に分け、火葬炉と考えられる施設を造っている。西側の施設をＳＸ 07-A、東側の施設をＳＸ 07-B とする。

・ＳＸ 07-A　床には上下 2 枚の石敷きがある。石敷きの他、奥壁･左側壁が残存し、右側壁、前面（沢側）の構造は上下面とも詳らかではない。

〔下層〕全長 1.6 ｍ以上･幅約 0.9 ｍ前後､高さ 0.7 ｍを測る石敷き遺構。長軸の方位をＮ 20°Ｗにとる。

床面に幅 0.2 ｍ前後の石を横５列、縦７列に敷き、岩陰側（奥壁）に２段３列の石壁を積み石室を造り上げている。

奥壁の壁は下段には規模の大きな石材を立てて使用し、上段には人頭大以下の石材を庇部の岩陰との間に詰め込んでいる。

中央を仕切る壁（側壁）は板石を立て、更に１段石材を積む。この壁は上層においても使用され、また

壁の板石は両面とも平坦であることから、ＳＸ 07-B 側の壁としても使用されたと考えられる。

床面・側壁・奥壁及び庇部の岩間の一部は被熱し、赤変している。石室内で燃焼行為が行われ、庇の岩の間が煙出しとして機能していたと考えられる。

〔上層〕全長 1.8 m以上・幅約 0.8 m前後、高さ 0.5 mを測る石敷遺構。長軸の方位をＮ 19°Ｗにとる。

下層床面との間で約 10 ㎝、奥壁との間で約 5 ㎝の間をあけて新しく石材を組上げており、間には炭を含んだにぶい褐色土が堆積している。

床面に幅 0.2 m前後の石を横 5 列、縦 7 列以上敷き、奥壁には 2 段 5 列の石壁を積んでいる。

床面・奥壁ともに被熱し、赤変している。下層と同じく石室内で燃焼行為が行われたと考えられる。

・ＳＸ 07-B　岩陰を奥壁とし、ＳＸ 07-A と分ける中央の壁を右側壁としている。左側壁については石材が一石残存している。前面（沢側）には 2 段の石積みが残り、ＳＸ 07-B の前壁もしくはＳＸ 07-A を含めたＳＸ 07 全体の前壁であったと考えられる。前壁までの全長 2.7 m・幅約 0.8 mを測る石室状遺構である。長軸の方位をＮ 20°Ｗにとる。

ＳＸ 07-A と違い、床面・両側壁・奥壁・前壁ともに被熱・赤変は見受けられず、燃焼行為が行われた可能性は低い。またＳＸ 07-A の上層時には埋没していたと考えられる。

ＳＸ 07 の上面からは須恵器片が出土しているが、遺構の時期は特定できない。

第３節　遺　物

２号墳の出土遺物　（図版 33・34　写真図版 40 ～ 42）

１・２・３は須恵器の坏蓋と判断した。いずれも口縁部の高さが低くなり、天井部との境界が不明瞭になりつつあるとともに口径も小さくなっている。１・２の天井部は丸みを帯び、３はやや平坦になっているが、いずれもヘラ削りは頂部のみである。３点とも完形である。４・５は壺である。４は大きく開く口縁部と肩の張る体部に外側に踏ん張る高台が付く。頸部に２条の沈線を巡らせる。打ち欠かれたように破損している口縁以外は残存している。５は焼け歪みと火膨れで変形が著しいが、ほぼ直立する頸部を持つ壺である。高台はつかず、中央がくぼんだ平底である。完形である。これらの須恵器はＴＫ 209 型式の新しい段階からＴＫ 217 型式に併行するものと考える。

６～ 13 は羨道入り口付近から西壁の崩れた付近を中心に出土した須恵器である。６は焼けひずんだ坏身で平底、ヘラ削りは底面だけに施されている。７については蓋である可能性もあるが、身として図化した。口縁は低く、受け部が湾曲する小型のものである。８も小型の坏身である。９・10 は平底から内湾して立ち上がった体部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部を持つ埦である。11 はひずんでいるが胴の張る体部を持つ短頸壺である。12 は甕の口縁部で端部外面を肥厚させている。13 は口縁部を欠くものの、壺の体部である。肩部から胴部中位にかけて４条の沈線を施し、その間を櫛状工具による連続刺突文で充填する。51 は写真だけをあげた須恵器坏である。10 と同じく前庭部から出土した。

14 ～ 26 は墳丘・周溝を検出する過程で出土したものである。21 ～ 23 については、墳丘盛土内から出土している。出土状況から考えて２・６号墳だけではなく、５号墳に伴っていた可能性もある。

須恵器（14 ～ 19・22・23）と土師器（20・21・24 ～ 26）がある。14 は残存状況が悪い有蓋高坏の蓋である。天井部と口縁部の境界は明瞭である。15 は坏蓋である。口縁が開き気味ではあるが、天井部と口縁部の境界は明瞭であり、口縁端部に内傾した面を持つ。16 は器高が低く、平底の坏身である。17・18 は短脚有蓋高坏の脚部である。どちらも長方形と考えられる透かしがある。19 は細い脚柱部から大きく広がる裾部を持つ高坏の脚部である。20 は甕の口縁部である。端部内面を下方に肥厚させる。21 は杯である。22 は坏蓋である。天井部のヘラ削りは範囲が狭くなっているが、口縁部との境界は明瞭で内傾する口縁端部にはくぼみが残る。23 は坏身である。斜めに立ち上がる口縁部を持ち、端部は内傾した面を持つ。24 ～ 26 は甕である。いずれも大きく外反する口縁部を持ち、外面にハケ、内面にはヘラ削りを施している。24 と 25 はやや小型のものである。図示した土器以外に 52・53 をあげた。

周溝や墳丘周辺で出土している須恵器はおおむねＭＴ 15 型式併行のものが多くを占めるが、16・19 のように時期が下るものも含まれている。

Ｍ１は玄室敷石下より出土した鏃もしくは鉄剣茎部片である。断面は両刃状である。

６号墳の出土遺物　（図版 35　写真図版 40・43）

27 ～ 30 は須恵器の坏蓋、31 ～ 34 は須恵器の坏身である。坏蓋はいずれも口縁部の高さが低くなり、天井部との境界が不明瞭になりつつある。ほぼ均質な形態を持ち、同一型式と考えられる。35 は須恵器の小型壺である。球形の体部と外反して開く口縁部を持ち、形態的には土師器甕に近い。須恵器の時期についてはＴＫ 43 型式併行のものと思われる。36 は土師器の小型甕である。球形の体部と直線的に伸びる口縁部を持つ。外面はハケ調整、内面はヘラ削りである。37・38 は土師器の甕である。球形の胴部に外

反する口縁部が付く。外面はハケ調整で、37 は内面もハケ、38 は内面にヘラ削りを施している。

５号墳の出土遺物　（図版 36　写真図版 40・44）

須恵器（39 ～ 45）と鉄器（Ｍ 2）、玉（Ｊ 1 ～ Ｊ 15）が出土している。須恵器はいずれも完形である。39 ～ 42 は坏で 39・40 と 41・42 がセットになる。39 は坏蓋で天井部全体にヘラ削りを施し、天井部と口縁部の境界は明瞭な段で区別される。口縁端部は内側に斜めの面を持つ。40 は坏身で口縁部は斜めに立ち上がり、口縁端部は内側に凹線状の窪みを伴う面を持つ。受け部は短く、底部から体部下半にかけてヘラ削りを施している。胎土にやや大きな砂礫を含み､成形時のゆがみが認められるなど精良さに欠けるが、形態的にはＴＫ 47 型式併行と考えられる。41 は 39 に比べると口径が増大し、天井部のヘラ削りの範囲が減じる。天井部と口縁部境界の段差も鈍くなるが、口縁端部は内側に明瞭な面を持つ。42 も 40 より口径が増大するものの、器高は低くなる。口縁端部も内側に面を持つが凹線状の窪みは不明瞭となる。ＭＴ 15 型式併行と考えられる。43・44 は小型の有蓋高坏である。蓋には扁平なつまみが付き、坏部は外面受け部直下に櫛描き波状文を施し、内湾する脚部には円形透かしがあり、脚端部は外側に肥厚する。口径に比して蓋・身とも器高が高く、口縁端部は丸みを帯びている。類例を見ない形態であるので、時期比定が難しいが、ＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式併行と考えられる。

Ｍ２は刀子と思われる鉄製品である。刃部断面を見ると片刃で、茎部は四角い断面を呈する。

玉はすべて滑石製の臼玉である。ブロックに分割して取り上げた埋土を水洗選別して検出した。おおむね東側前壁付近から出土している。直径は均質だが、断面形状を見ると上面と下面が平行しないものも多く含まれている。

その他の出土遺物　（図版 37　写真図版 45）

46 は須恵器坏Ｇの底部である。底部はヘラ切り、坏部との境はロクロナデ調整を施す。7 世紀前半と考えられる。

47 は５号墳西側の沢筋より出土した、丹波焼甕口縁部である。口縁端部は外反し、摘み上げ、外側に面をもつ端部は垂下しない。端部内面には凹線が巡る。時期は 13 世紀代と考えられる。

48 は２号墳北東側周溝内より出土した須恵器坏Ｂである。復元口径 15.4 ㎝・高さ 3.6 ㎝を測る。坏部は外方へ真っ直ぐ伸びる。高台は底部・坏部境に付き、短く外側へ踏ん張りをみせる。8 世紀後半代と考えられる。

49 は須恵器壺底部である。2 号墳区から採取された。ロクロ糸切りを施した厚い底部から真っ直ぐ体部が立ち上がる。外面には自然釉がかかる。古代末～中世のものである。

50 は３号墳床面から出土した須恵器台付長頸壺である。口縁部はラッパ状に開き、肩部には刺突文が巡る。時期は７世紀前半と考えられる。

写真のみ挙げたが、59 は律令期の須恵器皿Ｂ、60 は中世前期の龍泉窯劃花文青磁碗片である。

Ｍ３・Ｍ４・Ｍ５はいずれも２号墳・５号墳間の焼土坑群付近から出土した寛永通宝である。

Ｍ６は 2 号墳裾部から出土した鋳鉄製の猿である。庚申信仰に関連したものと推測している。

表２　遺物観察表１

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量（ｃｍ）				残存状況			出土地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径	腹径	口縁	底	他				
1	33	41	須恵器	坏蓋	10.2	3.7			完形			2号墳区	2号墳石室		土器２（取り上げNo.）
2	33	41	須恵器	坏蓋	9.6	3.8			完形			2号墳区	2号墳石室		土器３（取り上げNo.）
3	33	41	須恵器	坏蓋	10.1	3.2			完形			2号墳区	2号墳石室		土器４（取り上げNo.）
4	33	41	須恵器	壺	(8.8)	19.75	10.6	15.2	1/2 弱	完形		2号墳区	2号墳石室		土器１（取り上げNo.）
5	33	41	須恵器	壺	3.35	19.5	7.65	14.6	完形	完形		2号墳区	2号墳石室		土器５（取り上げNo.）
6	33	41	須恵器	坏身	10.7	4.8	6.0		3/4	完形		2号墳区	2号墳羨門付近		
7	33	41	須恵器	坏身	(11.2)	3.1					1/4	2号墳区	2号墳羨門西側列石間		断割り分含む
8	33	41	須恵器	坏身	8.0	2.9			5/6	完形		2号墳区	6号墳石室入口側		
9	33	41	須恵器	埦	9.2	4.7			3/4	完形		2号墳区	2号墳石室西隣切株下		6 号墳石室内
10	33	41	須恵器	埦	(10.5)	4.4			1/3	わずか		2号墳区	2号墳前庭部		
11	33	41	須恵器	短頸壺	(6.0)	7.2		(10.9)		ほぼ完形	口～体 1/2 弱	2号墳区	2号墳右側壁外側		写真あり
12	33	41	須恵器	甕	(16.2)	(6.0)			1/3			2号墳区	2号墳石室		
13	33	41	須恵器	壺		(13.2)		19.9		ほぼ完形	体部 1/3	2号墳区	2号墳周濠		
14	34	42	須恵器	有蓋高坏蓋	(11.6)	(4.8)			わずか		体部 1/4 天井 4/5	2号墳区	2号墳南西列石		
15	34		須恵器	坏蓋	(11.6)	4.3			1/8			2号墳区	2号墳南西側周溝		
16	34	42	須恵器	坏身	(11.3)	3.8	(5.3)		1/5			2号墳区	2号墳周濠	北側アゼ	
17	34	42	須恵器	有蓋高坏（脚）		(4.8)	(7.6)				脚 5/6	2号墳区	2号墳周濠		羨道出口東側
18	34	42	須恵器	有蓋高坏（脚）		(5.4)	(7.8)				脚 1/4	2号墳区	2号墳西セクション		
19	34	42	須恵器	高坏（脚）		(6.9)	(9.5)				脚柱ほぼ完形裾部 1/2 弱	2号墳区	2号墳周濠		6 号墳石室正面あたり
20	34	42	土師器	甕（口縁）	(19.1)	(3.0)			1/6			2号墳区	2号墳周濠(北西部)		
21	34	42	土師器	坏	(12.2)	(4.4)			1/6			2号墳区	2号･6号墳墳丘	盛土内	北西部
22	34	42	須恵器	坏蓋	(11.8)	(4.4)			1/6		天井部 1/4	2号墳区	2号墳墳丘内(東壁裏側)		
23	34	42	須恵器	坏身	(10.7)	(4.0)			1/8			2号墳区	2号墳墳丘	東アゼ内	
24	34	42	土師器	甕	(12.4)	(5.0)			1/8			2号墳区	2号墳墳丘裾(羨道東側)		
25	34	42	土師器	甕	(11.9)	(5.6)			1/6			2号墳区	2号墳墳丘(北東)		
26	34	42	土師器	甕	(13.0)	(11.5)			1/6			2号墳区	2号墳墳丘裾(羨道東側)		
27	35	43	須恵器	坏蓋	14.3	5.0			完形			2号墳区	6号墳石室		土器①（取り上げNo.）
28	35	43	須恵器	坏蓋	14.3	5.0			ほぼ完形			2号墳区	6号墳石室		土器④（取り上げNo.）
29	35	43	須恵器	坏蓋	14.4	4.8			ほぼ完形			2号墳区	6号墳石室		土器⑤（取り上げNo.）
30	35	43	須恵器	坏蓋	14.8	4.8			完形			2号墳区	6号墳石室		土器⑦（取り上げNo.）
31	35	43	須恵器	坏身	12.5	5.0			完形			2号墳区	6号墳石室		土器②（取り上げNo.）
32	35	43	須恵器	坏身	12.3	4.15			ほぼ完形			2号墳区	6号墳石室		土器③（取り上げNo.）
33	35	43	須恵器	坏身	12.7	4.3			ほぼ完形			2号墳区	6号墳石室		土器⑥（取り上げNo.）
34	35	43	須恵器	坏身	12.7	4.6			ほぼ完形			2号墳区	6号墳石室		土器⑧（取り上げNo.）
35	35	43	須恵器	壺	9.5	12.7		14.1	ほぼ完形			2号墳区	6号墳石室		土器⑨（取り上げNo.）
36	35	43	土師器	小型甕	8.4	9.4		10.2			体部わずか欠	2号墳区	6号墳石室		土器⑩（取り上げNo.）
37	35	43	土師器	甕	(16.9)	(12.7)			1/3			2号墳区	6号墳墳丘基底部	西壁堀方	土器集中箇所
38	35	43	土師器	甕	(19.7)	30.6		28.0	1/3		体～底 4/5	2号墳区	6号墳墳丘基底部	西壁堀方	土器集中箇所
39	36	44	須恵器	坏蓋	12.1	4.8			完形			2号墳区	5号墳石室		土器１（取り上げNo.）
40	36	44	須恵器	坏身	10.4	5.3			ほぼ完形			2号墳区	5号墳石室		土器２（取り上げNo.）
41	36	44	須恵器	坏蓋	13.7	4.5			完形			2号墳区	5号墳石室		土器３（取り上げNo.）
42	36	44	須恵器	坏身	11.6	5.2			ほぼ完形			2号墳区	5号墳石室		土器４（取り上げNo.）

表３　遺物観察表２

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量（ｃｍ）				残存状況			出土地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径	腹径	口縁	底	他				
43	36	44	須恵器	有蓋高坏蓋	8.9	4.7			ほぼ完形			2号墳区	5号墳石室		土器５（取り上げNo.）
44	36	44	須恵器	有蓋高坏	(7.1)	7.9	7.4		完形			2号墳区	5号墳石室		土器６（取り上げNo.）
45	36	44	須恵器	甕	18.5	35.8		31.2	ほぼ完形			2号墳区	5号墳石室		土器７（取り上げNo.）
46	37	45	須恵器	坏G（底部）		(1.8)	6.0			完形		2号墳区	石棺墓SX10	被覆土	
47	37	45	丹波焼	甕	(39.1)	(3.5)			わずか			2号墳区	5号墳南西側谷部		
48	37	45	須恵器	坏Ｂ	(15.4)	3.6	(11.2)		1/2 弱	1/2		2号墳区	2号墳･5号墳間	2 号墳北東周溝内	5 号墳側からの転落
49	37	45	須恵器	壺（底部）		(4.0)	(11.3)			1/8		2号墳区			表採
50	37	45	須恵器	台付長頸壺	7.3	(15.3)		8.8	完形		体部 1/2 強		3号墳床面		確認調査時出土
51		41	須恵器	坏身								2号墳区	2号墳前庭部		写真のみ
52		42	土師器	壺								2号墳区	2号墳墳丘裾(羨道東側)		写真のみ
53		42	須恵器	甕								2号墳区	2号墳周濠(北側)		写真のみ
54		44	須恵器	坏蓋								2号墳区	5号墳南西石組内		写真のみ
55		44	須恵器	高坏（脚）								2号墳区	5号墳北周溝内		写真のみ
56		44	須恵器	壺								2号墳区	5号墳北周溝内	茶褐色混礫土中	写真のみ
57		44	土師器	坏？								2号墳区	5号墳墳丘上SX08周辺		写真のみ
58		44	須恵器	甕								2号墳区	5号墳北東周溝底		写真のみ
59		45	須恵器	皿Ｂ								2号墳区	2号墳周濠(北西部)	焼土面直下～底	写真のみ
60		45	青磁	碗								2号墳区	5号墳北半	周溝検出時褐色土中	写真のみ

金属製品			種別	器種	法量（mm）					残存状況	出土地区	出土遺構	層位	備考
報告番号	図版番号	写真図版番号			器高	長さ	幅	厚み	重量 (g)					
M1	33	41	鉄製品	鏃 or 剣		58.5	31	5.5	12.0	茎欠損	2号墳区	2号墳石室	敷石下	
M2	36	44	鉄製品	刀子		85.0	14.5	4.0	7.1	なかご欠損	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
M3	37	45	銅製品	銭		24.6	24.6	1.2	3.0	完形（寛永通宝）	2号墳区	5号墳上		
M4	37	45	銅製品	銭		22.8	22.7	1.1	2.5	完形（寛永通宝）	2号墳区	5号墳上		
M5		45	銅製品	銭		(21.4)	23.1	1.0	1.0	一部欠損（寛永通宝）	2号墳区	2号墳上		写真のみ
M6		45	鉄製品	猿		71.0	107.5	41.0	425.3	完形	2号墳区	2号墳墳裾		写真のみ

玉			種別	器種	法量（mm）				残存状況	出土地区	出土遺構	層位	備考
報告番号	図版番号	写真図版番号			口径	厚さ	孔径	重量 (g)					
J1	36	44	玉類	白玉	5.4	4.9	2.2	0.17	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J2	36	44	玉類	白玉	5.2	3.4	2.2	0.13	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J3	36	44	玉類	白玉	4.9	3.9	2.2	0.12	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J4	36	44	玉類	白玉	4.9	3.0	2.2	0.10	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J5	36	44	玉類	白玉	5.4	3.0	2.2	0.11	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J6	36	44	玉類	白玉	5.4	3.7	2.2	0.11	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J7	36	44	玉類	白玉	5.4	3.9	2.2	0.12	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J8	36	44	玉類	白玉	5.3	2.5	2.1	0.09	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J9	36	44	玉類	白玉	5.2	2.4	2.3	0.07	完形	2号墳区	5号墳石室	土器 40 内	
J10	36	44	玉類	白玉	5.1	3.9	2.3	0.11	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J11	36	44	玉類	白玉	5.2	3.3	2.3	0.11	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J12	36	44	玉類	白玉	5.1	3.8	2.3	0.13	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J13	36	44	玉類	白玉	5.4	2.8	2.3	0.12	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J14	36	44	玉類	白玉	5.3	3.4	2.3	0.10	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土下半	
J15	36	44	玉類	白玉	5.3	3.3	2.3	0.11	完形	2号墳区	5号墳石室	床面埋土上半	

第４節　山田大山古墳群における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

山田大山古墳群は、兵庫県丹波市春日町山田に所在する。測定対象試料は、2 号墳と 5 号墳の石室から出土した炭化物 3 点である（表 4)。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 4 に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置(NEC 社製)を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度($^{13}C/^{12}C$)、^{14}C 濃度($^{14}C/^{12}C$)の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 4)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977)。^{14}C 年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 4 に、補正していない値を参考値として表 5 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 4 に、補正していない値を参考値として表 5 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1 σ ＝ 68.2%）あるいは2標準偏差（2 σ ＝ 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表5に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

表4　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法		δ ^{13}C 補正あり	
					δ ^{13}C (‰) (AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-160434	5	2号墳 石室　層位：敷石の下の土	炭化物	AAA	-28.82 ± 0.37	1,610 ± 20	81.83 ± 0.23
IAAA-160435	6	5号墳 石室　層位：2の下	炭化物	AAA	-25.24 ± 0.33	1,620 ± 20	81.76 ± 0.23
IAAA-160436	7	5号墳 石室　層位：6の下	炭化物	AAA	-25.98 ± 0.31	1,670 ± 20	81.24 ± 0.23

[#8071]

表5　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-160434	1,670 ± 20	81.19 ± 0.22	1,610 ± 22	404calAD-431calAD(31.7%) 492calAD-530calAD(36.5%)	396calAD-475calAD(53.0%) 485calAD-536calAD(42.4%)
IAAA-160435	1,620 ± 20	81.72 ± 0.22	1,617 ± 22	398calAD-430calAD(43.8%) 493calAD-511calAD(15.5%) 518calAD-529calAD(8.9%)	389calAD-475calAD(60.3%) 485calAD-535calAD(35.1%)
IAAA-160436	1,690 ± 20	81.07 ± 0.22	1,669 ± 22	348calAD-369calAD(24.9%) 378calAD-406calAD(43.3%)	333calAD-421calAD(95.4%)

［参考値］

5　測定結果

測定結果を表 4、5 に示す。

試料の ^{14}C 年代は、5 が 1610 ± 20yrBP、6 が 1620 ± 20yrBP、7 が 1670 ± 20yrBP である。暦年較正年代(1 σ)は、5 が 404 ～ 530cal AD、6 が 398 ～ 529cal AD、7 が 348 ～ 406cal AD の間に各々複数の範囲で示される。

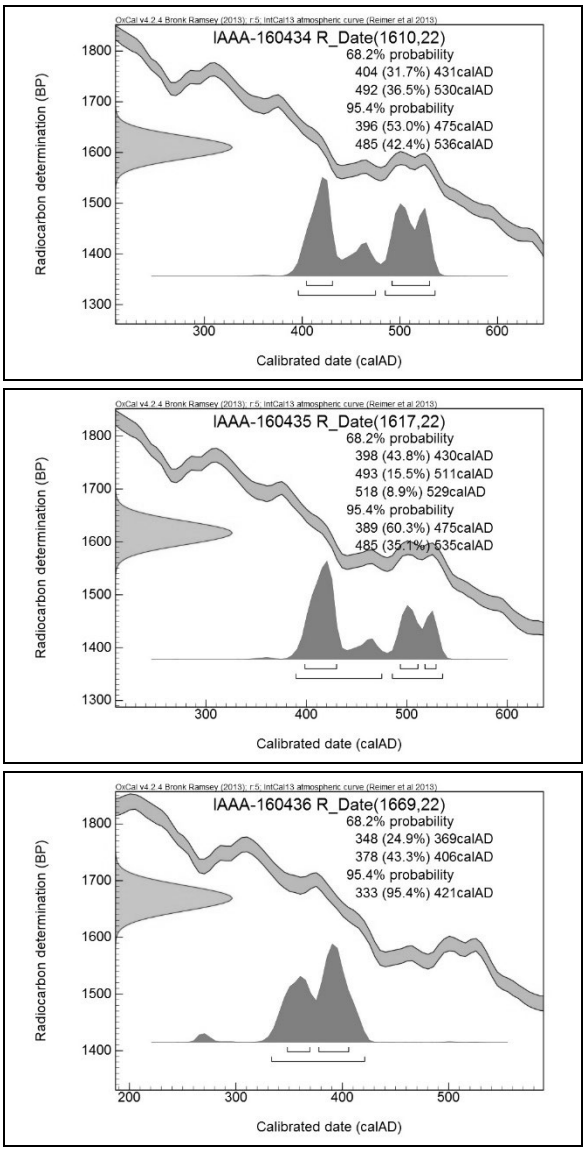
試料の炭素含有率はいずれも 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



第 2 図　［図版］暦年較正年代グラフ（参考）

第５章　まとめ

山田大山古墳群では今回３基の横穴式石室を本発掘調査した。それらの特徴について、簡単にまとめてみたい。

３基の築造順序は、出土している須恵器の型式からみて、５号墳→６号墳→２号墳の順である。ただ、第４章でもふれたように、５号墳の築造時期であるが、出土している坏身坏蓋２組のうち、一組はＴＫ47 型式の特徴を持ち、もう一組はＭＴ 15 型式の特徴を持っている。また、有蓋高坏については口縁端部が丸みを帯びているので、若干新しい要素は感じられるが、短脚である点からＭＴ 15 型式の範疇でとらえている。この型式差を初葬・追葬とみるか、同時に副葬されたと考えるかで築造時期は変わってくる。

遺構の項でも述べたが、５号墳は前壁を内側に積み足している。この積み足しが初葬までに行われたのか、あるいは追葬時に行われたのかについては、石室を現状保存したため、詳細については確認できていない。石室側壁を全面的に積み足して規模を減じるという例は神宮谷３号墳（京都府綾部市）などでも認められるが、当墳の場合、当初の壁面と積み足した部分が密着していることと遺物の出土状態からは追葬の有無が確認できなかった。したがって、須恵器群については同時に副葬されたと考え、築造時期を６世紀前葉としたい。つまり、導入期の横穴式石室の新例と考えられる。

兵庫丹波でこれまでに見つかっている導入期の横穴式石室墳には多利向山Ｃ２号墳と井原至山古墳があり、それらの石室は平面形が方形を呈するものである。また、京都丹波にはこれらより若干先行する可能性がある北ノ庄 13 号墳・14 号墳（亀岡市）で同様の石室が検出されている。兵庫丹波でも旧多紀郡の灰高１号墳では平面形が長方形を呈し、短辺に羨道が付く両袖式の横穴式石室が導入されている。播磨地方では板石を用いた片袖式の横穴式石室である剣坂古墳が導入期のものだが、こちらも長方形の石室の短辺に羨道が設けられる。また､但馬においては竪穴系横口式石室で八幡山５号墳が同じ時期の石室に当たる。つまり、いわゆる「Ｔ」字形の平面形を持つ５号墳と同様のものは近隣では認められない。ただ、平面形だけの類似をたどればＴＫ 47 型式併行のものとされる新立表２号墳（福岡県福岡市）や岩橋千塚（和歌山県和歌山市）などが挙げられるが、現在のところ、それらとの関連については不明とせざるを得ない。ただ、石室構築時の用石法に一貫性がない、前壁の積み足し、といった特異な点があることから、技術系譜・伝播の面でも意義深いものと考える。

２号墳については、６号墳を破壊して構築しているという点を除けば、７世紀代の無袖化した横穴式石室として典型的なものと考えられる。

６号墳の築造時期は奥壁前に副葬されていた須恵器からすれば６世紀後葉以前ということになる。ただ、これらの須恵器が初葬時のものかどうかについては、検討が必要である。遺構の項でも述べたように、２・６号墳の墳丘や周溝からは６世紀半ばに遡る須恵器が出ており、これらを６号墳の初葬時のものと考えることもできる。６号墳の石室は無袖式ではあるが、基底石に板状石材を立てている点、奥壁石材の一部が側壁にかませている点で石室の構築方法としては古い要素が残っていることも、築造時期を遡らせる要素となると考えている。また、東側壁が基底石のみであるため、本来の石室の用石法は明瞭ではないが、使用石材や用石法に一貫性がない点で５号墳と共通しているのではないかと考えられ、この点からも５号墳に引き続いて築造されたのではないかと考えられる。

山田大山古墳群は本発掘調査した３基以外にも、確認調査された３号墳や、ほとんどが事業範囲外に当

たり、墳丘・石室がほぼ残っており、巨石で石室を構築する１号墳、同じく巨石で石室を構築していると思われる４号墳などがあり、一つの古墳群中に様々なバリエーションの横穴式石室が存在している。このバリエーションが単に時期差に由来するものなのか、２号墳が６号墳を破壊して構築されていることを重視して、そこに造営集団の差を見出すのかについては、現状では判断できないものの、当古墳群の調査成果が丹波地方や県下の横穴式石室の導入を考える上で意義深いものであることは確かである。

古墳時代以外では、調査区内から出土した律令期の土器と、中世前期の土器が注目される。

須恵器坏Ｂ（48）は８世紀代と考えられ、同様の時期の遺物は谷内においても採取されている。須恵器坏Ｂ（48）は２号墳石室追葬時の遺物が示す時期とは 100 年近く離れており、下流の扇状地において集落が形成された時点で、再び上流にある古墳群への干渉を始めたものと考えられる。

同様のことは中世前期においてもみられる。５号墳の墳丘上から龍泉窯劃花文青磁碗片（60）が出土しており、鎌倉時代に墳丘上が使用されている。下流の谷入口付近の扇状地では同時代の瓦器片や須恵器片が多数採集されており、宝篋印塔も存在する。このことから谷入口周辺には鎌倉時代の集落が存在した可能性が高く、奈良時代から時間をおいて、再び上流にある古墳群への干渉を始めたものと考えられる。古墳を霊的な聖地（勝地）としてとらえ、中世墓あるいは経塚を構築する例は多い、今回の調査においても５号墳周辺から中世火葬墓の存在を示唆する集石遺構ＳＸ 02・ＳＸ 08・ＳＸ 09 や丹波焼甕（47）が見つかっており、５号墳の周辺を墓地としていた可能性が考えられる。その場合、ＳＸ 07 が火葬址として機能していた可能性を考えたいが、類例が乏しく検討課題としたい。

本古墳群では更に新しい時期の焼土坑群が見つかっている。焼土坑群の周辺からは寛永通宝Ｍ３・Ｍ４・Ｍ５が見つかっており、近世にも古墳群への干渉があったことが分かる。

また、今回出土した鋳鉄製の猿（Ｍ６）は類例がないが、庚申信仰に伴うものとも考えられる。本古墳群の３号墳の近接地には若宮神社の跡地もあり、この谷奥が信仰の場であったことは想像に難くない。

（参考文献）

大野嶺夫「岩橋千塚と周辺のＴ字形横穴式石室（上・下）」『古代学研究』第 109 号・第 110 号（1985・1986）

加西市史編さん委員会『加西市史　第七巻　史料編１　考古』(2010)

佐藤隆「６世紀における須恵器大型化の諸様相－陶邑編年の再構築に向けて・その３－」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号（2007）

中浜久喜「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室から見た播磨』第２回播磨考古学研究集会実行委員会（2002）

中村弘「但馬における横穴系埋葬施設の導入」『古代但馬と日本海』但馬考古学研究会（1995）

西口圭介「近畿の中世墓」『日本の中世墓』高志書院（2009）

林日佐子「丹後・丹波における初現期の横穴式石室」『考古学と技術』(1988)

兵庫県教育委員会『多利向山古墳群』(1986)

兵庫県教育委員会『三釈迦山北麓遺跡群』(2013)

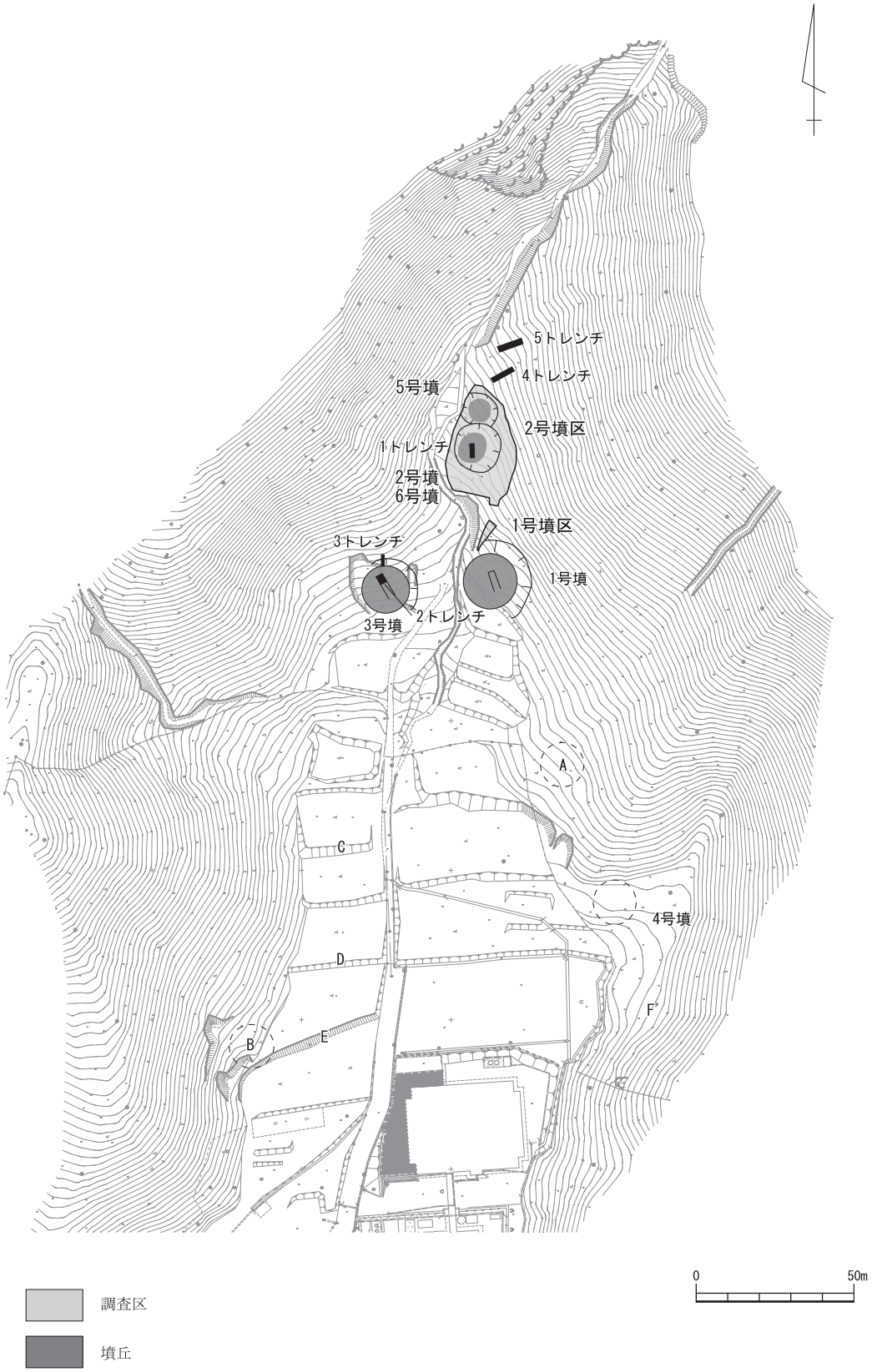
福岡市教育委員会『席田遺跡群（Ⅵ)』(1990)

松井忠春・小池寛「改築された横穴式石室－京都府中丹地域例を中心に－」『京都府埋蔵文化財情報』第 62 号（1996）

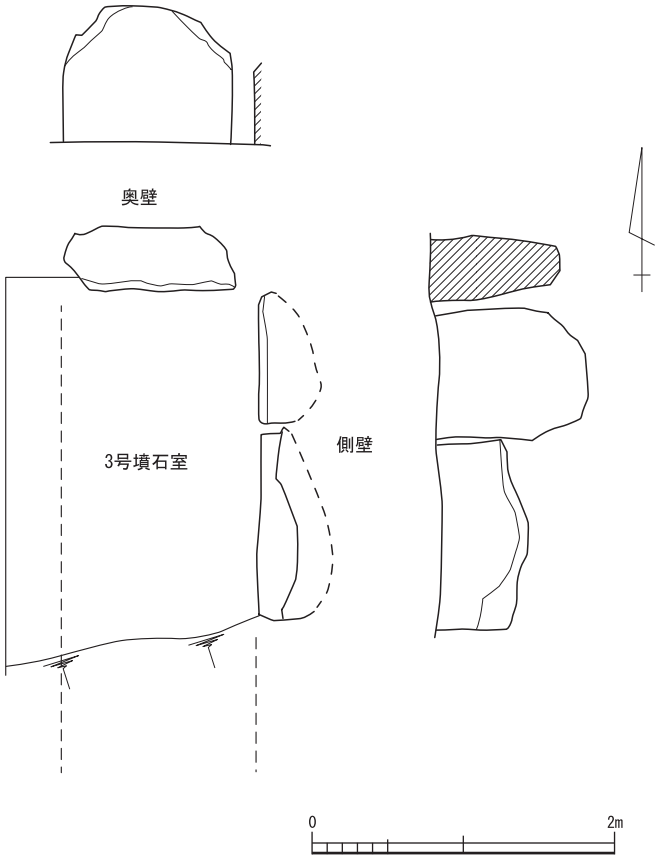
宮川禎一・矢野健一「兵庫県加西市剣坂古墳調査報告」『辰馬考古資料館　考古学研究紀要』３（1999）

横穴式石室研究会『研究集会　近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局（2007）

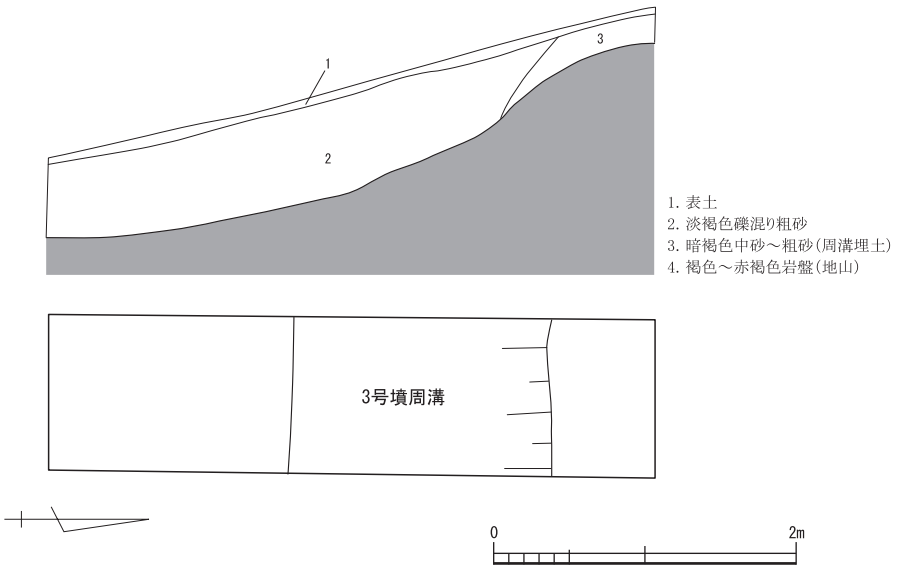
図　　版


5トレンチ
4トレンチ
5号墳
2号墳区
1トレンチ
2号墳
6号墳
1号墳区
3トレンチ
1号墳
3号墳
2トレンチ
A
C
4号墳
D
F
B
E
0
50m
調査区
墳丘

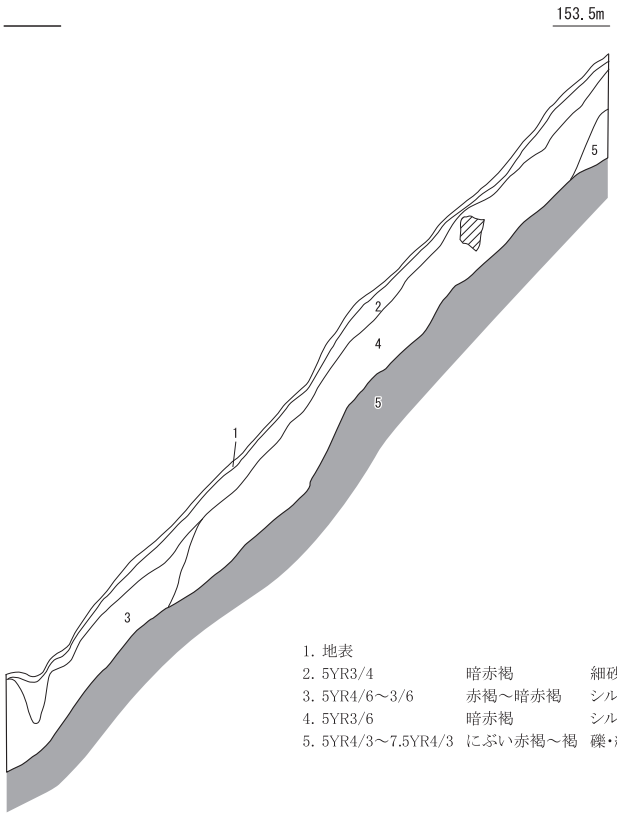
調査区とその周辺



2トレンチ　平面図・断面図

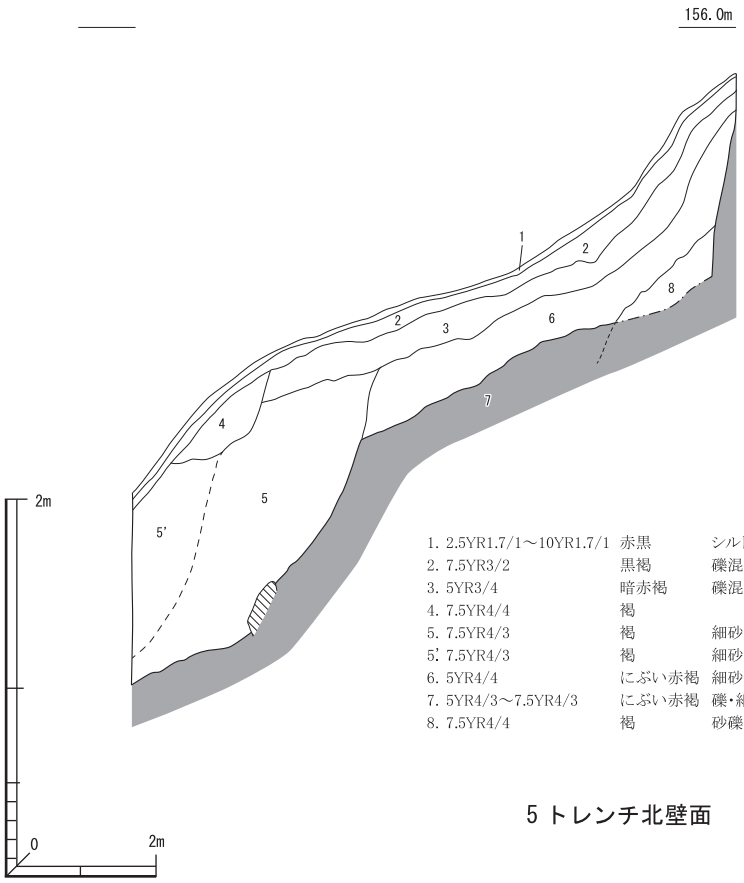


3トレンチ　平面図・断面図



1. 地表			5トレンチの1・2層
2. 5YR3/4	暗赤褐	細砂混り極細砂質シルト	
3. 5YR4/6～3/6	赤褐～暗赤褐	シルト混り細砂	φ5cm内外礫多く 含む 5トレンチの5層
4. 5YR3/6	暗赤褐	シルト混り細砂	φ5cm内外角礫含む 5トレンチの6層
5. 5YR4/3～7.5YR4/3	にぶい赤褐～褐	礫・細砂混りシルト	粘性あり 5トレンチの7層

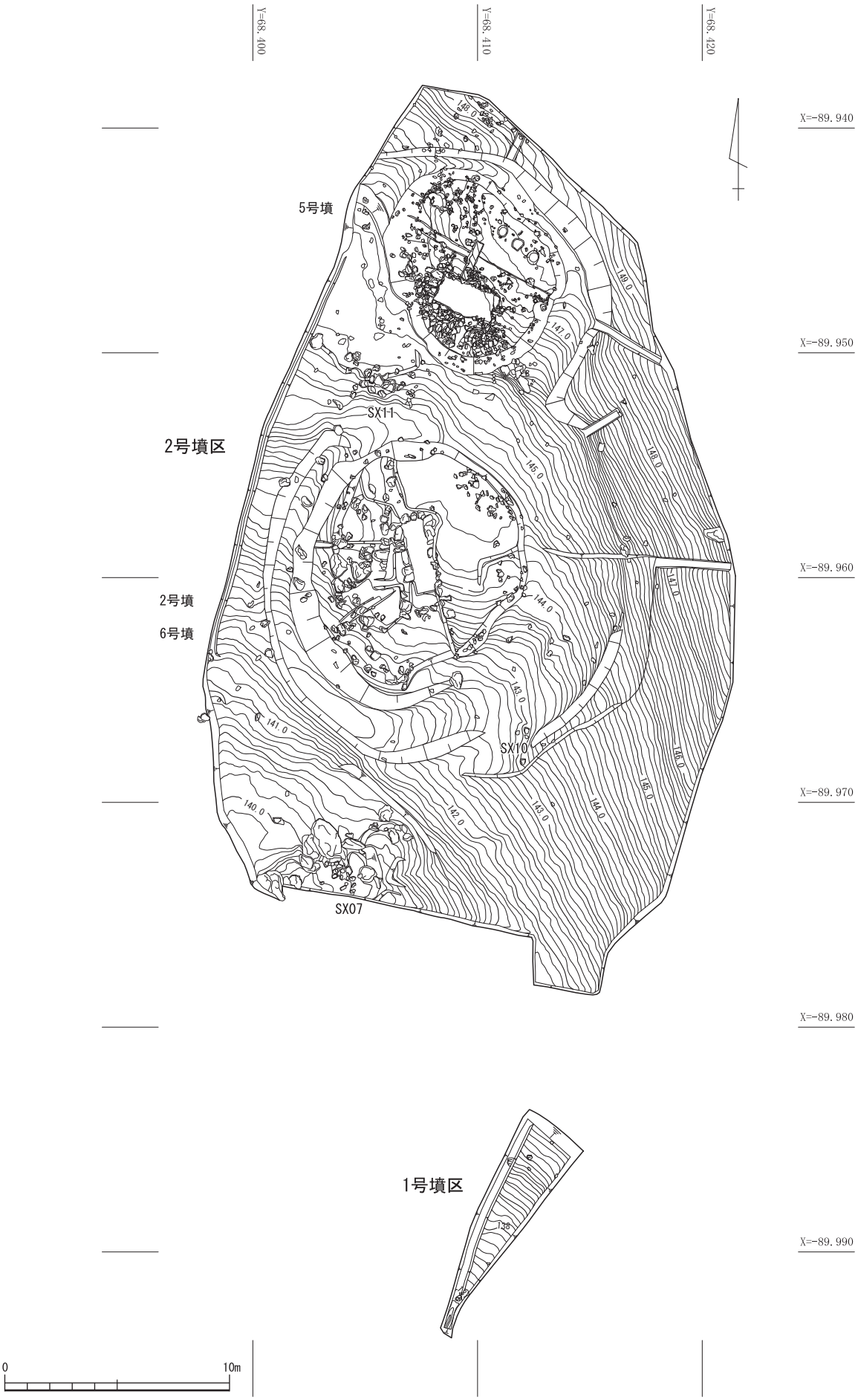
4 トレンチ北壁面



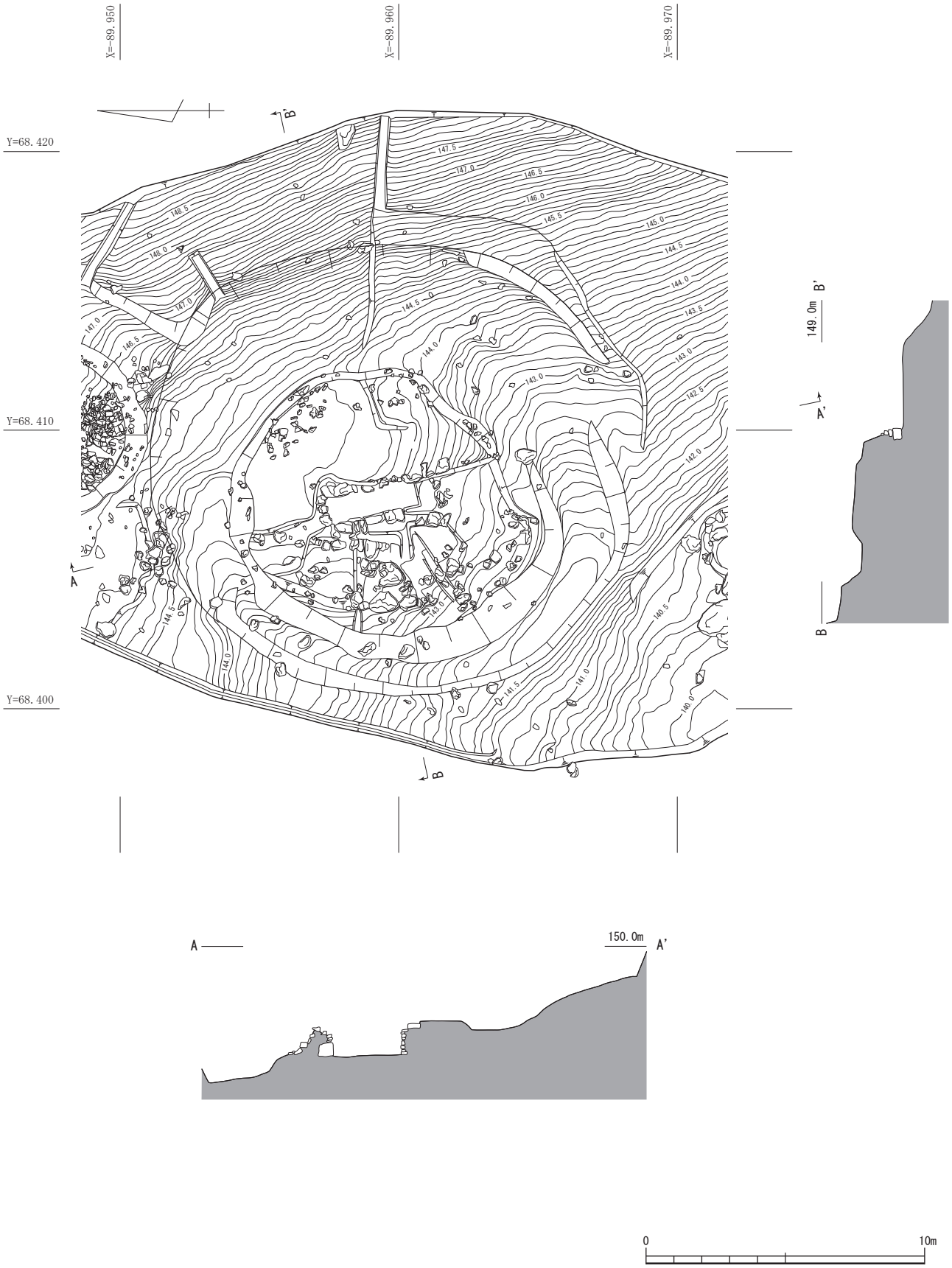
1. 2.5YR1.7/1～10YR1.7/1	赤黒	シルト質極細砂	現地表
2. 7.5YR3/2	黒褐	礫混り極細砂	表土
3. 5YR3/4	暗赤褐	礫混りシルト	φ10cm～3mm内外の角礫多く 含む
4. 7.5YR4/4	褐		3層に比べφ5cm内外礫多し
5. 7.5YR4/3	褐	細砂～中砂混り礫	φ3～15cm内外角礫密集
5'. 7.5YR4/3	褐	細砂～中砂混り礫	φ2～30cm角礫密集
6. 5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混りシルト	φ5cm内外角礫多く 含む
7. 5YR4/3～7.5YR4/3	にぶい赤褐	礫・細砂混りシルト	粘性あり
8. 7.5YR4/4	褐	砂礫	φ5mm内外角礫とφ5cm内外角礫密集

5 トレンチ北壁面

第 2 次確認調査トレンチ土層断面


Y=68.400
Y=68.410
Y=68.420
X=-89.940
X=-89.950
X=-89.960
X=-89.970
X=-89.980
X=-89.990
5号墳
2号墳区
2号墳
6号墳
SX11
SX10
SX07
1号墳区
0
10m

調査区全体図

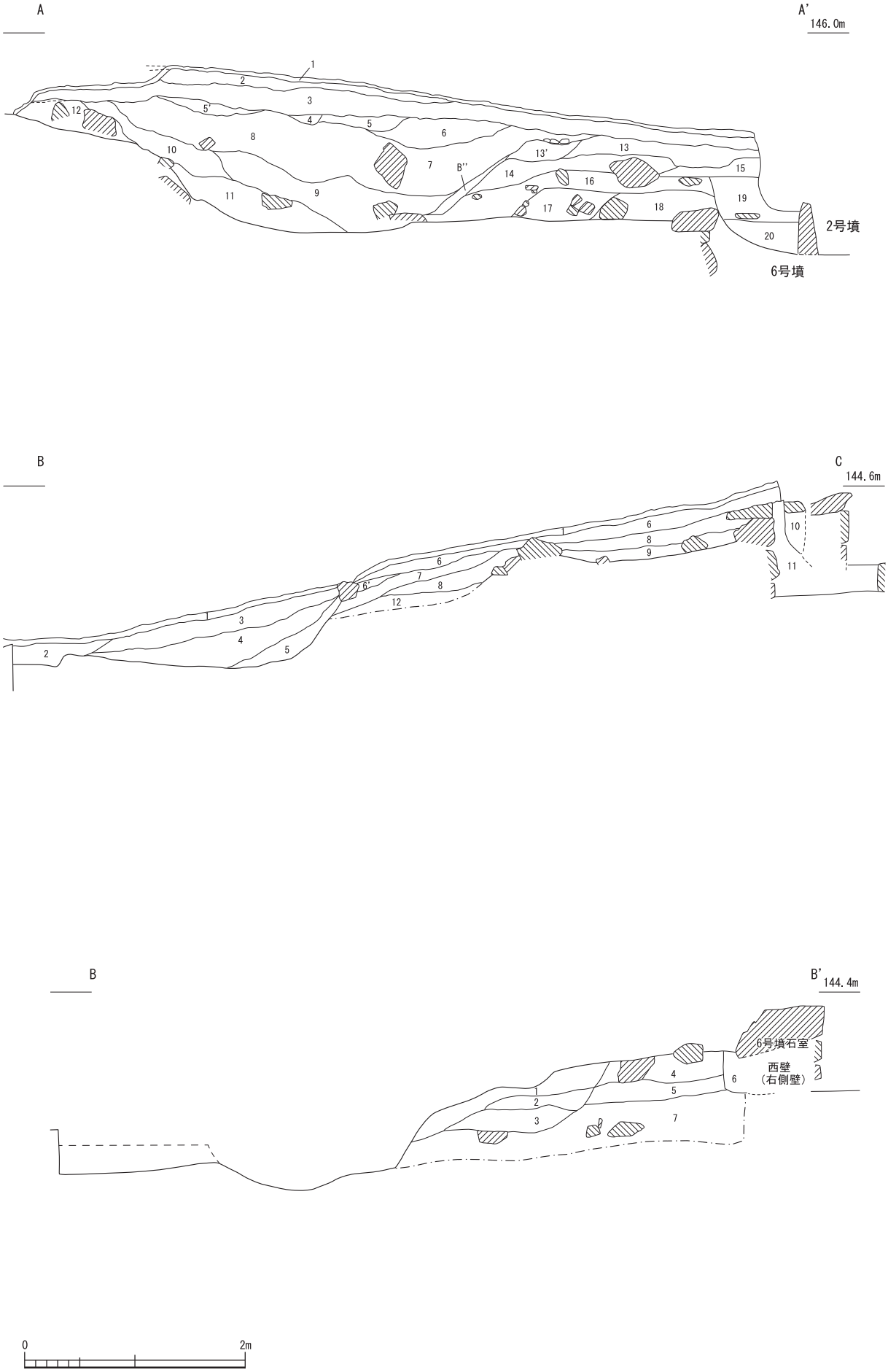

X=-89.950
X=-89.960
X=-89.970
Y=68.420
Y=68.410
Y=68.400
A
A'
B
B'
149.0m
150.0m
0
10m

2 号墳・6 号墳全体図

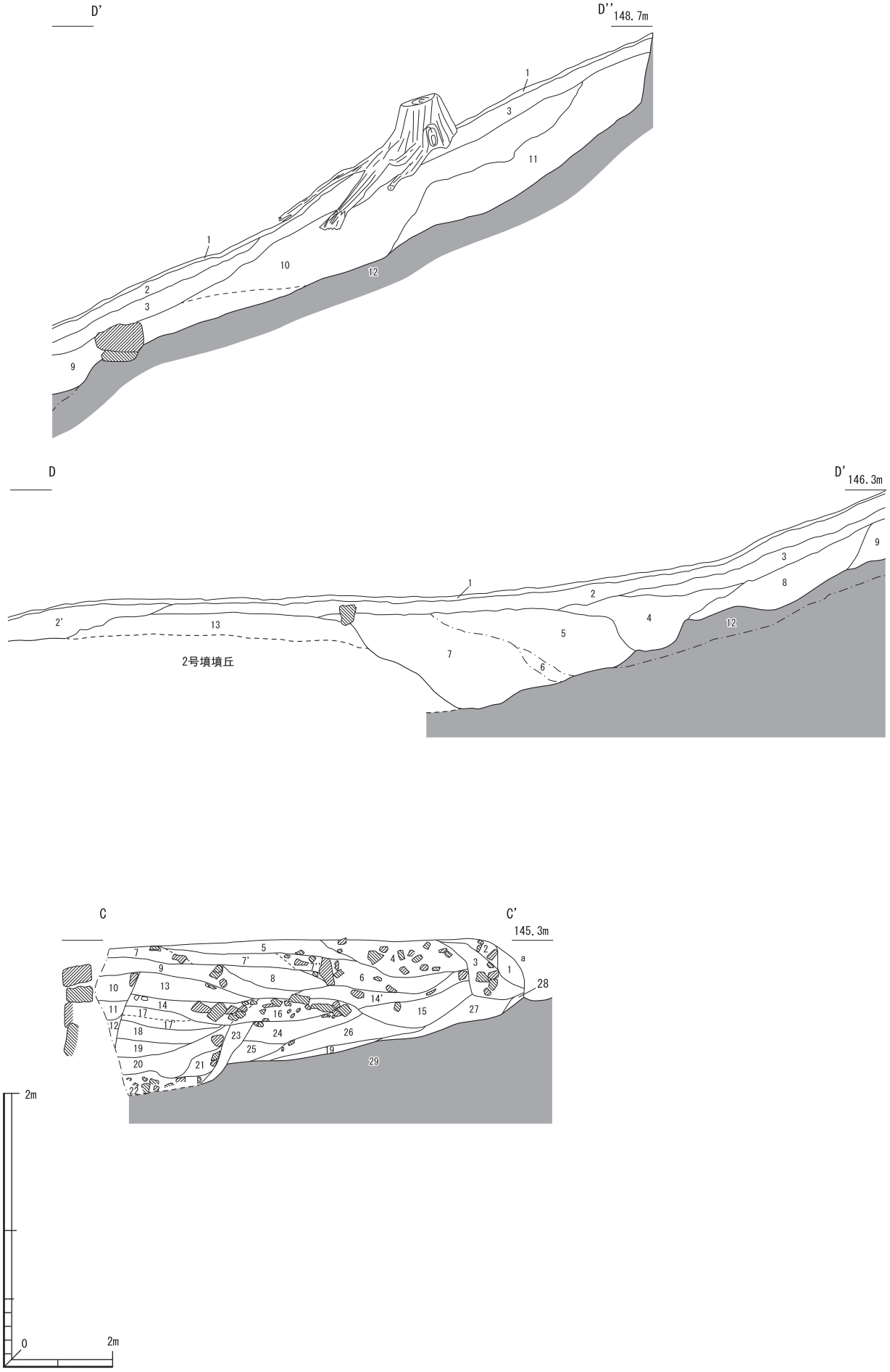
144.5
144.0
143.5
143.0
142.5
142.0
140.5
147.0
146.5
147.0
145.0
146.5
144.5
144.5
144.0
143.0
146.0

0 5m

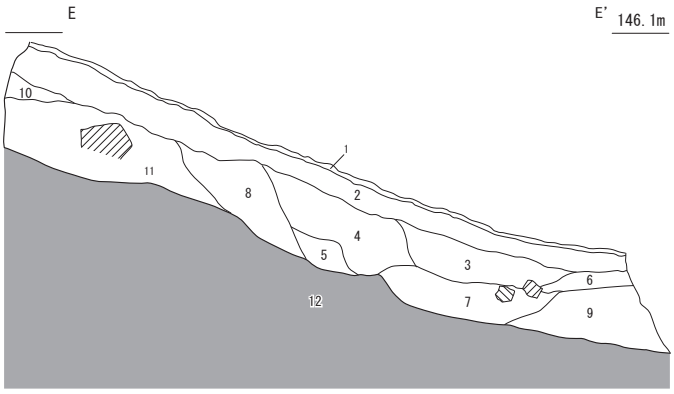
2 号墳全体図

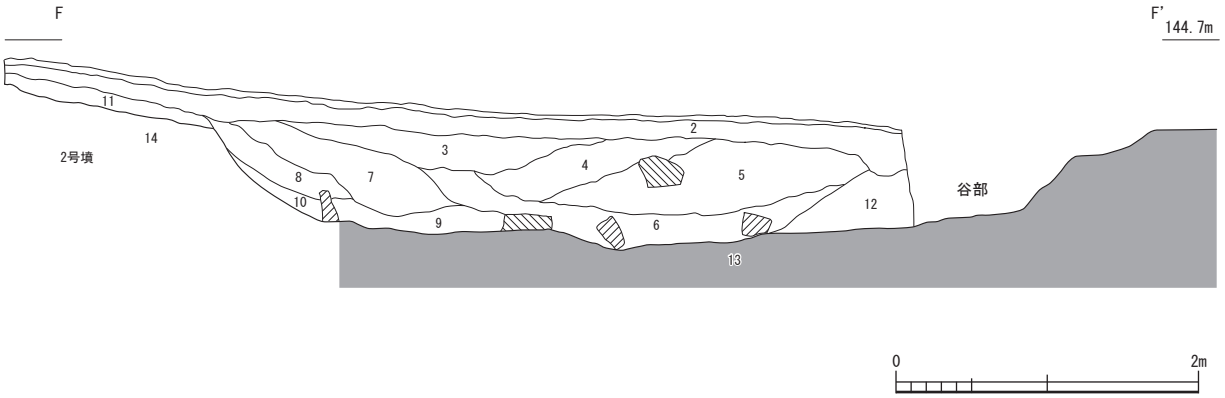


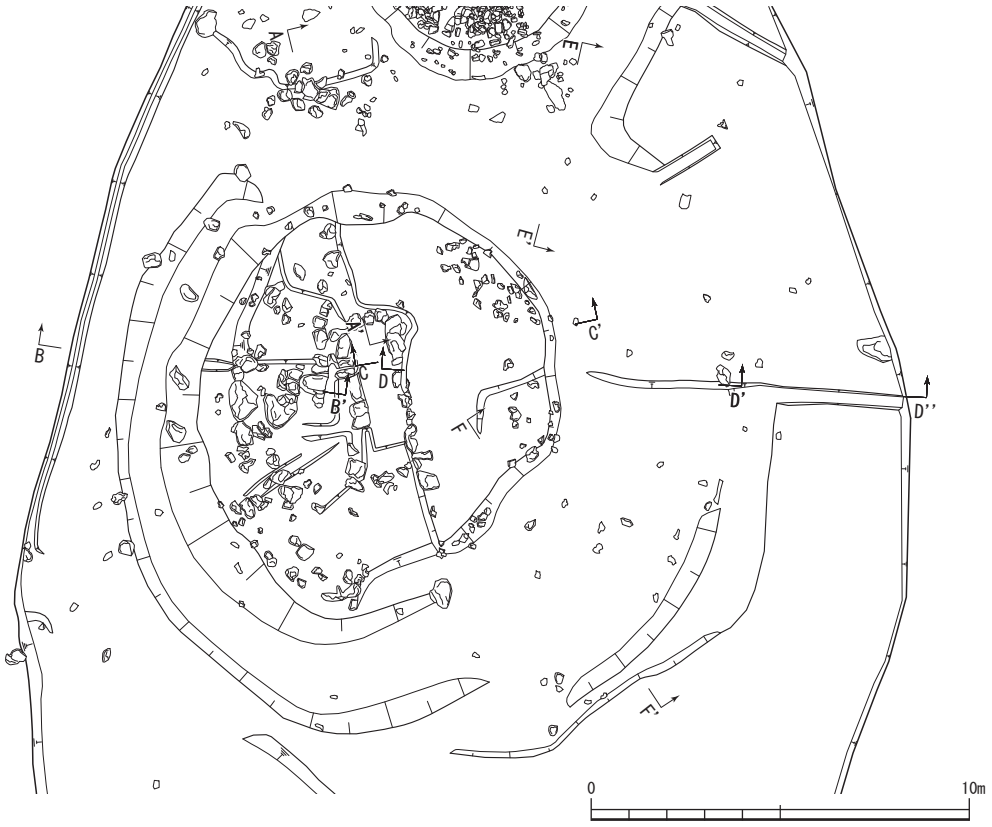
2 号墳・6 号墳　墳丘・周溝土層断面図 1



2 号墳・6 号墳　墳丘・周溝土層断面図 2







2 号墳・6 号墳　墳丘・周溝土層断面図 3

A-A'

1.				表土　地衣類が入る
2.	7.5YR4/4	褐	礫混じり細砂	径5cm内外角礫密に入る　5号墳南土手1層に同じ
3.	7.5YR4/3	褐	シルト含む細砂	5mm～5cm角礫多く含む　5号墳南土手5層に対応
4.	7.5YR4/3～7.5YR4/4	褐	細砂混じりシルト	
5.	7.5YR3/3	暗褐	極細砂質細砂	炭化物含む。径2cm内外角礫入る 5´はマンガンが集積する
6.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じり極細砂	径1cm内外角礫多く含む　10cm大礫入る　やや黄色調
7.	7.5YR4/3	褐	混じり細砂～極細砂	径1cm内外角礫多く含む　5cm～10cm大礫入る
8.	7.5YR3/3	暗褐	礫・シルト混じり細砂～中砂	径5cm～10cm角礫・径5mm～1cm角礫多く含む
9.	7.5YR3/4	暗褐	礫混じり極細砂質シルト	径5mm～1cm角礫多く入る
10.	5YR3/3	暗赤褐	礫混じりシルト質極細砂	径3cm～10cm角礫多く含む
11.	7.5YR3/3	暗褐	礫混じり極細砂質シルト	
12.	7.5YR3/3	暗褐	シルト混じり細砂	
13.	7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり極細砂質細砂	径10cm内外角礫含む　2号墳墳丘盛土
13'.	7.5YR3/4	暗褐	粗砂混じりシルト	径5mm内外礫多し　墳丘流土か
13''.	7.5YR3/4	暗褐	粗砂混じりシルト	粒子粗く、締まり乏しい　径5mm内外角礫多し
14.	7.5YR4/4～7.5YR3/4	褐～暗褐	礫・極細砂混じり細砂	径5cm～10cm角礫含む　2号墳墳丘盛土
15.	7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり細砂	2号墳墳丘盛土
16.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質細砂	2号墳墳丘盛土
17.	7.5YR4/3	褐	細砂質シルト	6号墳墳丘
18.	7.5YR4/3	褐	細砂質シルト	角礫を含まない　6号墳墳丘
19.	7.5YR3/4	暗褐	細砂質シルト～粗砂	
20.	7.5YR3/4	暗褐	細砂質シルト～粗砂	19層よりも濃い色調
21.				6号墳石室

B-C

1.	7.5YR5/3	にぶい赤褐	細砂～礫	径5mm～1cm角礫多く入る　表土
2.	7.5YR4/4	褐	細砂質極細砂	旧沢筋の堆積
3.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じり細砂	2号墳周溝埋土
4.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫混じり極細砂質シルト	2号墳周溝埋土
5.	5YR3/4～5YR3/2	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂	径3mm内外角礫多く含む　径5cm内外角礫含む　2号墳周溝埋土(墳丘流土第1層)
6.	5YR4/4	にぶい赤褐	シルト混じり細砂	2号墳墳丘盛土　表土層の影響を受ける
6'.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫混じり細砂	2号墳墳丘盛土
7.	5YR4/3	にぶい赤褐	極細砂混じり細砂	径3mm～5mm内外角礫多く含む　2号墳墳丘盛土
8.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じり細砂	6号墳墳丘盛土
8'.	5YR3/4	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂	2号墳墳丘盛土(1次墳丘)
9.	5YR3/6	暗赤褐	礫・細砂混じりシルト	径5cm内外角礫入り汚れる　6号墳墳丘盛土
10.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じりシルト質極細砂	径5cm内外角礫入る　2号墳石室墓壙埋土
11.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫混じり極細砂質細砂	10層より礫少ない　6号墳石室埋土
12.	5YR3/6	暗赤褐	礫・細砂混じりシルト	径5cm内外角礫入り汚れる　旧表土もしくは表土直下　B－B'7層対応

B-B'

1.	7.5YR4/4	褐	粗砂・小礫混じり細砂～極細砂	2号墳墳丘盛土
2.	7.5YR3/3	暗褐	細砂混じり粗砂～小礫	2号墳墳丘盛土(1次墳丘)
3.	7.5YR3/4	暗褐	粗砂・小礫混じり細砂～極細砂	拳大角礫多く含む　2号墳墳丘盛土(1次墳丘)
4.	7.5YR3/4	暗褐	粗砂・小礫混じり細砂～極細砂	6号墳墳丘盛土
5.	7.5YR3/3	暗褐	粗砂混じり細砂～極細砂	6号墳墳丘盛土
6.	7.5YR2/3	極暗褐	細砂混じり粗砂	6号墳石室墓壙埋土
7.	7.5YR3/4	暗褐	粗砂混じり細砂	拳大～人頭大の角礫含む　旧表土もしくは表土直下　5層との間が被熱、炭化物を含む

D-D'

1.	7.5YR3/3	暗褐	細砂～中砂混じり極細砂	表土
2.	5YR3/6	暗赤褐	シルト質極細砂混じり細砂	B-C間6層対応
2'.	5YR4/3	にぶい赤褐	細砂混じり礫	径3mm～5cm内外角礫多く含む　B-C間6層対応
3.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫混じりシルト質極細砂	黄色調
4.	5YR4/3	にぶい赤褐	礫・シルト混じり細砂	径2mm内外角礫多く含む
5.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫・中砂・シルト混じり細砂	径2cm内外礫多く含む　径5cm内外角礫若干入る
6.	5YR3/4	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂	径5mm内外角礫含む
7.	5YR3/4	暗赤褐	礫・粗砂混じり細砂	径5cm～10cm角礫多量に入る
8.	5YR3/6	暗赤褐	礫混じり細砂質極細砂	径10cm礫含む
9.	5YR3/6	暗赤褐	礫混じりシルト質極細砂～細砂質極細砂	10層の上半に近く、8層に比べ礫少ない　径3cm内外礫含む
10.	5YR3/4	暗赤褐	シルト含む極細砂質細砂	下半に径10cm内外の角礫多く、11層に近い
11.	5YR3/3	暗赤褐	礫・細砂含むシルト質極細砂	
12.	5YR3/3	暗赤褐	礫混じり極細砂質シルト	径10cm内外の礫入る(地山)
13.	7.5YR3/4	暗褐		炭化物入る　2号墳墳丘盛土　B-C間8層対応

2号墳・6号墳　墳丘・周溝土層断面図　土層名1

C-C’

1.	7.5YR3/4	暗褐	礫～シルト混じり細砂	2号墳丘盛土
2.	5YR3/2	暗赤褐	シルト混じり細砂	2号墳(2次)墳丘盛土
3.	5YR4/3～7.5 YR4/3	にぶい赤褐～褐	極細砂質細砂	径5cm～10cm大礫入れる 列石基底部掘方埋土
4.	5YR3/4	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂～中砂	径10cm内外の角礫を多量に入れる 2号墳(2次)墳丘盛土
5.	7.5YR3/3	暗褐	シルト混じり極細砂質細砂	径5mm～1cm角礫多く含む 粘性・締まりは乏しい
6.	5YR3/3	暗赤褐	礫・シルト・極細砂混じり細砂	
7.	5YR3/6	暗赤褐	極細砂質細砂	2号墳(1次)墳丘盛土
7’.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質細砂	6層より若干シルト多く汚れる
7”.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質細砂	径10cm内外礫含む
8.	5YR3/4	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂	粘性は乏しく 、若干締まる 径3mm内外礫多く 、径3cm内外礫入る 2号墳墳丘盛土
9.	5YR3/4	暗赤褐	細砂混じり粘質シルト～シルト質極細砂	2号墳(1次)墳丘盛土
10.	5YR3/4	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂	径5mm内外礫多く含む 締まり・粘性は乏しい 2号墳石室墓壙掘方埋土
11.	5YR3/4	暗赤褐	礫・シルト混じり極細砂質細砂	粘性ややあり、締まりは乏しい 径5mm内外の礫を22層よりも多く含む 2号墳石室墓壙掘方埋土
12.	5YR3/2	暗赤褐	礫・細砂混じりシルト	粘性あり、締まりは乏しい 径5mm内外の礫を多く含む 2号墳石室墓壙掘方埋土
13.	5YR3/4	暗赤褐	シルト混じり細砂	径5mm内外礫含む
14.	5YR3/3	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂	径5cm～10cm角礫多く含む 径5mm内外礫多量に含む
14’.				8層を被覆、径5mm内外礫多く含む 6号墳周溝埋土
15.	7.5YR3/4	暗褐	礫・粘土～シルト混じり細砂	径3mm内外礫多く含む 6号墳周溝埋土
16.	5YR3/3	暗赤褐	シルトを含む細砂～中砂	径20cm内外礫を密に入れる 6号墳墳丘盛土
17.	5YR3/2	暗赤褐	シルト混じり細砂	径5cm～10cm角礫含む
17’.				11層の下半 径3mm内外角礫多く含む
18.	2.5 YR3/2	暗赤褐	シルト混じり細砂	1cm内外礫多く含む 粘性あり
19.	5YR2/4	極暗赤褐	細砂混じり極細砂質シルト	
20.	5YR2/4	極暗赤褐	礫・中砂混じりシルト	粘性あり、締まり乏しい
21.	5YR3/4	暗赤褐	細砂・礫・粗砂混じり粘質シルト	径5～10cm礫入る
22.	5YR3/3	暗赤褐	粗砂・粘土混じり礫	径15cm内外角礫密集
23.	5YR3/3	暗赤褐	礫・細砂混じり粘土質シルト	粘性あり、やや締まる径3cm～5cm内外礫多く入る
24.	5YR3/2	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂質極細砂	径5cm内外礫入る径1cm内外角礫多く入る やや締まる人為的盛土
25.	5YR3/4	暗赤褐	シルト混じり細砂	黄色地山ブロック入る粘性あり 締まりに乏しい
26.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じり粘土～シルト～極細砂	間に3～5mmの角礫が多く含まれる 谷部堆積
27.	5YR3/4～5YR3/6	暗赤褐	土混じり礫	径1cm内外の角礫が密に入る
28.	5YR3/3	暗赤褐		基本19層と同じであるが、間の粘土が少ない
29.	7.5YR4/4	褐		径10cm以上の角礫が露出する 地山(中～細砂混じりシルト質粘土)

E-E’

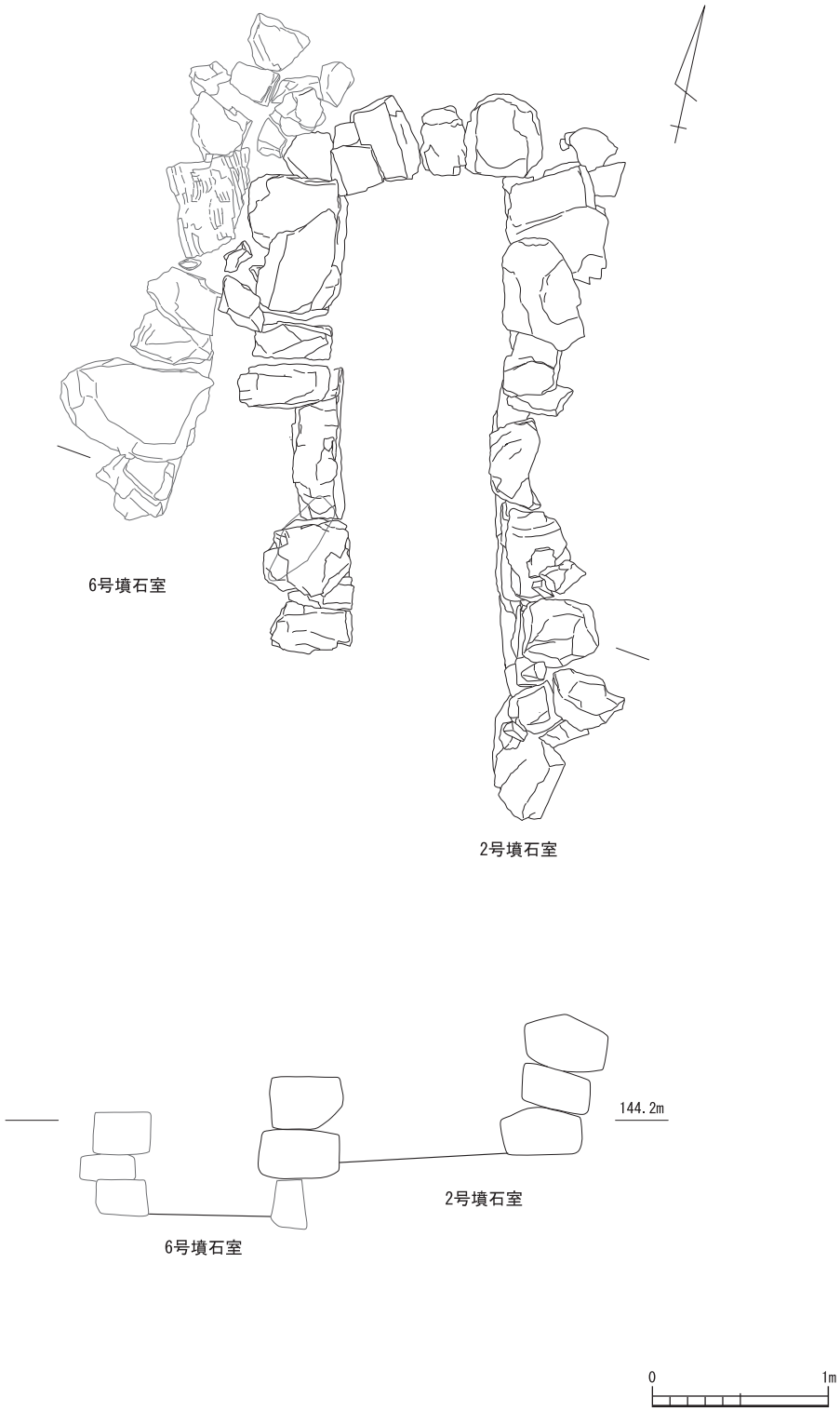
1.	7.5YR3/3	暗褐	粗砂混じりシルト	表土(地表)
2.	5YR4/6	赤褐	礫・シルト混じり細砂	径5～10cmの角礫多く 含む(黄色調)
3.	7.5YR4/4～5YR4/4	褐～にぶい赤褐	礫・細砂混じりシルト	径5mm内外の礫を多く 含む 径10cm大角礫含む 2号墳周溝埋土 10世紀以降の埋土
4.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じりシルト	径5cm大礫及び3mm内外小礫含む 2号墳周溝埋土 10世紀以降の埋土
5.	5YR3/6	暗赤褐	シルト混じり礫	7層に近く 径10cm大角礫密集 2号墳周溝埋土 10世紀以降の埋土
6.	7.5YR4/4	褐	粗砂混じりシルト	2号墳周溝埋土 10世紀以降の埋土
7.	5YR3/6	暗赤褐	礫・粗砂混じりシルト	径5cm大角礫含む 2号墳周溝埋土 10世紀以降の埋土
8.	5YR3/6	暗赤褐	シルト・粗砂混じり細砂	7層に近く径5cmから10cm大角礫密集 2号墳周溝埋土
9.	5YR3/4	暗赤褐	細砂混じりシルト	径10cm内外角礫含む 汚れる 2号墳周溝埋土
10.	5YR3/6	暗赤褐	粗砂混じりシルト	5号墳周溝埋土
11.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じりシルト	径5cm～50cm巨礫含む 5号墳周溝埋土
12.	5YR3/3	暗赤褐	礫・粗砂混じりシルト	ベース 谷部堆積

F-F’

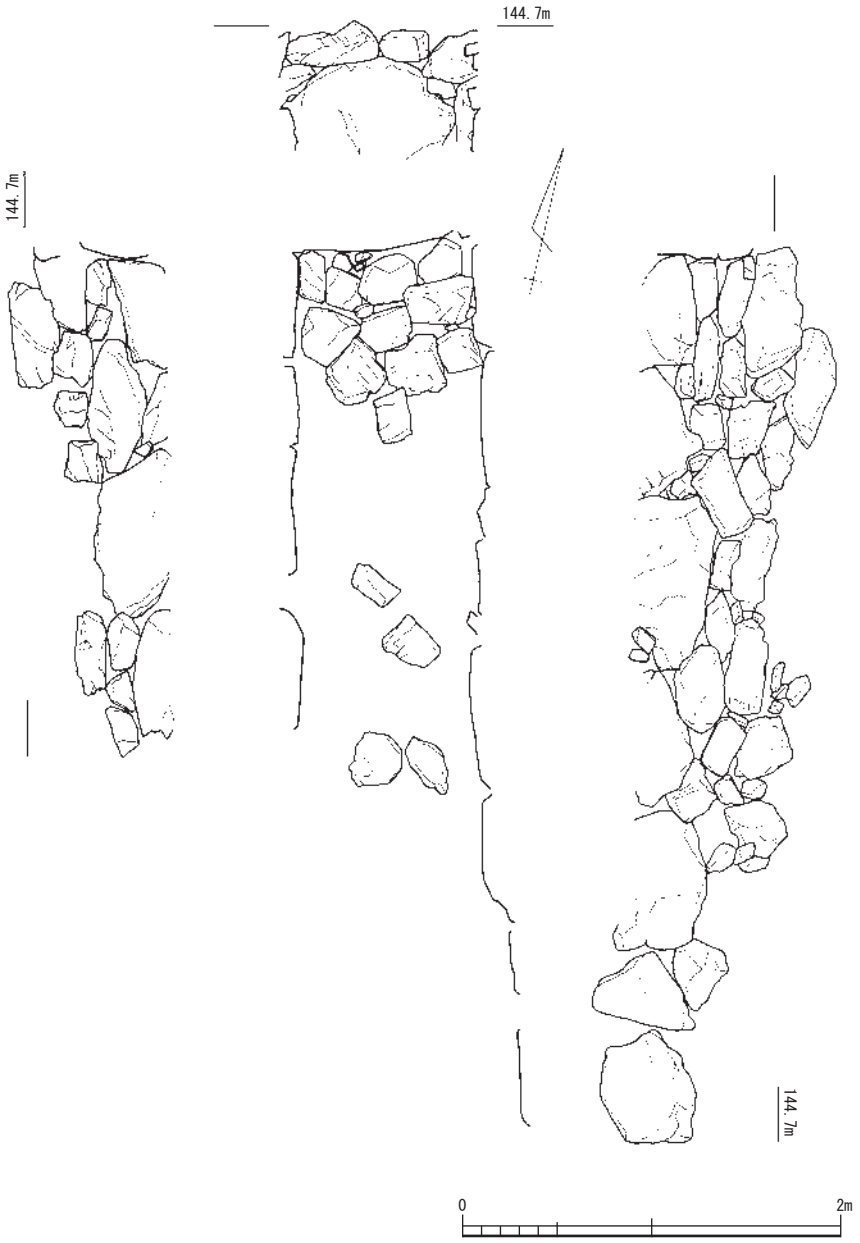
1.	7.5YR3/3	暗褐	細砂～中砂混じり極細砂	表土(地表)
2.	7.5YR4/6	褐	細砂～中砂混じり極細砂	径3mm内外礫含む
3.	5YR3/4	暗赤褐	礫・中砂混じり極細砂	径5cm～10cm角礫多く含む 2号墳周溝埋土
4.	2.5YR3/4	暗赤褐	細砂混じりシルト質極細砂	径1cm内外角礫多く含む 径5cm内外礫多く含む 2号墳周溝埋土
5.	2.5YR3/2	暗赤褐	極細砂質細砂混じりシルト	径10cm内外角礫含む 2号墳周溝埋土
6.	5YR3/3	暗赤褐	礫混じり極細砂質シルト	径20cm内外巨礫入る 2号墳周溝埋土
7.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じり細砂質極細砂	径1cm内外角礫多く含む 2号墳周溝埋土
8.	5YR2/4	極暗赤褐	細砂混じりシルト質極細砂	径5mm内外角礫多く含む 2号墳周溝埋土
9.	5YR2/2	黒褐	礫・極細砂混じりシルト	土壌化している 2号墳周溝埋土
10.	7.5YR3/3	暗褐	礫・極細砂混じりシルト	土壌化している 2号墳周溝埋土
11.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質シルト混じり細砂	2号墳丘盛土(2層の影響を受ける)
12.	5YR3/3	暗赤褐	礫・シルト混じり極細砂	径1cmと5cm内外の礫多く含む 谷部堆積(周溝の肩) 黄色調
13.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫・シルト混じり細砂	地山(谷部のベース)
14.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫混じり細砂	

2号墳・6号墳　墳丘・周溝土層断面図　土層名２

2 号墳　墳丘及び石室の状況

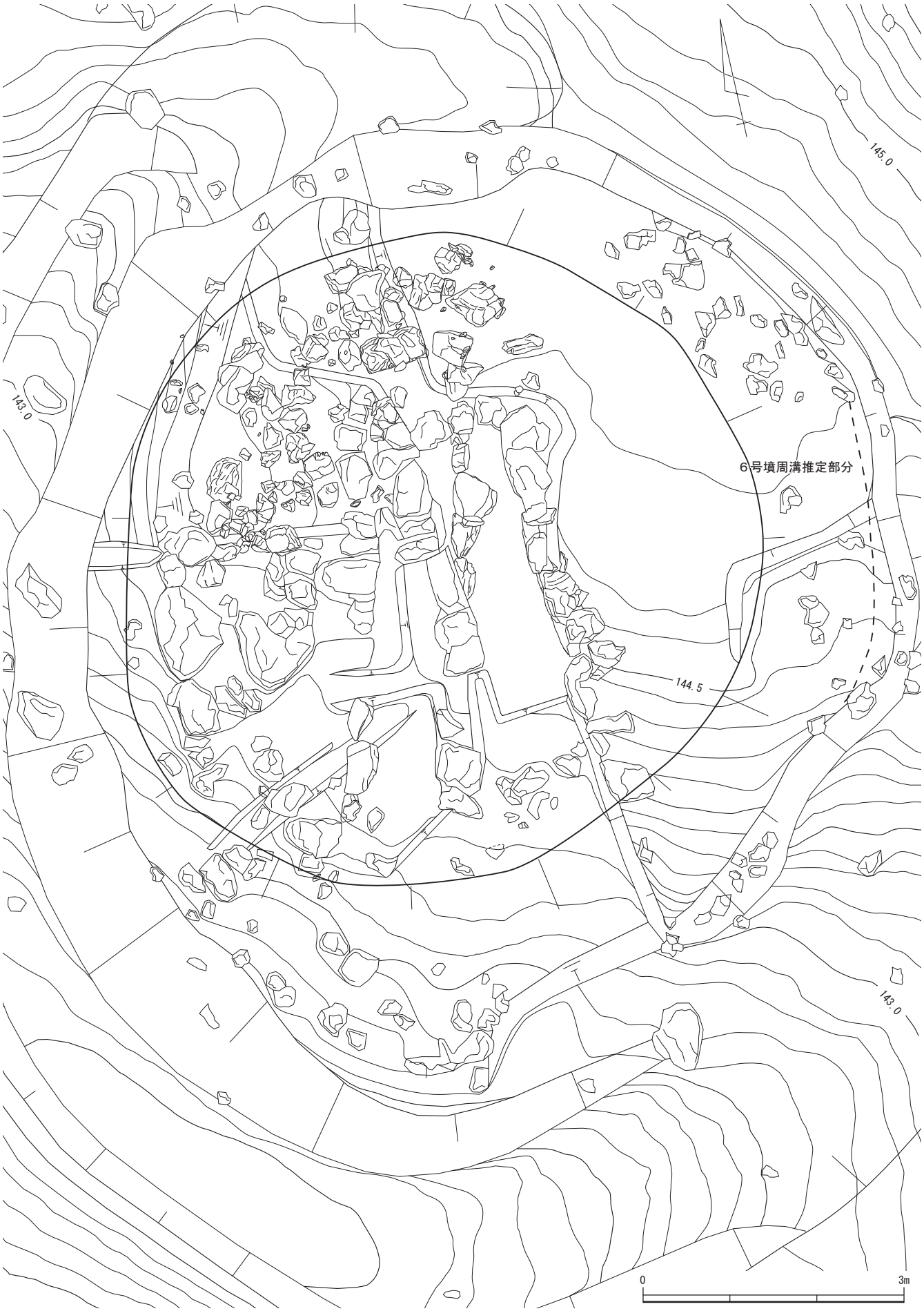


2 号墳石室 1

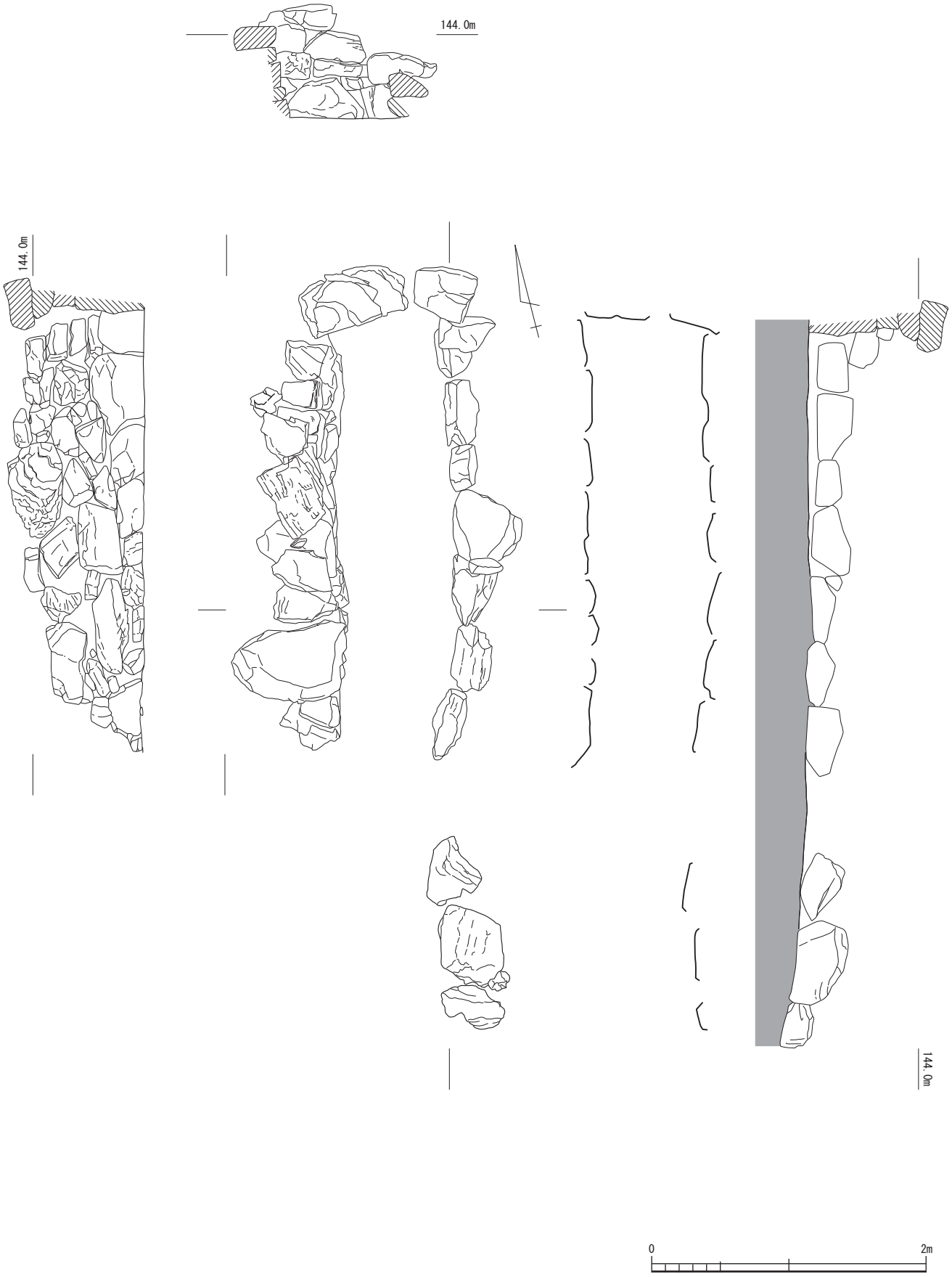


2号墳石室２

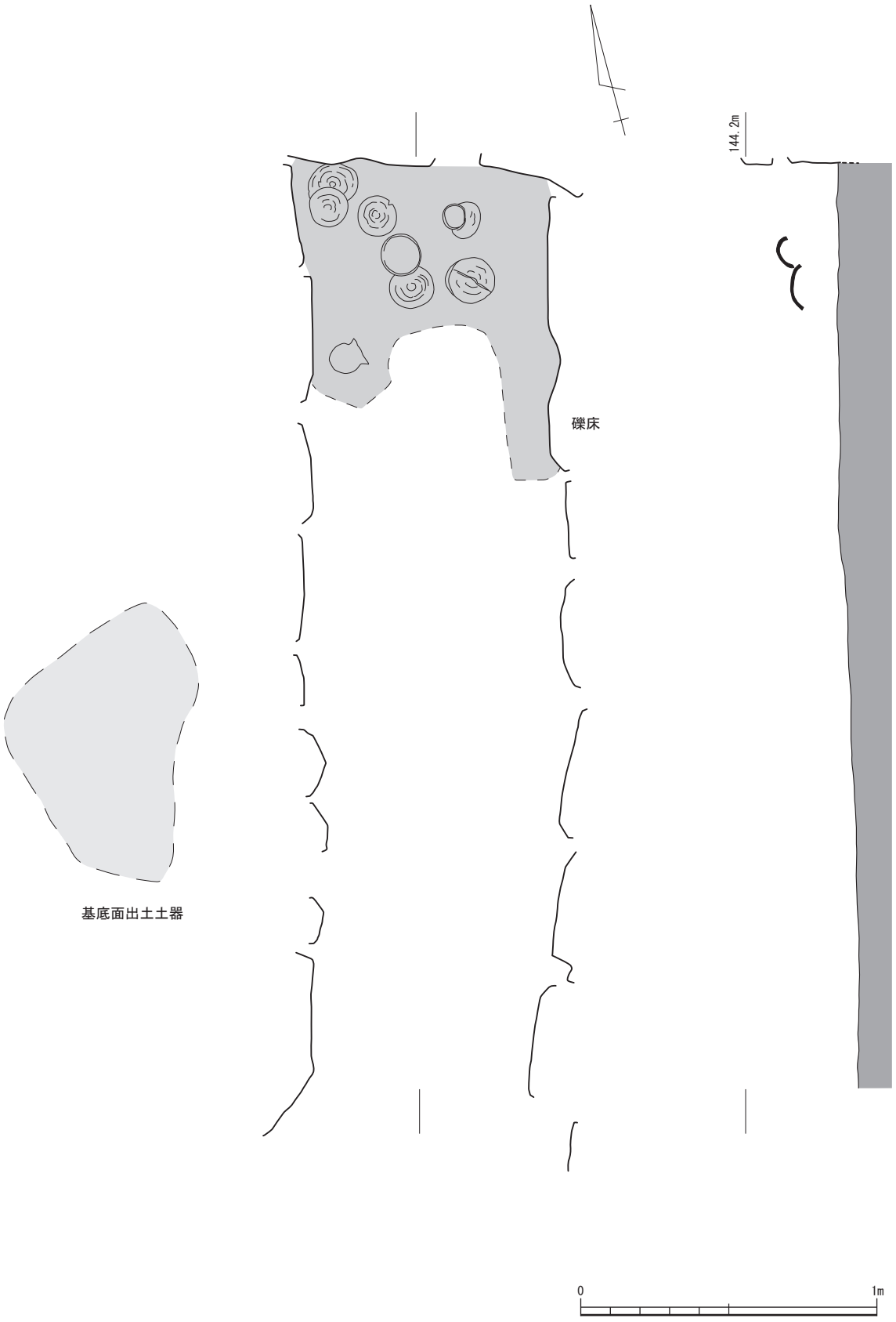
2 号墳遺物出土状況図



6 号墳　墳丘及び石室の状況



6 号墳石室



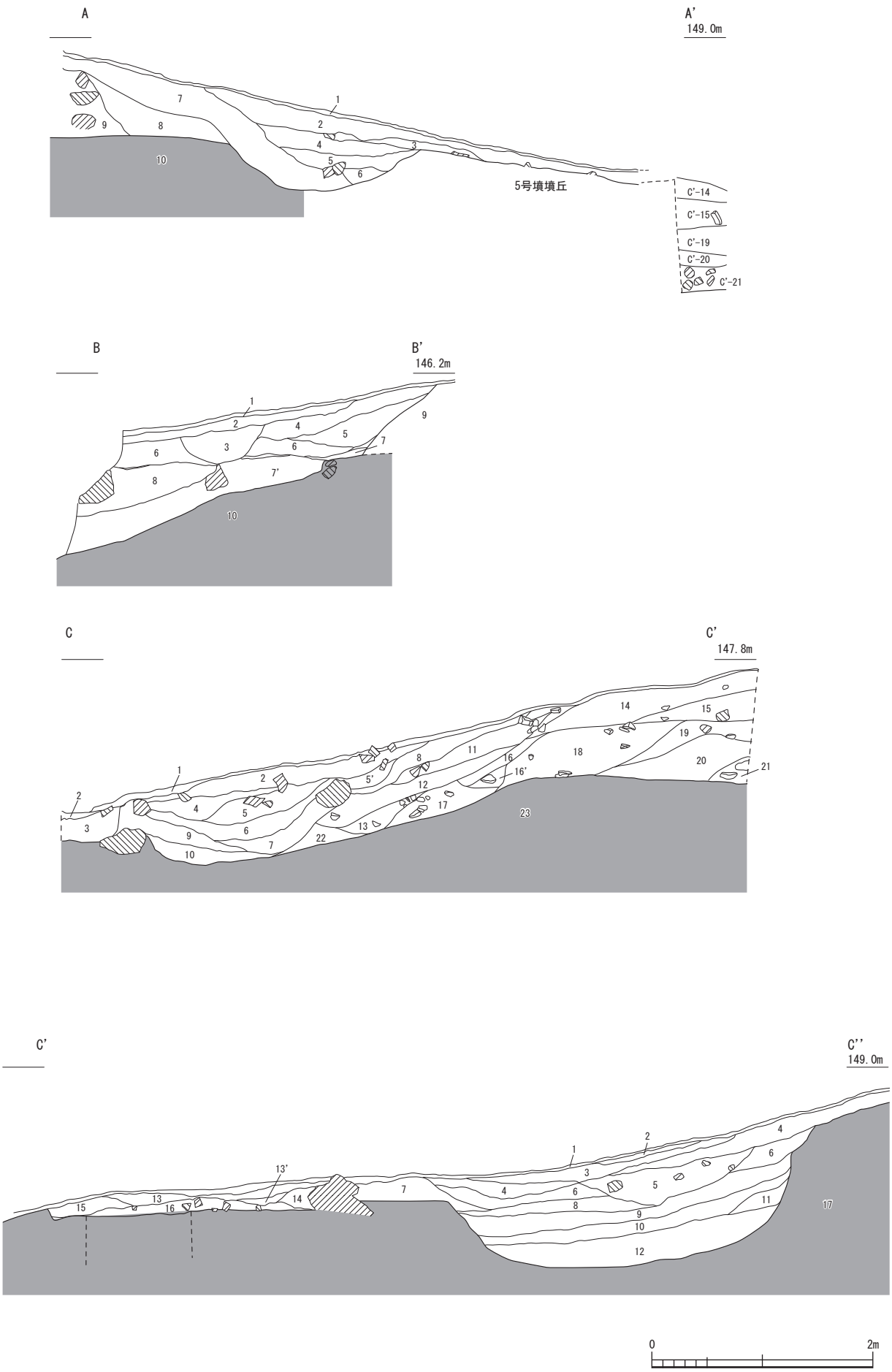
6 号墳石室遺物出土状況図

X=-89.940
X=-89.950
Y=68.420
Y=68.410
Y=68.400
A
A'
B
B'
150.0m
149.0
148.5
148.0
147.5
147.0
146.5
146.0
144.5
144.0
0
10m

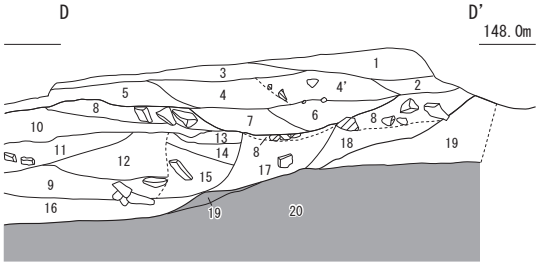
5 号墳全体図

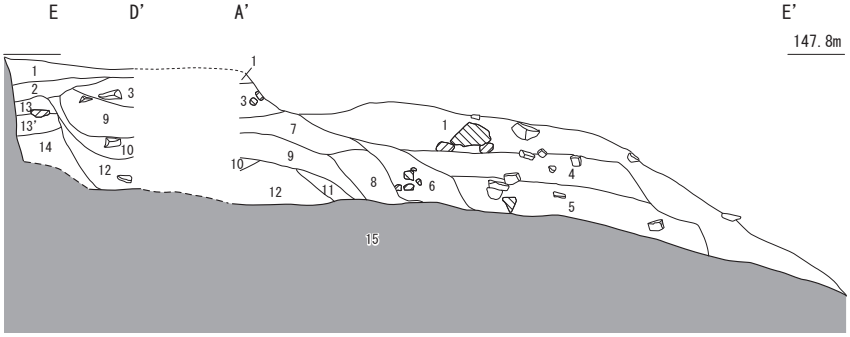
SX09
SX08
P01
P02
P03
SX02
SX05
SX03-B
SX03-A
SX04
SX06
147.0
146.0
147.5
148.0
146.5
149.0
148.5
145.0
中世墓状遺構・ピット
焼土
0
2m

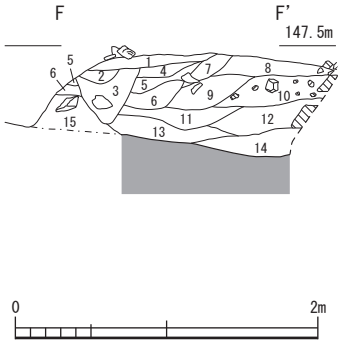
5 号墳及び上層の遺構

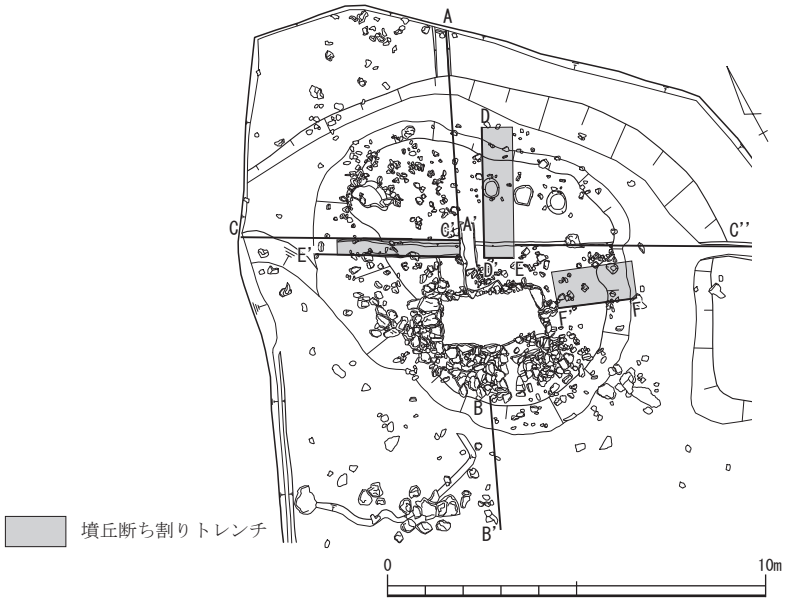


5号墳　墳丘・周溝土層断面図１









墳丘断ち割りトレンチ

5 号墳　墳丘・周溝土層断面図２

A-A’

1.	7.5YR3/3	暗褐	細砂～極細砂	表土
2.	5YR4/6～7.5YR4/6	赤褐～褐	極細砂質シルト混じり礫	径1cm内外角礫密に含む（5号墳周溝埋土最上層）
3.	5YR4/6	赤褐	礫混じりシルト質極細砂	墳丘流土
4.	5YR3/4	暗赤褐	細砂混じり極細砂質シルト	
5.	5YR3/4	暗赤褐	礫・細砂混じり極細砂質シルト	径10cm内外角礫多く含む やや黄色調
6.	5YR3/4	暗赤褐	細砂混じりシルト質極細砂	やや黄色調
7.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じりシルト	（5号墳周溝埋土）
8.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫混じり極細砂質シルト	谷堆積
9.	5YR3/4～5YR2/4	暗赤褐～極暗赤褐	礫・中砂混じりシルト	（ベース）
10.	7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり細砂～中砂	径10cm内外礫が顔を出す 地山

B-B’

1.				地表
2.	7.5YR3/4	暗褐	礫混じり細砂	径1～3cm角礫多く含む 表土
3.	7.5YR4/3	褐	礫混じり極細砂質細砂	径3cm内外角礫を含む 植物根の攪乱
4.	7.5YR3/4	暗褐	礫・細砂混じり極細砂	径3～10cm角礫密に入る
5.	7.5YR3/3	暗褐	シルト混じり細砂	土壌化している
6.	7.5YR4/4	褐	礫・シルト混じり細砂	径1cm内外角礫含む
7.	2.5YR1.7/1	赤黒	礫混じりシルト	マンガン集積層 所々炭化物入る
8.	7.5YR3/4	暗褐	礫・中砂混じりシルト	径3～10cm角礫含む
8’				径3～10cm角礫多く含む
9.	7.5YR4/3	褐	礫混じり細砂	5号墳墳丘
10.	7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり細砂～中砂	径10cm内外礫が顔を出す 地山

C-C’

1.	5YR3/2	暗赤褐	シルト混じり細砂	地表
2.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂・シルト混じり極細砂	径10cm～20cm角礫多く含む
3.	10YR5/3～5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混じりシルト～粘土	径3cm～10cm内外の礫を含む 沢筋の堆積
4.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫・細砂混じりシルト	径1cm内外角礫多く含む やや黄色調
5.	7.5YR4/4	褐	極細砂混じりシルト	径10cm内外角礫含む
5’				やや黄色調
6.	7.5YR4/4	褐	礫混じり極細砂	径1cm内外角礫含む
7.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂・礫混じり極細砂	径5mm内外角礫含む
8.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫・極細砂混じりシルト	径5cm内外角礫含む 5号墳2次墳丘
9.	7.5YR4/4	褐	細砂・礫混じりシルト	径10cm内外角礫多く含む
10.	7.5YR4/4	褐	細砂・礫混じり粘土～シルト	径10cm内外角礫多く含む
11.			礫混じりシルト質極細砂	径5mm内外礫多く含む 2次墳丘
12.	7.5YR4/3	褐	細砂混じり極細砂～シルト	径5cm内外を含む 締まり乏しい 2次墳丘
13.	5YR3/4	暗赤褐	細砂混じりシルト質粘土	径5cm内外礫含む 2次墳丘
14.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混じり極細砂質シルト	粘性あり 径5cm内外の角礫を主に、径20cm内外の巨礫など多量の礫を含む 1次墳丘
15.	5YR3/6	暗赤褐	極細砂～細砂混じりシルト	径3mm～5mm角礫多く含む 1次墳丘
16.	7.5YR4/4	褐	細砂混じりシルト	粘性あり 炭化物含む
16’	7.5YR3/4	暗褐	シルト・礫混じり細砂質極細砂	植物の攪乱 若干土壌化する
17.	5YR3/4	赤褐色	極細砂混じりシルト	粘性あり 締まり乏しい 径5mm内外礫多く含む
18.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混じり粘質シルト	地山土ブロック含む 1次墳丘
19.	7.5YR4/4～5YR4/4	褐～にぶい赤褐	細砂・礫混じりシルト質粘土	径3mm内外角礫多く含む 1次墳丘
20.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混じりシルト～粘土	7.5YR6/6橙の地山シルトブロックを含む
21.	5YR4/6～5YR4/8	赤褐	礫・細砂混じり粘土質シルト	径10cm～20cm角礫多量に含む
22.	5YR4/4	にぶい赤褐	中砂混じりシルト～粘土	流路堆積
23.	7.5YR3/4	暗褐	礫・細砂～中砂混じりシルト～粘土	地山

C’-C’’

1.	5YR3/2	暗赤褐	シルト混じり細砂	地表
2.	5YR4/3	にぶい赤褐	シルト・細砂混じり極細砂	
3.	5YR4/4～7.5YR4/4	にぶい赤褐～褐	細砂混じりシルト	径1mm内外砂粒含む 黄色調
4.	5YR4/6	赤褐	極細砂混じり細砂	
5.	5YR3/6	暗赤褐	細砂混じりシルト	粘性あり
6.	5YR3/6	暗赤褐	礫・細砂～中砂混じりシルト	径5cm～10cm角礫多し
7.	7.5YR4/4	褐	細砂混じりシルト	墳丘流土
8.	5YR3/6	暗赤褐	礫・細砂～中砂混じりシルト	径5cm～10cm角礫多し
9.	5YR3/4～5YR3/6	暗赤褐	礫・シルト混じり細砂	8層より粒子粗い
10.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じり極細砂質シルト	径5mm内外角礫多く含む 土壌化 11層に近い
11.	5YR4/4	にぶい赤褐	シルト質極細砂	径5cm内外礫多し 土壌化する
12.	5YR3/4	暗赤褐	礫混じり極細砂質シルト	径5mm内外角礫多く含む 10層と同質
13.	7.5YR4/4	褐	シルト混じり礫	径3mm内外角礫密入る
13’	7.5YR4/4	褐	礫混じりシルト	
14.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫混じりシルト質極細砂	径5mm内外礫多し
15.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫・シルト混じり細砂質極細砂	径1～2cm礫多く含む
16.	5YR4/4～7.5YR4/4	にぶい赤褐～褐	礫混じり極細砂質シルト	径5mm内外角礫多く含む
17.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫・細砂含むシルト～粘土	下半より径20cm内外礫露出 黄色調 周溝肩

5号墳　墳丘・周溝土層断面図　土層名１

D-D’

1.	7.5YR4/6	褐	極細砂混じりシルト	径2～5cm以下の角礫を含む
2.	7.5YR4/4	褐	細砂混じりシルト	汚れる
3.	7.5YR4/4	褐	粗砂混じり極細砂質シルト	径3cm以下の礫含む
4.	7.5YR4/4	褐	シルト質極細砂	やや暗調
4’.	7.5YR4/4	褐	シルト混じり細砂～極細砂	径10cm以下の角礫含む
5.	7.5YR4/4	褐	細砂混じり極細砂	径5cm～10cm角礫を含む
6.	7.5YR3/4	暗褐	極細砂混じりシルト	径3cm以下の礫多く含む 汚れる
7.	7.5YR4/3～7.5YR4/4	褐	シルト質極細砂質シルト	径5cm以下の礫多く含む
8.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質シルト	径20cm以下(10cm～20cm)の角礫を多く含む
9.	7.5YR4/4～7.5YR4/6	褐	細砂混じりシルト	
10.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質シルト	径2cm以下の角礫含む 土質は団粒状である
11.	5YR4/4	にぶい赤褐	シルト質極細砂	径3cm～5cm角礫を含む
12.	7.5YR3/4	暗褐	礫混じり極細砂質シルト	径5cm以下の礫多く含む 炭化物を含み汚れる
13.	7.5YR3/4	暗褐	細砂質極細砂	径3mm以下の礫含む
14.	7.5YR4/3	褐	細砂質極細砂	径3mm以下の礫含む 汚れる
15.	5YR3/4	暗赤褐	シルト混じり極細砂	径5cm以下の礫・径3mm以下の角礫含む 汚れる
16.	5YR3/4	暗赤褐	シルト混じり細砂	径10cm～20cmの礫を含む
17.	7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり極細砂	径3cm～5cm角礫を含む
18.	7.5YR4/3	褐	細砂を若干含むシルト	径5mm以下の角礫含む
19.	7.5YR3/3～7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり礫	径1cm以下の礫多く含む 谷堆積
20.	7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり細砂～中砂	径10cm内外礫が顔を出す 地山

E-E’

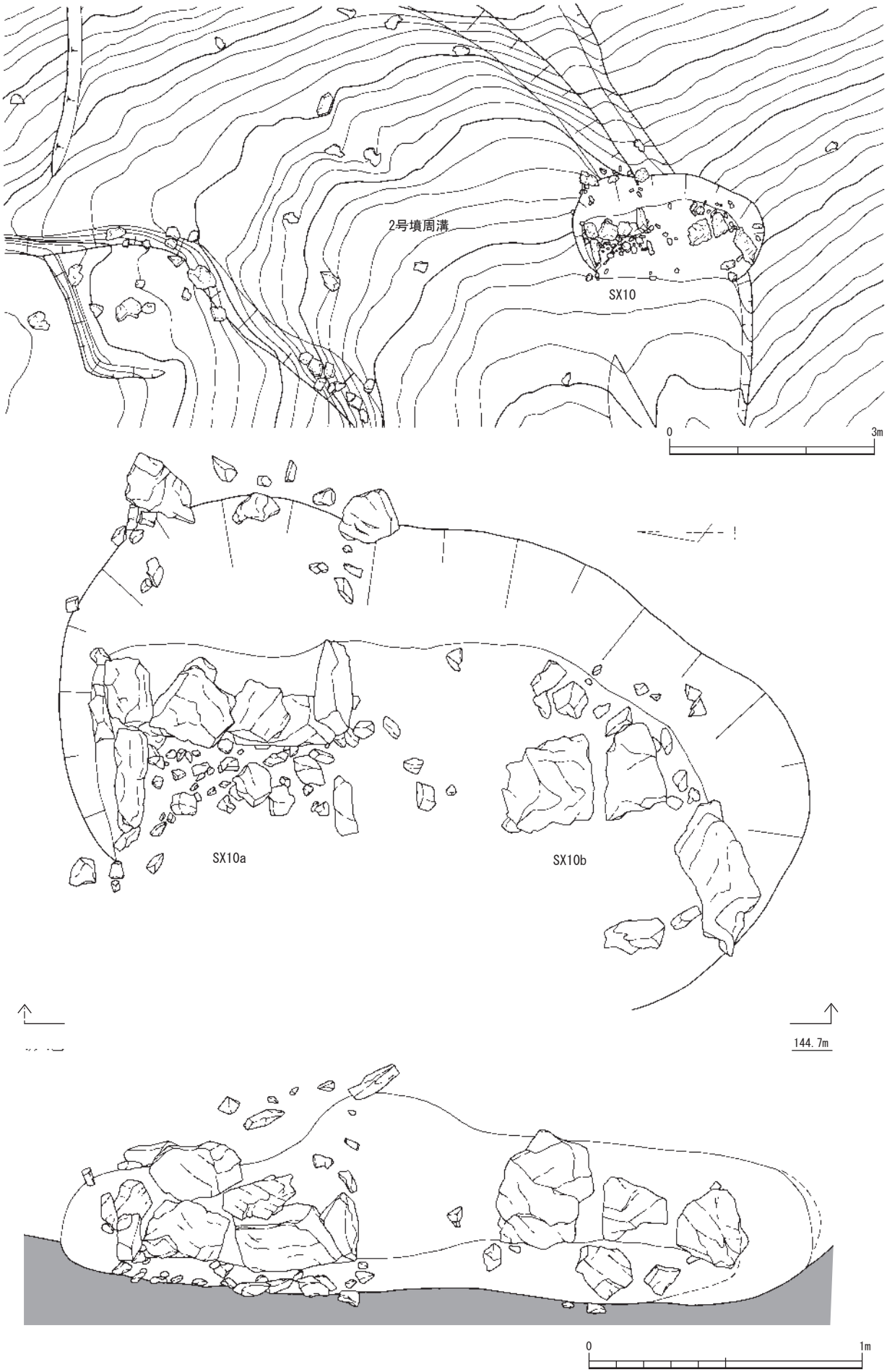
1.	5YR4/4	にぶい赤褐	礫・細砂混じり極細砂質シルト	粘性あり 径20cm内外の巨礫を交え、径5cm内外の角礫を主に多く含むD-D’の5層対応
2.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質シルト	径5cm以下(10cm～20cm)の礫を含む 土壌化し汚れる
3.	5YR3/4	暗赤褐	極細砂質シルト	径2cm以下の角礫含む 土質は団粒状であるD-D’の10層
4.	5YR4/4	にぶい赤褐	シルト質極細砂	径3cm～5cm角礫を含むD-D’の11層
5.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混じりシルト砂質粘土	径5mm以下の礫含む 径10cm～15cmの角礫を密に含む
6.	5YR3/4	暗赤褐	シルト混じり極細砂	径2mm～3mmの礫及び径10cmの角礫密集
7.	5YR3/6	暗赤褐	礫・極細砂混じりシルト	粘性多し 径5cm内外の角礫を含む
8.	7.5YR4/4	褐	礫・極細砂混じり粘土質シルト	径1cm内外の角礫多く含む
9.	5YR4/4	にぶい赤褐～褐	細砂・礫混じりシルト砂質粘土	径5mm内外角礫多く含む
10.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混じりシルト～粘土	7.5YR6/6橙の地山シルトをブロック状に含む 径2cm～3cm角礫を含む
11.	5YR3/4	暗赤褐	シルト混じり極細砂	径5mm～2cmの角礫を含む 粘性あり 全体に締まりに欠ける
12.	5YR4/6	赤褐	礫・細砂混じり粘土質シルト	径10cm～20cmの角礫を多量に含む
13.	5YR3/4	暗赤褐	シルト混じり細砂	
13’.	5YR5/4	にぶい赤褐	極細砂質シルト	径3mm以下の礫を含む
14.	7.5YR3/4	暗褐	シルト混じり極細砂	径3cm～5cm角礫を多量に含む
15.	7.5YR3/4	暗褐	礫・細砂～中砂混じりシルト～粘土	ベース

F-F’

1.	5YR3/6	暗赤褐	細砂混じりシルト質極細砂	径1cm内外礫多く含む
2.	5YR2/4	極暗赤褐	細砂混じりシルト質極細砂	径5mm内外礫含む 炭含む 火葬墓の埋土
3.	5YR3/6	暗赤褐	極細砂質シルト	炭多量に含む 火葬墓の埋土
4.	5YR3/4	暗赤褐	礫・細砂混じりシルト	粘性あり 径2cm内外角礫多く含む 2次墳丘
5.	5YR3/6	暗赤褐	礫・細砂混じり極細砂	径3mm内外角礫多く含む 2次墳丘
6.	5YR4/4	にぶい赤褐	極細砂混じりシルト	径1cm～5cm内外角礫を含む 2次墳丘
7.	5YR3/6	暗赤褐	細砂混じりシルト	径3mm内外角礫多く含む
8.	5YR4/6	赤褐	シルト混じり細砂	径5cm内外角礫を含む 締まり乏しい 1次墳丘
9.	5YR3/6	暗赤褐	シルト混じり極細砂	径5cm内外角礫を含む 締まり乏しい 1次墳丘
10.	5YR4/4～5YR3/6	にぶい赤褐～暗赤褐	シルト混じり細砂質極細砂	径10cm内外の角礫多く含む 1次墳丘
11.	5YR4/4	にぶい赤褐	細砂混じりシルト	径2mm内外礫多く含む 団粒状 1次墳丘
12.	5YR3/6	暗赤褐	細砂混じりシルト	径5mm内外角礫多く含む やや締まる 1次墳丘
13.	5YR3/4	暗赤褐	細砂混じりシルト	径5mm内外礫入る 汚れる 1次墳丘
14.	5YR3/6	暗赤褐	細砂混じり極細砂質シルト	径5cm～15cm内外礫を多く含む 黄色調 1次墳丘
15.	5YR3/6	暗赤褐～にぶい赤褐	シルト～粘土	地山
16.	5YR3/6	暗赤褐～にぶい赤褐	細砂～中砂含む礫混じりシルト～粘土	地山

5号墳石室　平面図・立面図

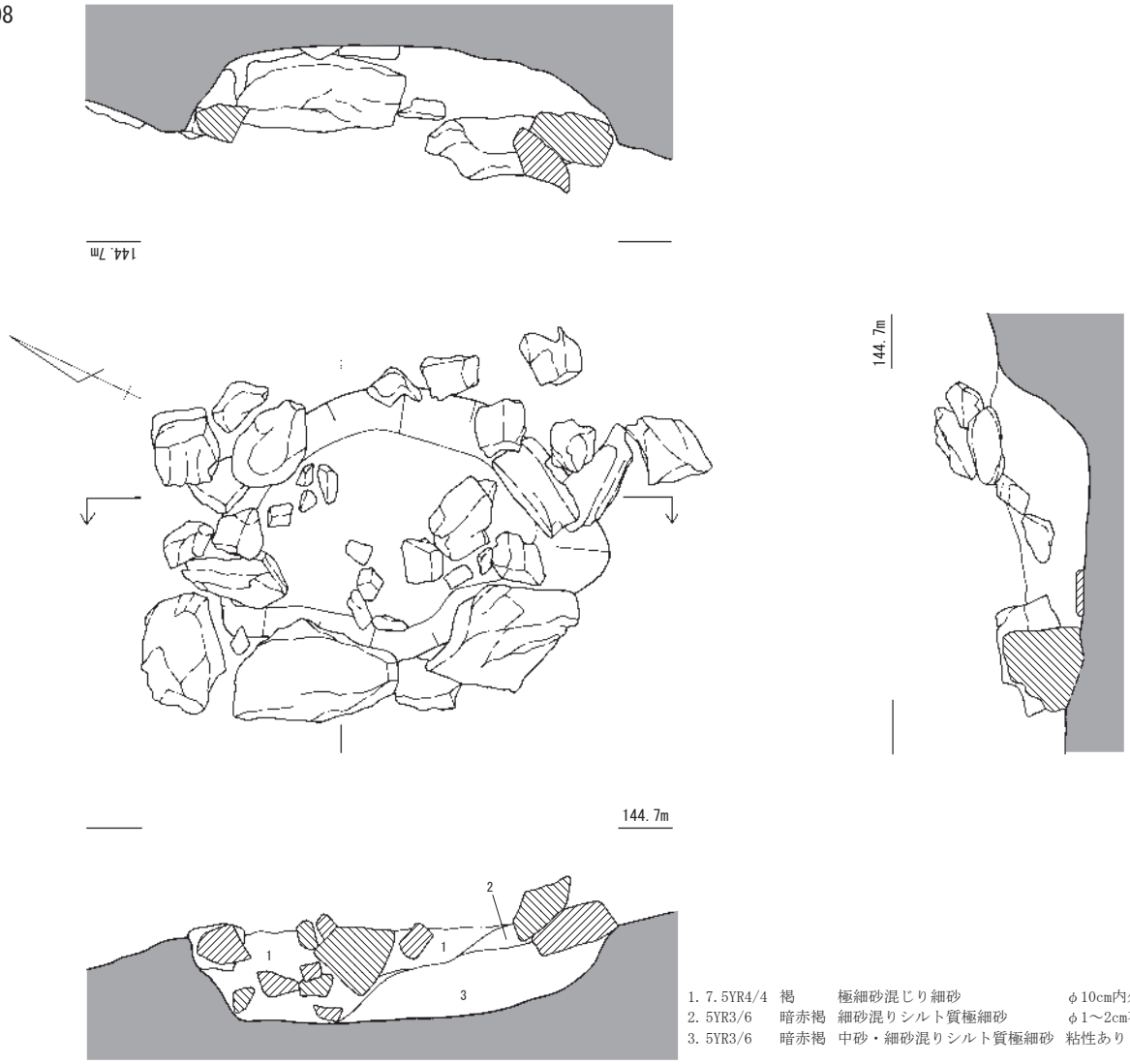
5号墳石室遺物出土状況図



石棺墓 SX10

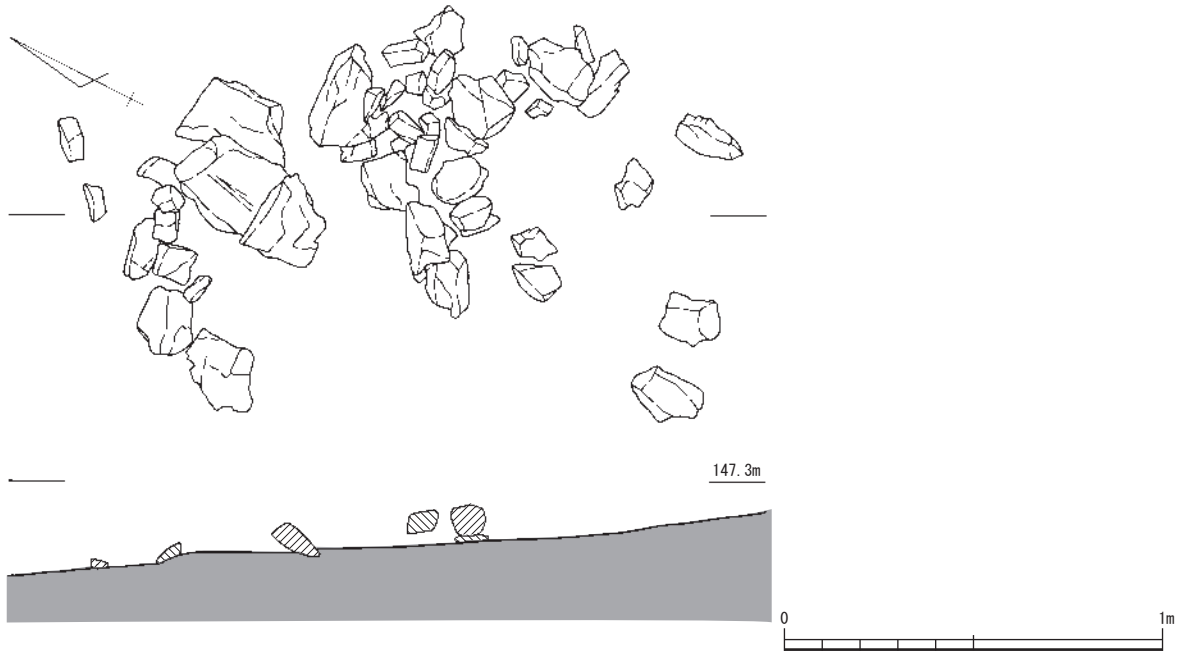
不明石組遺構 SX11

SX08

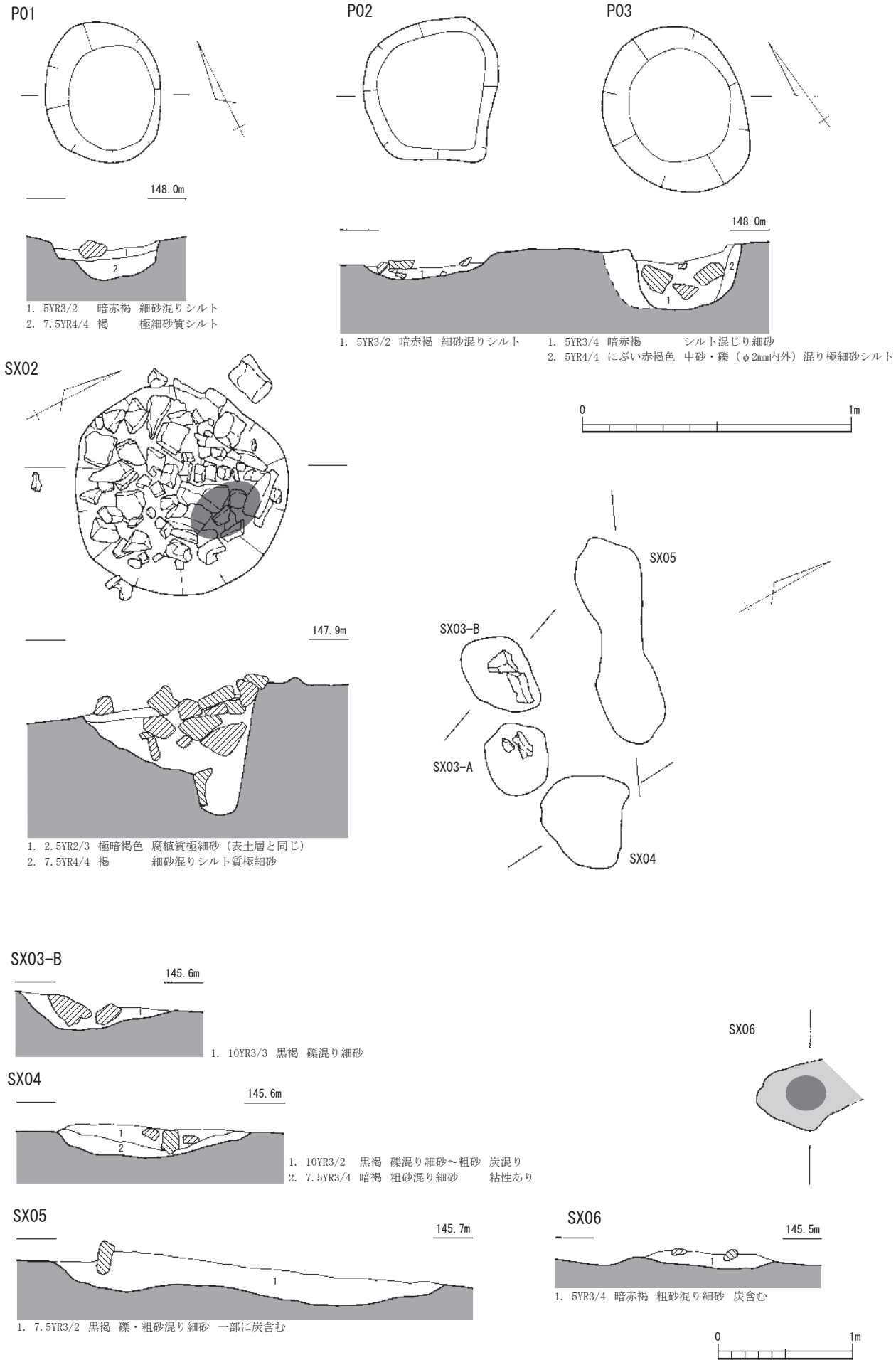


1. 7.5YR4/4 褐 極細砂混じり細砂 φ10cm内外角礫多く含む
2. 5YR3/6 暗赤褐 細砂混りシルト質極細砂 φ1～2cm石粒(礫)多く含む
3. 5YR3/6 暗赤褐 中砂・細砂混りシルト質極細砂 粘性あり

SX09



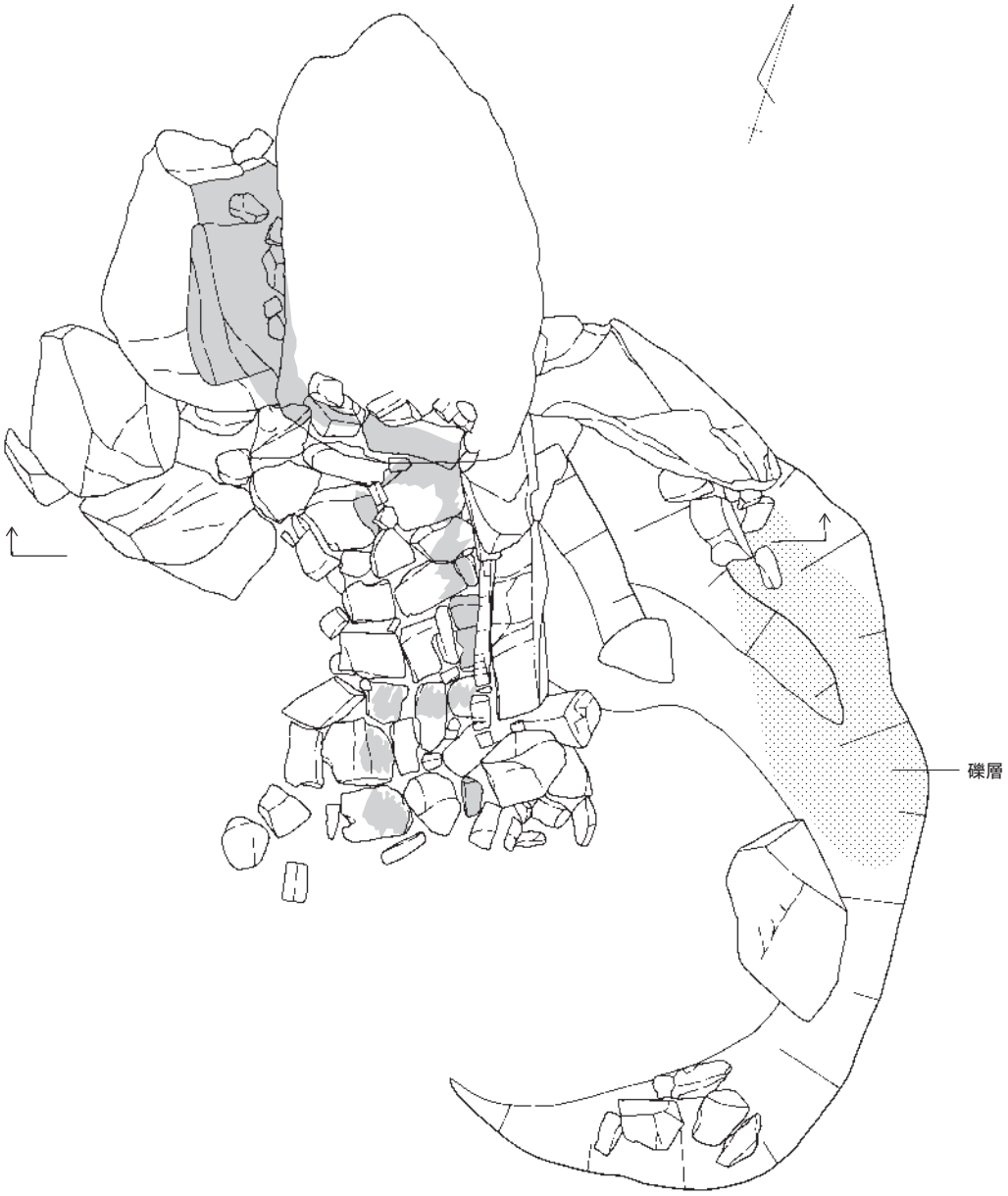
中世墓状石組遺構 SX08・SX09

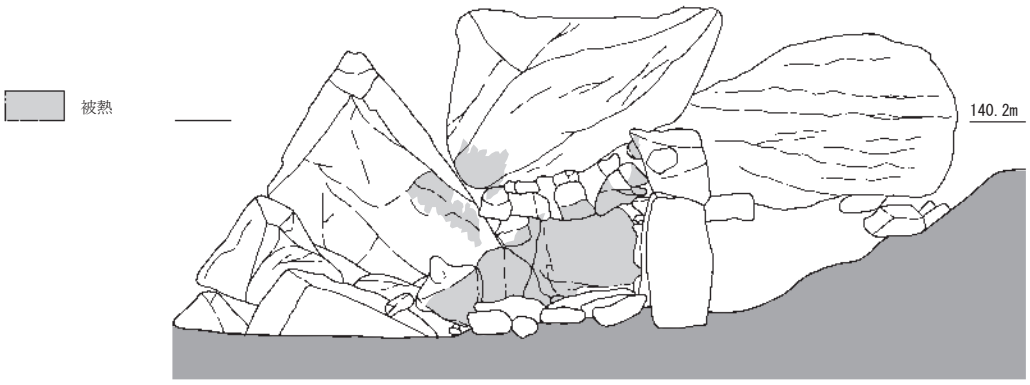


ピット群・中世墓状集石遺構 SX02・焼土抗群

1. 7.5YR4/4 褐 細砂混りシルト φ2mm内外砂粒多く含む

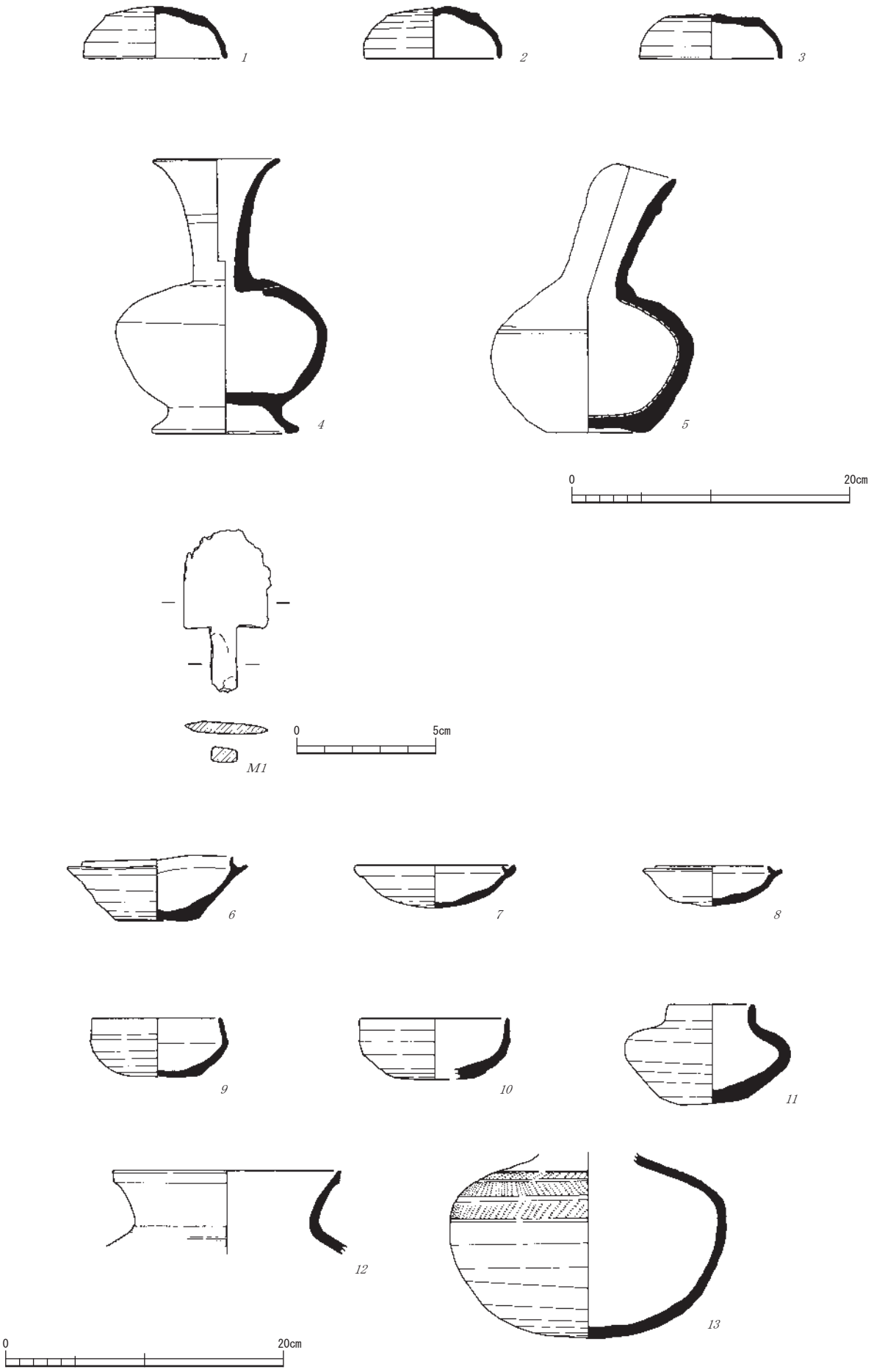
火葬址遺構　SX07　上層



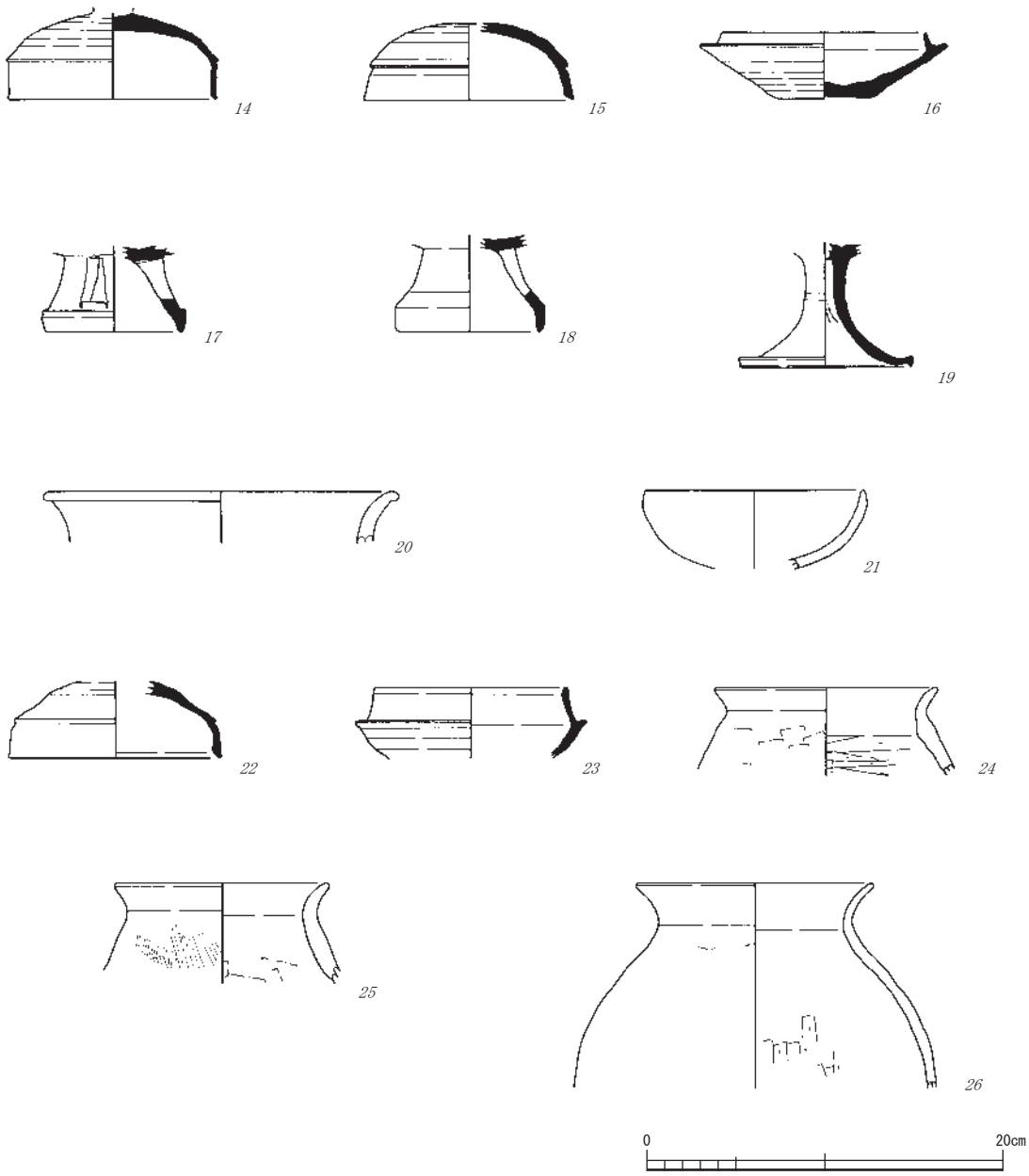


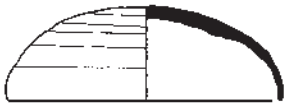
0 1m

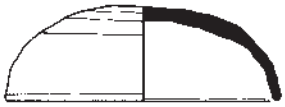
火葬址遺構　SX07　下層

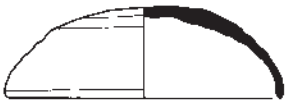


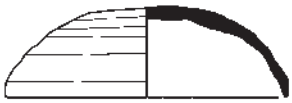
２号墳出土遺物１

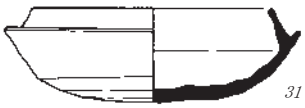

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
20cm

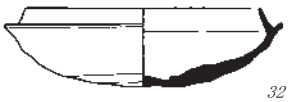

27

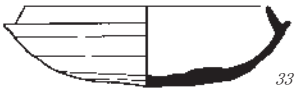

28


29

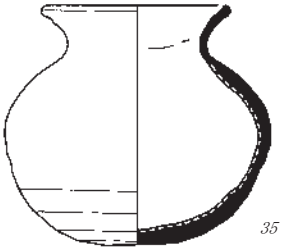

30

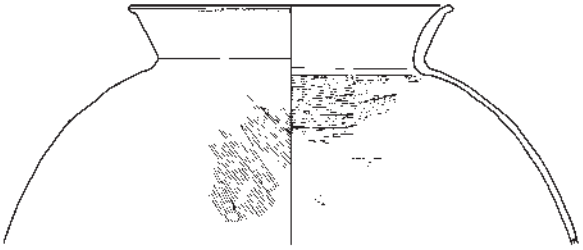

31

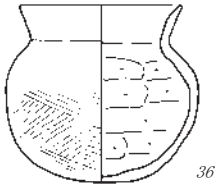

32

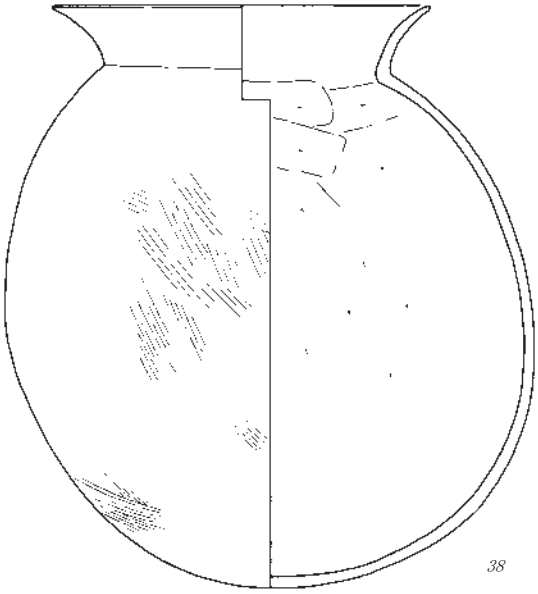

33

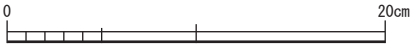
34


35

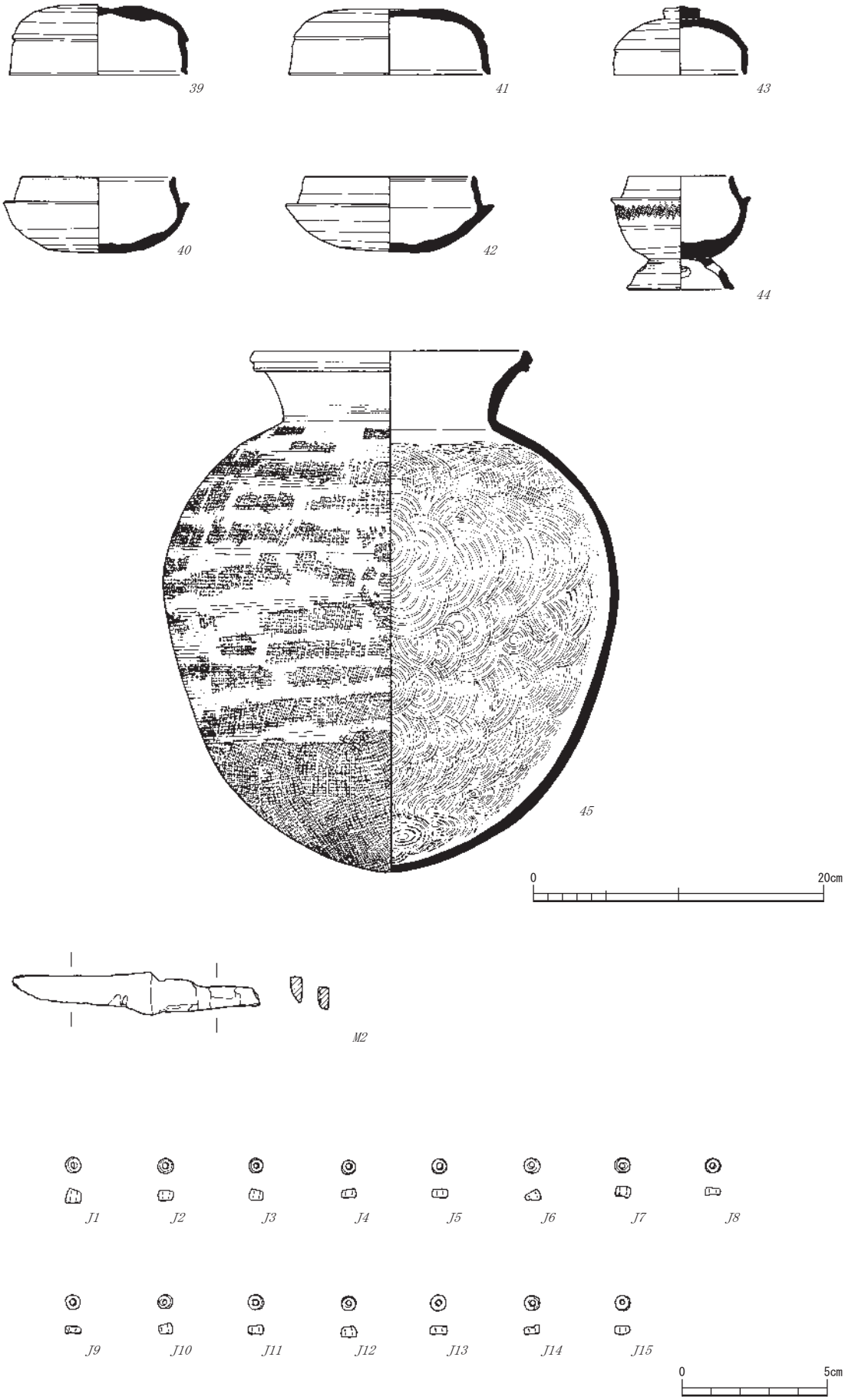

37


36

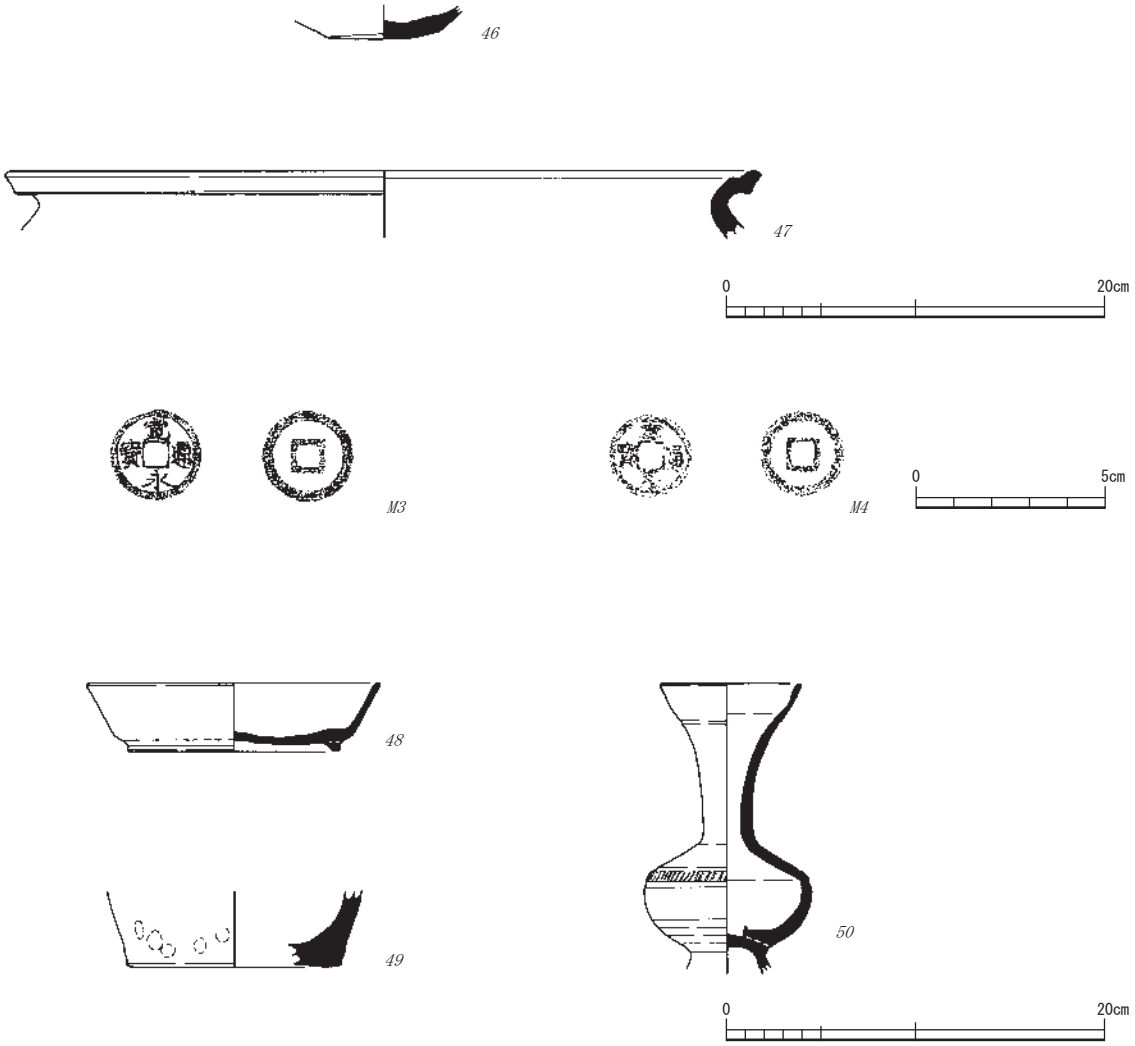

38



6 号墳出土遺物


39
41
43
40
42
44
45
0
20cm
M2
J1
J2
J3
J4
J5
J6
J7
J8
J9
J10
J11
J12
J13
J14
J15
0
5cm

5号墳出土遺物


46
47
0
20cm
M3
M4
0
5cm
48
49
50
0
20cm

写　真　図　版

調査地点遠景（南から）

調査地点（大谷川）遠景（南から）

写真図版 2

空中写真 2

調査区全景　（天が北）

1 号墳区

2 号墳区

2 号墳周辺

写真図版 4

周辺の古墳

１号墳全景（北西から）

３号墳遠景（南南東から）

３号墳石室（南から）

４号墳遠景（南西から）

４号墳全景（南南西から）

４号墳石室（南南西から）

1トレンチ（南から）

2トレンチ　3号墳石室

3トレンチ　周溝（東から）

3トレンチ　周溝（北から）

4トレンチ（南東から）

5トレンチ（南東から）

写真図版 6

1 号墳区の調査

1 号墳区全景
（南南西から）

1 号墳区全景　近接
（南から）

1 号墳区全景
（北から）

２号墳区全景（南から）

２号墳天井石調査前
（南西から）

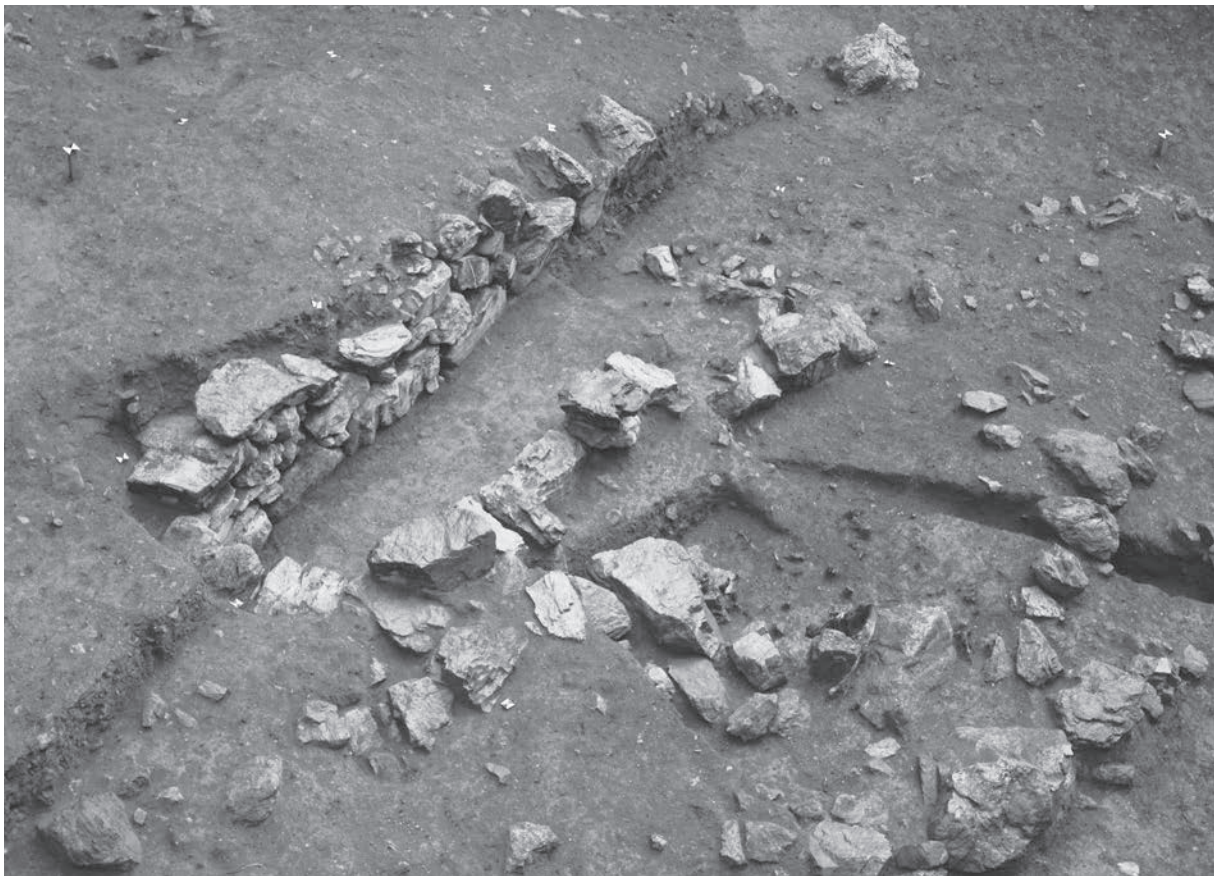
２号墳表土除去後
（南西から）

２号墳天井石残存状況
（北から）

２号墳・６号墳全景（南西から）

２号墳・６号墳全景（北西から）

２号墳・６号墳墳丘側面（西から）



２号墳石室・６号墳墳丘列石（北西から）

２号墳周溝　Ａ－Ａ’
（西から）

２号墳・６号墳墳丘
Ｂ－Ｃ東半（南から）

２号墳墳丘Ｂ－Ｃ
中央（南から）

２号墳墳丘周溝Ｂ－Ｃ
西半（南から）

２号墳周溝Ｄ－Ｄ’（南から）

２号墳Ｄ－Ｄ’　墳丘裾部（南から）

２号墳周溝肩Ｄ’－Ｄ’’（南から）

２号墳Ｅ－Ｅ’（西から）

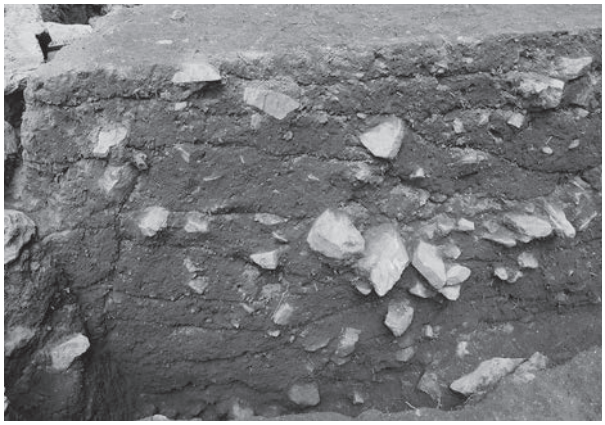
２号墳Ｆ－Ｆ’（西から）

２号墳・６号墳墳丘
断ち割りＢ－Ｂ’（南から）

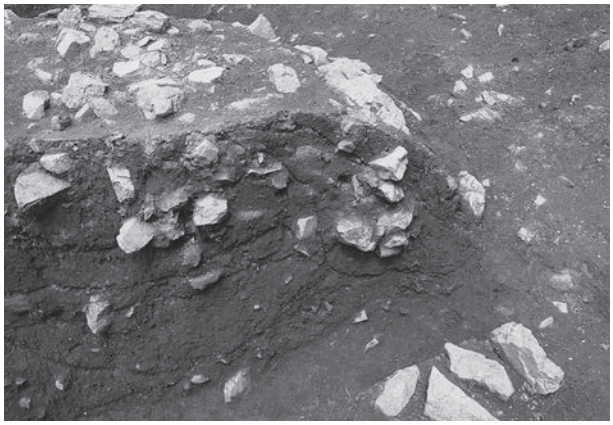
２号墳・６号墳墳丘
断ち割りＢ－Ｂ’　近接

２号墳・６号墳Ｂ－Ｂ’　６号墳墓壙部分

２号墳・６号墳墳丘断ち割りＣ－Ｃ’（南から）



２号墳・６号墳墳丘断ち割りＣ－Ｃ’　墓壙部分



２号墳・６号墳墳丘断ち割りＣ－Ｃ’　墳丘裾部

2 号墳石室（南西から）

石室完掘状況（東から）

左側壁の状況（南西から）

左側壁の状況（北西から）

奥壁（南から）

２号墳石室
追葬面の状況（南から）

２号墳石室　奥壁周辺の状況
（南西から）

奥壁際敷石　近接
（南から）

羨門部付近　追葬面遺物の出土状況

羨門部付近　立面（南から）

羨門部付近の遺物（東から）

羨門部付近の遺物（南西から）

羨道部の壺

２号墳・６号墳重複状況

２号墳・６号石室重複状況

２号墳石室と６号墳石室右側

２号墳右側壁下にある６号墳左側壁

6 号墳石室全景（南から）

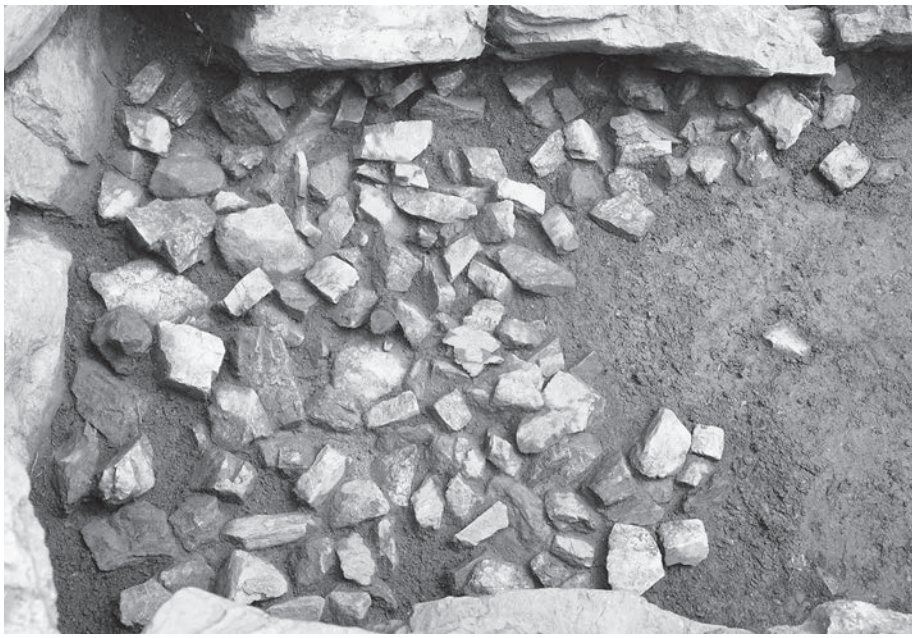
6 号墳石室奥壁際の礫床

奥壁際遺物出土状況（南から）

6 号墳石室遺物出土状況

床面遺物（東から）

床面遺物近接（東から）



床面礫床（西から）

６号墳石室基底石
（南から）

６号墳墳丘基底部の遺物
（西から）

６号墳墳丘基底部の遺物
近接（西から）

5 号墳全景（南西から）

5 号墳墳丘（南西から）

5 号墳墳丘（西から）

５号墳周溝Ａ－Ａ’
（西から）

５号墳南側土層断面
Ｂ－Ｂ’（東から）

５号墳西周溝及び墳丘
Ｃ－Ｃ’（南から）

５号墳西周溝及び墳丘
Ｃ－Ｃ’（南から）

5 号墳墳丘断ち割りＡ’－Ｅ’

5 号墳墳丘裾部断ち割りＡ’－Ｅ’

5 号墳墳丘断ち割りＤ－Ｄ’（北東から）

5 号墳墳丘断ち割りＤ－Ｄ’（東から）

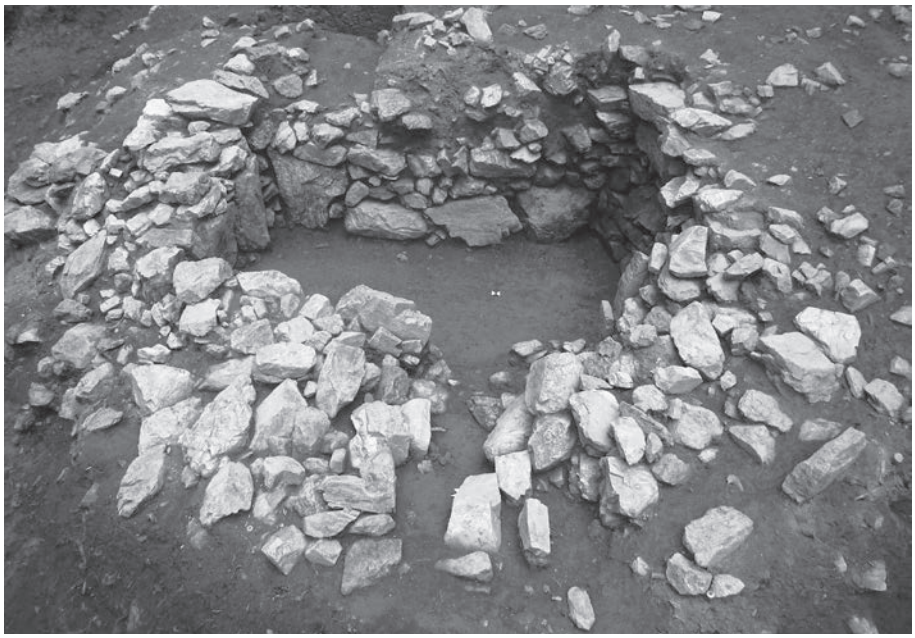
5 号墳墳丘Ｆ－Ｆ’（北から）

5 号墳石室裏込め状況（東から）

5 号墳墳丘断ち割り全景（東から）

5 号墳石室（南西から）

5 号墳石室（南から）



5 号墳石室完掘状況

前壁（玄門側南壁）

右側壁（西壁）

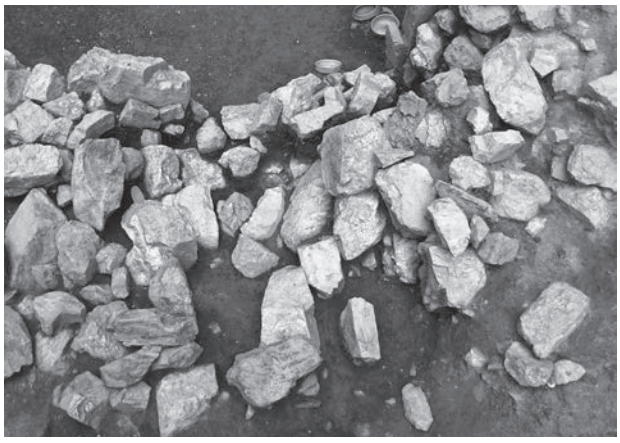
奥壁

左側壁（東壁）

石室北西隅の状況（南東から）

石室北東隅の状況（西から）

羨道部（玄室側から）



羨道部（南から）

新旧前壁の状況（西から）

当初の前壁（西から）

左側壁を隠す新しい前壁（北西から）

新しい前壁と右側壁の状況（北東から）

右側壁を隠す新しい前壁

当初の左側壁（西から）

当初の南東隅部分

当初の前壁（北西から）

当初の前壁（正面から）

玄室内副葬品出土状況（南から）

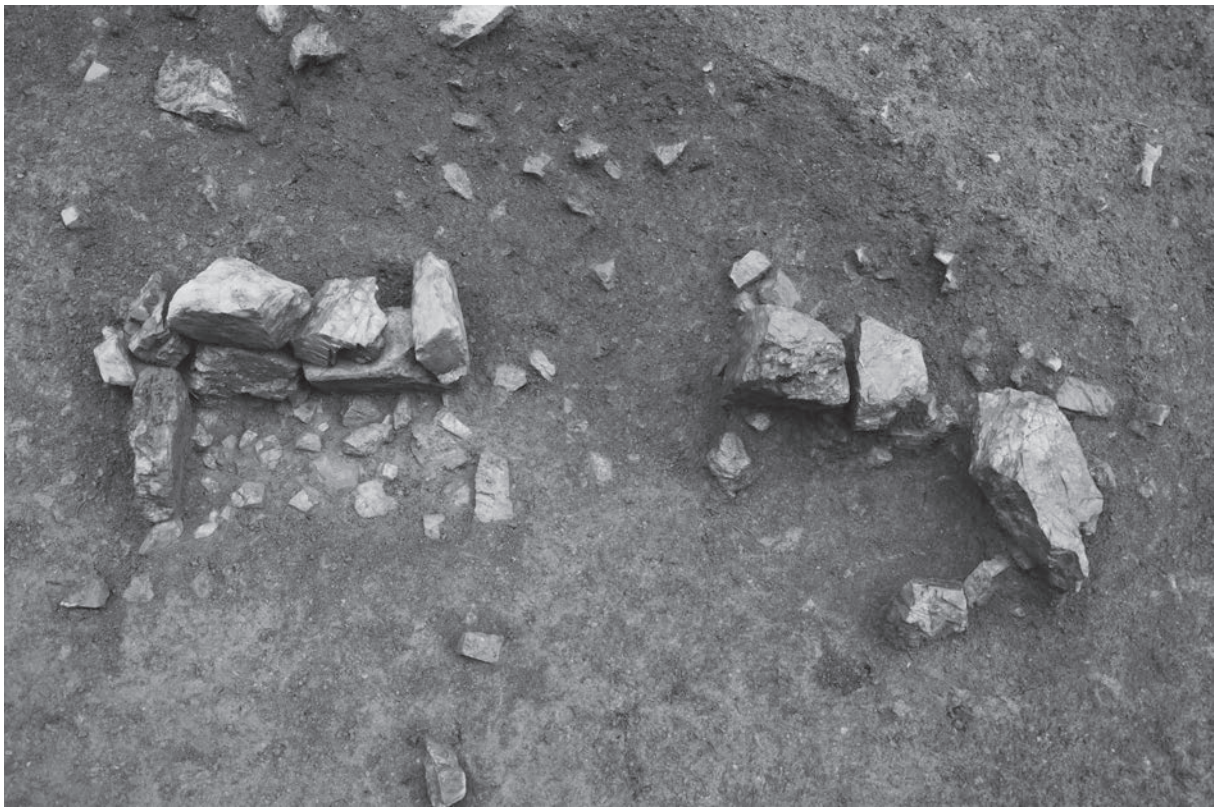
玄室内副葬品出土状況　近接（西から）

南東隅　須恵器坏・高坏出土状況

高坏出土状況

北東隅　須恵器坏・甕出土状況　近接

北東隅　須恵器甕出土状況

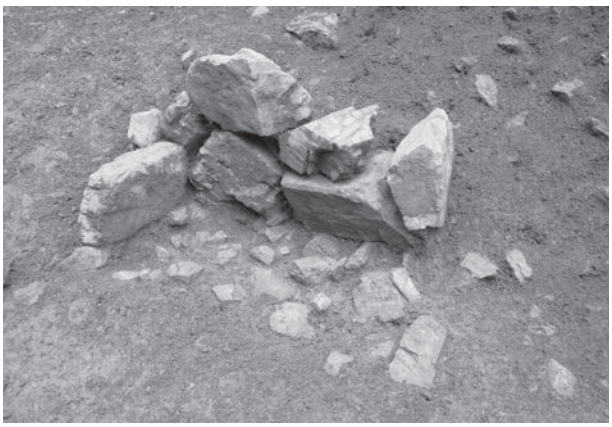


石棺墓 SX10（南西から）

石棺墓 SX10a の状況

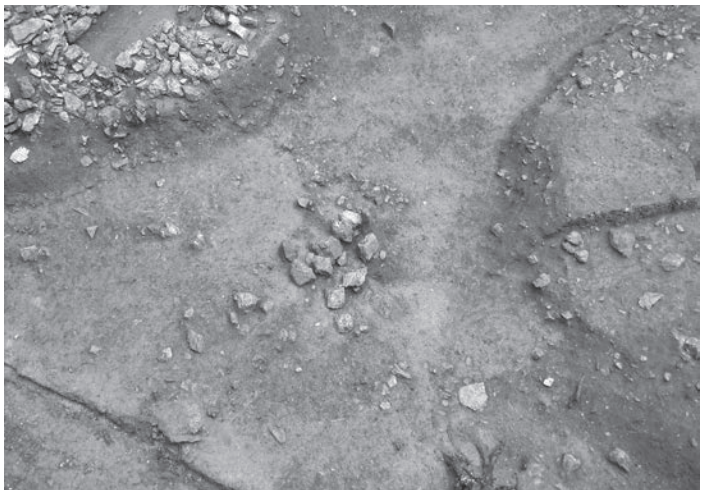
石棺墓 SX10b の状況

石棺墓 SX10a 側壁の状況



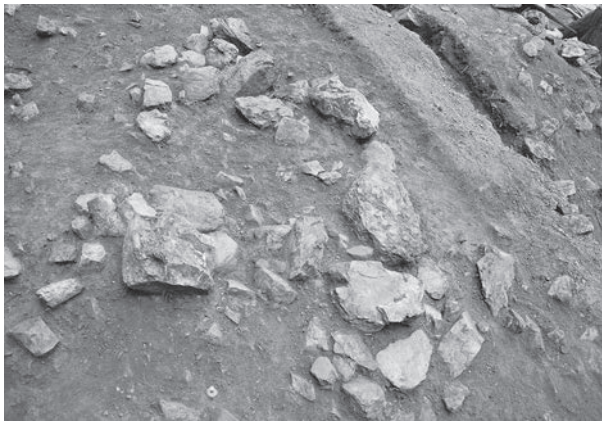
石棺墓 SX10a 奥壁・側壁の状況

不明石組遺構 SX11・中世墓状石組 SX08　1



石組遺構 SX11（南西から）

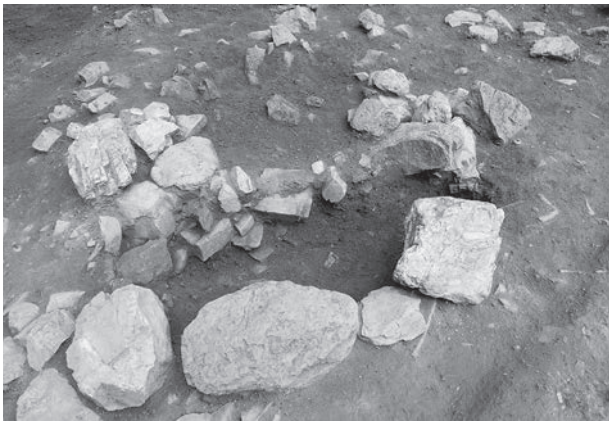
石組遺構 SX11　近接
（南西から）



SX08 石組（西から）

SX08 石組（北から）

SX08 石組（南から）



SX08 半裁土層断面

SX08 完掘状況（北から）

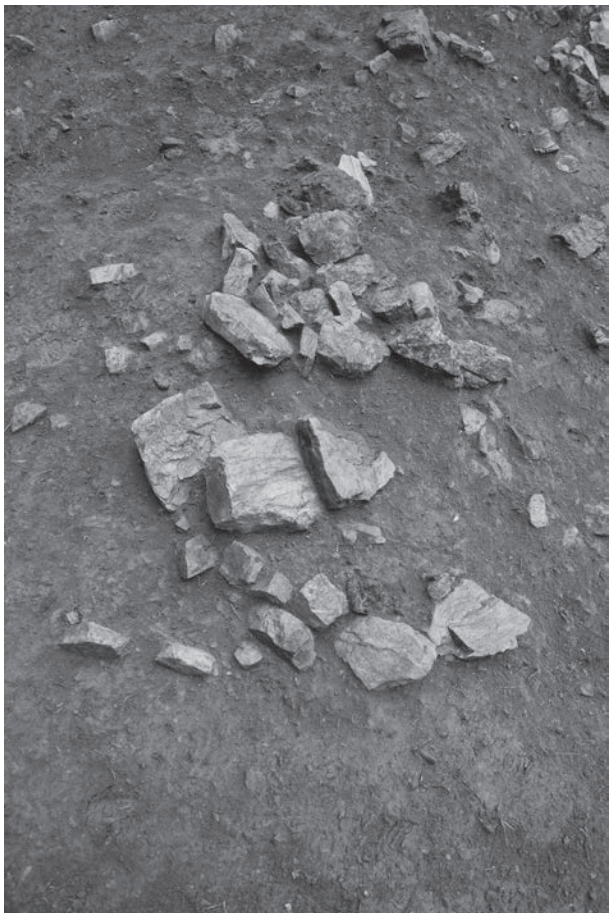
SX08 完掘状況（東から）

SX08 完掘状況（南から）

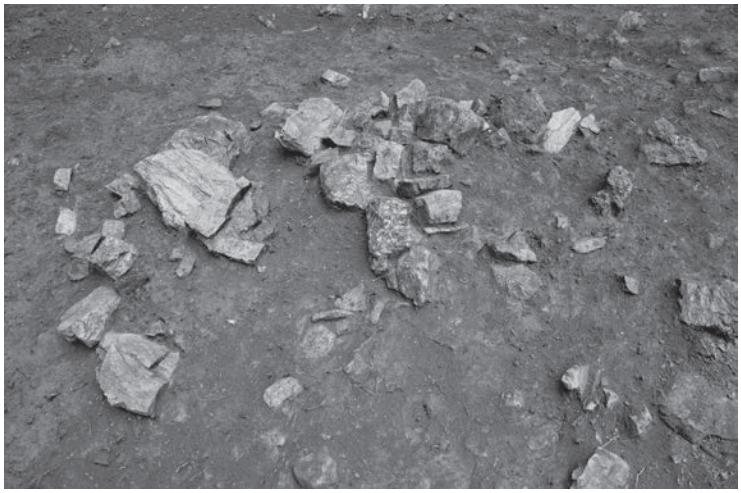
SX08 石組（北から）

写真図版 34

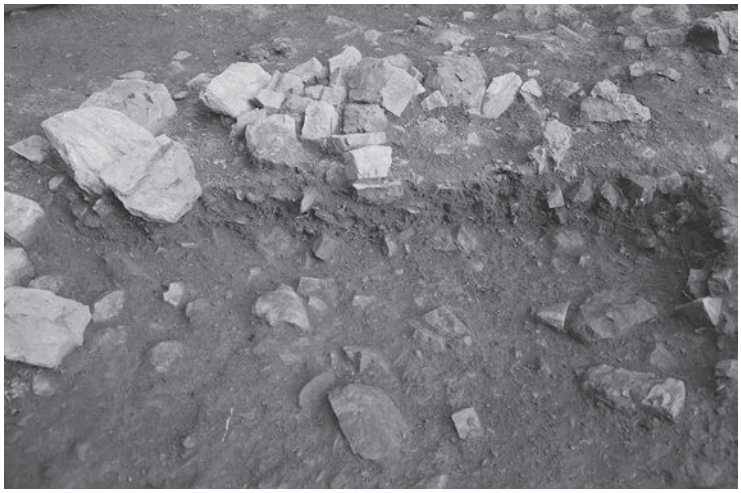
中世墓状石組 SX09



SX09（西から）



SX09（南から）



SX09 断ち割り状況（南から）

SX02（南から）

SX02（東から）

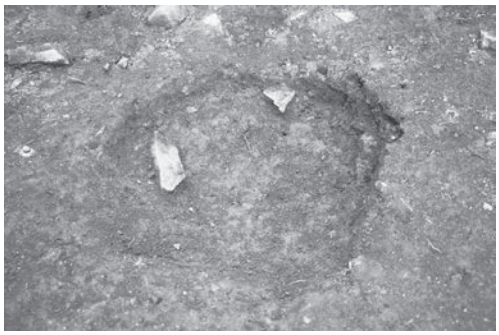
SX02 半裁（南東から）

SX02 完掘状況（南東から）

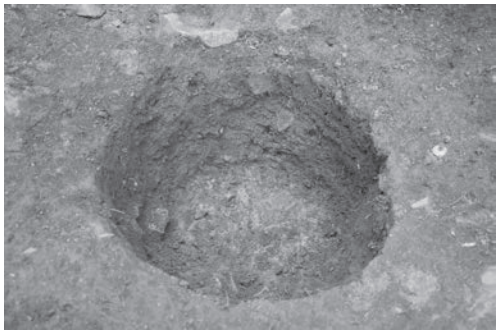
P01

P01 完掘状況

P02


P02 完掘状況

P03


P03 完掘状況

焼土坑

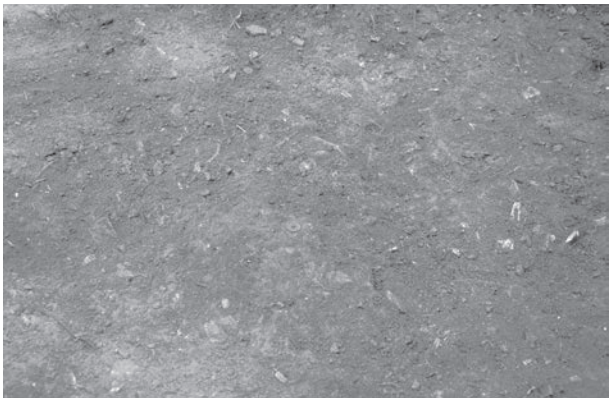
SX03 ～ 05 検出状況(東から)

SX03 ～ 05 完掘状況（東から）

SX04 土層断面（東から）

SX06 検出状況（南東から）

SX06 完掘状況（南から）



寛永通宝出土状況

SX07 上層全景（南西から）

SX07 上層近景（南西から）

SX07 上層全景（南東から）

SX07 上層（南から）

SX07-A（南西から）

SX07-A（南から）

火葬址遺構２

SX07 下層全景（南から）

SX07 下層全景（南西から）

SX07 下層全景（南から）

SX07-A　下層側壁の状況（西から）

SX07-A　下層（南から）

SX07-A　下層奥壁の状況

SX07-A　下層土層断面

SX07 下層南端の状況

機械掘削状況

人力掘削状況

精査状況

ドローン

ドローンによる撮影

学識経験者亀田先生

丹波市水害の爪痕

5 号墳出土土器

6 号墳出土土器

2 号墳出土土器

1

2

3

4

5

M1

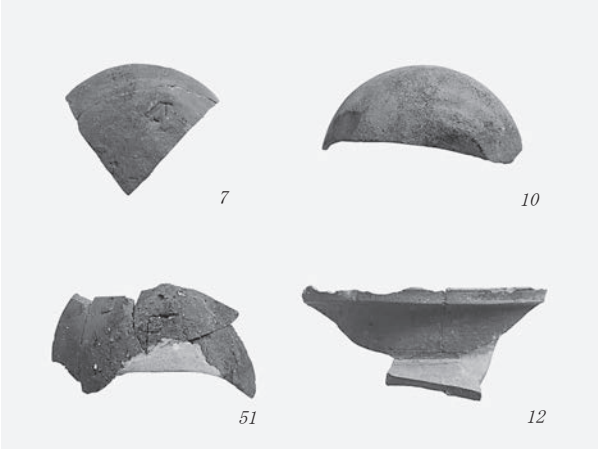
6

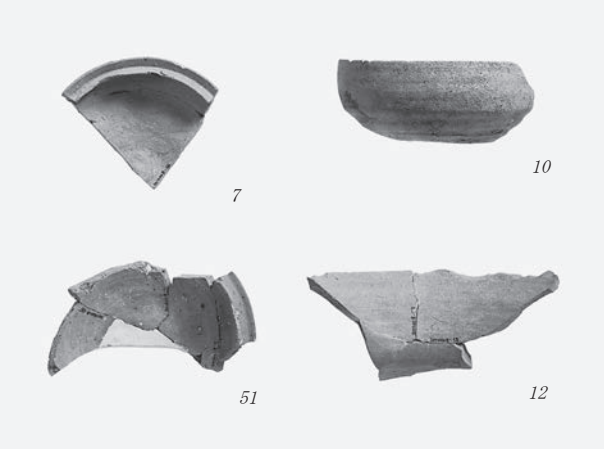
8

9

13

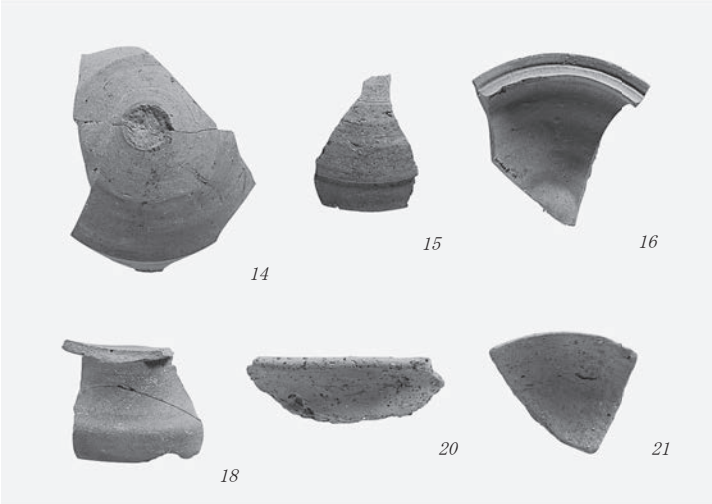
11

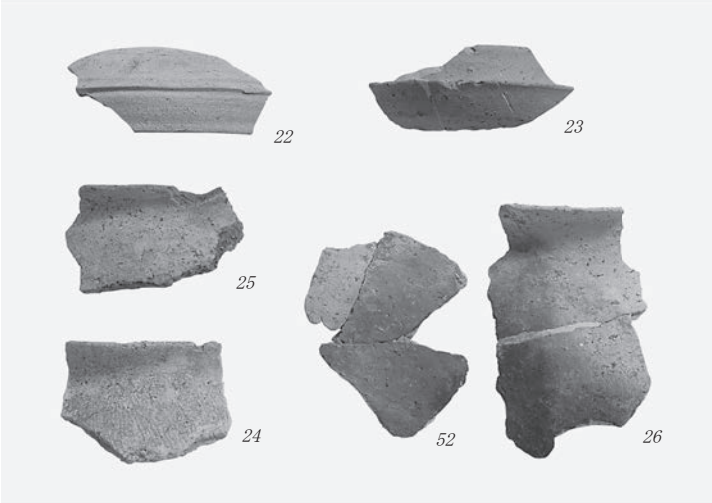

7 10 51 12


7 10 51 12

写真図版 42

2 号墳出土遺物　2





27

28

29

30

31

32

33

34

35

37

36

38

写真図版 44

5 号墳出土遺物

39

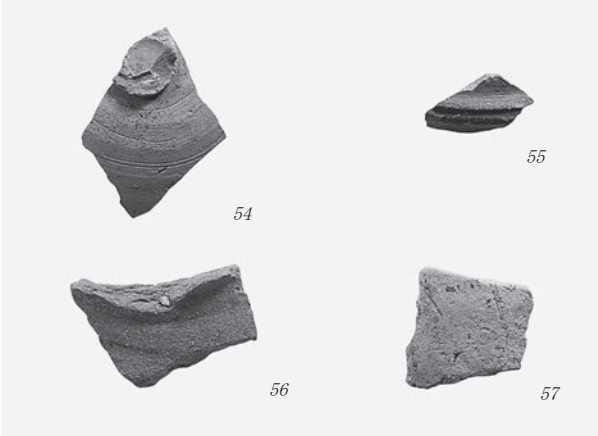
41

43

40

42

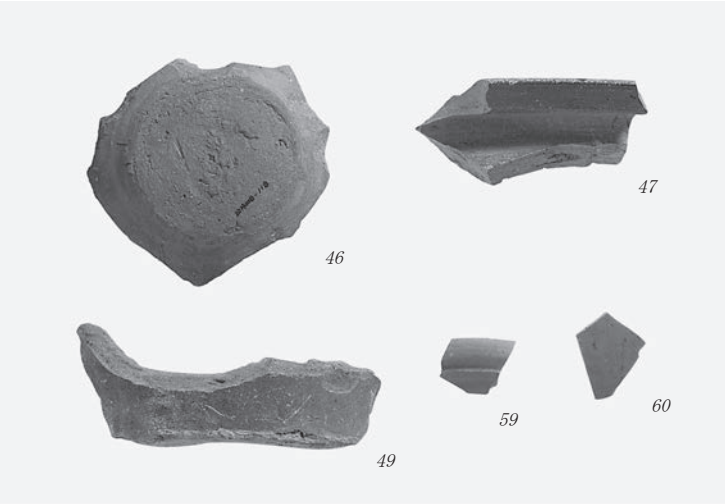
44


54
55
56
57

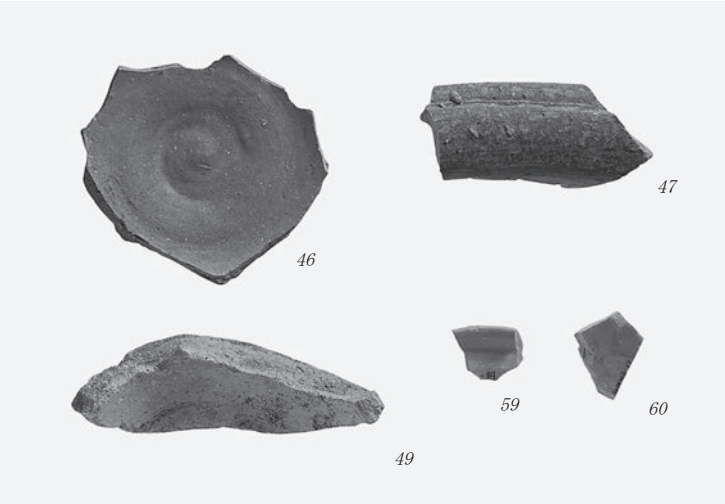
45

M 2

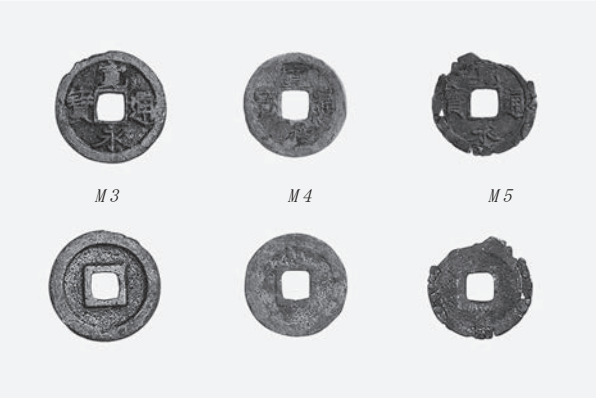
58


46
47
49
59
60

48


46
47
49
59
60

50


M3
M4
M5

M6

報　告　書　抄　録

ふりがな	やまだおおやまこふんぐん
書　　名	山田大山古墳群
副　書　名	（砂）大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第491冊
編著者名	西口圭介・鐵　英記
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内）　TEL079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL078－362－3784
発行年月日	平成29（2017）年3月28日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　TEL079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	遺跡調査番号（調査期間）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
山田大山古墳群（やまだおおやまこふんぐん）	兵庫県（ひょうごけん）丹波市春日町（たんばちょうかすがちょう）山田（やまだ）	28223	790029	35° 11′ 11″	135° 5′ 4″	2013107（20130827 ～ 20130828）	20	記録保存調査
						2014008（20140609 ～ 20140926）	695	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山田大山古墳群	古墳	6 世紀初頭	5 号墳	須恵器坏・高坏・甕、臼玉	Ｔ字形横穴式石室
		6 世紀中頃	6 号墳	須恵器坏・須恵器壺・土師器甕	2 号墳石室によって潰された無袖横穴式石室
		6 世紀後半～7 世紀後半	2 号墳	須恵器坏・高坏、土師器甕、須恵器壺	6 号墳石室を潰した無袖横穴式石室

要約

古墳３基と古墳時代以降に営まれた集石遺構などが検出された。

５号墳は兵庫県において最も古い時期に属する「Ｔ」字形横穴式石室である。６号墳は５号墳に続く時期の無袖式石室である。２号墳は７世紀の築造で、６号墳との間には若干の時期差がある。６号墳を意識的に破壊して構築しており、５号墳・６号墳とは系統の異なる集団の造墓活動と考えられる。横穴式石室墳を破壊して横穴式石室墳を築造するという例は極めて稀である。

その他の遺構としては、中世火葬墓の存在を示唆する集石遺構・丹波焼甕・炭や焼土が見つかっている。下流の谷入口周辺には鎌倉時代の集落が存在した可能性が高く、調査区内に下流の中世集落に関連した中世墓や火葬址遺構が形成された可能性が考えられる。

兵庫県文化財調査報告　第 491 冊

丹波市

山田大山古墳群

－（砂）大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 29（2017）年 3 月 28 日　発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号
（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印刷：交友印刷株式会社
〒650-0047　兵庫県神戸市中央区港島南町 5 丁目 4 番 5 号